

---

# 優しい魔王の疲れる日々

n

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

優しい魔王の疲れる日々

### 【Nコード】

N1527X

### 【作者名】

n

### 【あらすじ】

望月鑄鶴、日本で最高とうたわれる陽明学園に通う中学三年生。見た目は背の高いイケメン？しかし魔王。超横暴母と秋葉原の神と称される父を持ちその父母にも引けをとらない姉6人と妹2人を抱えている。基本ヘタレで駄目っぽく見えるがやる時はやる男の子。そんな若干不幸？女たらし？で若干リア充？の主人公が色んな人と分かり合ったり。熱血したり。ラブコメ、彼が原因で戦争が起きたり、世界を敵にまわしたり、やっぱりヘタレるその他もろもろな物語……

## 第1話：魔王の朝（前書き）

nと申します。初めて小説書かせていただきます。誤字脱字あるかもしれません。僕の小説で笑ってくれたり楽しんでくれたりしてくれたり幸いです。

## 第1話：魔王の朝

魔王兼、一応主人公、望月鑄鶴の朝、それは四時から始まる。

「早くお弁当作らないと・・・みんな起きちゃう」

まずはお弁当作り、彼の朝はここから始まる。

なぜ四時からというと、彼の家族は8女1男の9人姉弟、父母をあわせれば11人となる。

しかし、母と父は仕事が忙しいため中々帰ってこないのだ・・・  
そして姉妹達は家事をしないだから彼が仕方なく家事をしているのだ。

次に昨日の夕飯の食器洗い、洗濯、朝食作りを進める。  
そしてどうこうしてるうちに朝の7時、姉妹達が朝ご飯を食べに来る。

3

「恐子姉おはよう」

「おはよ・・・」

一番最初に起きてきたのは長女の恐子さん。

彼女は元ヤンの総長です

現在26歳ファミレスの店長をしています。

朝起きたばかりの目付きでも一般人には睨んでる様にしか見えません。

「飯はできてるかな？」

「杏奈姉、おはよう」

このいかにもガリ勉なメガネは次女の杏奈さん彼氏居ない歴25年、弁護士なのに彼氏もできないとは・・・ある意味可哀想な人です。

「ああ〜・・・眠〜・・・」

「鶴君おはようございます」

「穂詰姉、梓姉おはよう」

ああ〜・・・眠〜・・・とか言ってるのは三女の穂詰さん、昨日のお酒が残っているそうです。しかし！

ただの飲んだくれかと思いきやきちんとした保健の先生なのです。こんな人でも教師・・・日本はどうなるんでしょうか・・・

そんな彼女の横にいる優しそうなお姉さん。

彼女は五女の梓さん、20歳にして望月家で一番頭がいい人です。現在は夏休みでアメリカのある大学から帰ってきています。

「お姉ちゃん！起きなきゃダメだよ！朝ご飯冷めちゃうよ〜・・・」

「後五分〜・・・後五分〜・・・」

急いで支度しているのは末っ子八女の神奈ちゃん、七人姉妹の中では1・2を争うぐらいの鑄鶴君を愛しています

家族としてですよ・・・？  
そしてようやくみなさんが食卓につきご飯を食べ始めました

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！見て見て！」

「ん？」

「私のこの手が光って唸る！みそ汁投げると！輝き叫ぶ！」

「ゆりみそ汁投げフィンガー！」

「えっ！？みそ汁！？」

今、鑄鶴君に意味不明などこそこのアニメの技みたいのを叫んでるのは七女のゆりさんです。彼女はギターとアニメやゲームが大好き望月家一番の元気っ子です。

あらら・・・鑄鶴君はみそ汁まみれ、それを尻目にゆりさんはご飯にガッツいてます。

味噌汁の着いた服を洗濯機に入れてきた鑄鶴君、すると？

「ふっ！なら私は結フィンガー！」

「うべふっ！」

思いつきり吹っ飛ばされる主人公こんなのが主人公ですいませんねえ。

いきなり鑄鶴君をなんとかフィンガー！とか言っ飛ばしたの  
は、

六女の結さん、高校生とは思えんダイナマイトボディ・・・  
なんともけしからん・・・彼女は剣道女子で去年の高校二年生の時、  
全日本女子高生剣道大会でみごと全国優勝をなしとげたものすごい  
人です。

しかし・・・ブラコンと言う欠点がありますはい・・・そりゃあす  
ごいですよ？はい・・・

そんな事からいつペン結さんは倒れた鑄鶴君を見て……

「つゝくんごめんね……？痛かったよね……？大丈夫……？」

ギョツと鑄鶴君を抱きしめてあげています。

「いつ！息が！死ぬ！死ぬ！」

鼻血ぶっぱなしながら悶え苦しむ鑄鶴君……結さんは気づいていません……

別に羨ましいとか、リア充爆発しろおおお！とか思ってますからね？

ホントですヨ………？

そんなこんなで朝っぱらから死にかけてる主人公の鑄鶴君。

本当に爆発すればいいのに……と思わず！

我等が主人公鑄鶴君は復活するのか！

復活しなきゃ続きません！

以上空の声でした

## 第1話：魔王の朝（後書き）

優しい魔王の疲れる日々第一話いかがだったでしょうか・・・？感想などがもらえたら嬉しいなと思っています。第二話は現在作成中です！皆さんもどうかこのリア充・・・じゃなかった！鏝鶴君を応援してあげてください！



## 第2話：魔王の登校（前書き）

全話で話した通りまあお人好しな魔王兼主人公望月鑄鶴君、そんな彼は登校でも・・・

## 第2話：魔王の登校

「ふう〜・・・やっと片付いた〜そろそろ学校に行かなくちゃな・・・」

朝から色んな意味で大変だった鑄鶴君、今から学校に行くところですよ。

今日も普通に学校に向かおうとしていると、

「おっーす！鑄鶴！また鼻血ぶっぱなしたか？どうせまたいつものなんだろう？」

この赤髪で見た目がヤンキーそうな子は赤神松人君これでも彼女が居ます、

一見はヤンキーですが中身はとても素晴らしい男の中の男なのです。

「松人・・・鑄鶴は悪くない・・・多分姉妹達に色々されたんだろ  
う・・・なんと羨ましい・・・」

「どっ！どうせまたえっちい事をしたのだろう！」

松人君の隣に居る背が低く影の薄そうな子は土村影人君、この影の薄さを利用して様々な中学生はなれした行動をするのですがその行動はまた今度紹介しましょう

そして後ろから鑄鶴君を顔を赤くしながら罵倒しているポニーテールは鑄鶴君の隣の家に住んでいるいわゆる幼なじみ三河歩さんです。顔を赤くしながら怒るとは 実に可愛いですはい

そして歩さんに怒られている鑄鶴君、羨ましいような、なんというか・・・

「おい！今日から新学期なのに初日から遅刻はできねえ！早く行くぞ！」

みんなを急がせる松人君、彼らはもう三年生、今年で最後の中学生です。

それに今日は4月の始業式、初日から遅刻しそうだなんて・・・へタレにも程があります。

鑄鶴君は登校も大変なのです・・・

「鑄鶴！岡崎に殺されなくなったら死ぬ気で走れ！」

「ええ！？死ぬの！？それって教員のすることじゃないよ！？」

「速く・・・走れ・・・！」

「私が遅刻する訳にはいかん！鑄鶴お前も付き合え！」

「えっ！？待ってー！」

朝そして登校・・・幼なじみ、実に羨ましい！

そして四人は学校に急ぎ走り出しました。

## 第2話：魔王の登校（後書き）

第二話！どうだったでしょうか！まだまだ未熟者ですしページ数も少ないです

しかし！まだまだ頑張っていきたいと思います！感想お待ちしております！

n

**第3話：魔王、進級・三年生（前書き）**

朝から遅刻ダツシユの魔王兼主人公の望月鑄鶴そんな彼は進級・・・  
したのだが・・・

### 第3話：魔王、進級・三年生

「いやあゝ間に合った、間に合ったゝ．．．あゝ疲れる．．．」

汗を拭く椀人君、実に男前です。

「ふっ．．．体力がもたな．．．い．．．!」

そんな後ろで、情けなく死にかけているのは影太君、実に滑稽ですね

「どうした！私は息なんかあがらんぞ！？お前等男だろ！しっかりしろ！」

男共三人が走り疲れてる中ポニーテール幼なじみの歩さん彼女は走りすぎたせいか服がシワシワです。

鑄鶴君ですか？歩さんの隣で立て膝で立ちつくしています

「得に鑄鶴！お前はなんだ！だらしない！」

「だっ．．．だつて．．．歩がはっ．．．速いんだよ．．．」

そんな言い訳をする鑄鶴君を見て歩さんはガツクリと肩を落としています．．．

まあ．．．うちの主人公はヘタレですしねゝ．．．

「体育館に行くぞ！早く！」

男三人を急がせる歩さん、男三人が情けない．．．

そんなこんなで体育館で始業式、まあ三人汗だくですけど．．．始業式をしている間4人が通ってる学校の説明をしましょう

別に暇って訳じゃないんですよ……？ホントですよ？  
そんな4人が通うこの学校、

「市立陽明学園」

ちなみにこの学校大学部・高等部・中等部があります。

そしてその敷地面積は愛知県の7分の4が陽明学園でその規模名声  
共に全国一位、

そしてなによりその中の選択科の多さです。

この陽明学園には、魔法科・科学科・機械科・普通科・銃器科・魔  
王科などがあり、その中でも魔王科は一般生徒は立ち寄りません、  
危険ですからね。

でも影人メモによると魔王科は女の子パラダイスだそうです！  
さすがエロフェッションナル！

そしてなんだかねで始業式は終わり。

「ほお〜今年は4人同じクラスか〜 楽しみだな〜」

「最後の一年で4人一緒か〜」

「このクラス……良い……！」

「どうなる事やら……」

うきうきしてるバカ三人とあぁどうしよう……という感じのポニ  
ーテールが1人、

はてさていったいどうなる事やら……

-----  
エロフェツシヨナル俳句

ミニスカは、男のロマンの、第一線！

影太



第3話：魔王、進級・三年生（後書き）

第三話・・・いかがだったでしょうか！まだ三話目もつとバリバリ書きたいです！

エロフェッショナル影太俳句・・・もしかしたらまたやるかもしれません！

ではまた四話で〜

#### 第4話：魔王と遅刻して来たスケバン、荒神さん（前書き）

赤神君の彼女？が登場！そしてホームルームからいきなり遅刻者が！？そこに現れたのは土村君と縁の深いスケバンさんでした。

#### 第4話：魔王と遅刻して来たスケバン、荒神さん

四人が始業式を終え帰ってきましたすると・・・

「松人」 遅れそうだったんだって？本当に馬鹿だよねぇ」

「はぁ！？仕方ねえだろ！俺は忙しいんだ！ほら！てめえは6組だろ！ほら行った行った！」

「今年は松人と別かあゝ寂しいな・・・」

ショートヘアーのあの子は6組の鈴村詠歌さんとしてもスポーティな女の子、松人君の幼なじみで、

付き合いは幼稚園からです。いやあ・・・羨ましいいったらありやしない・・・

そんな松人君の彼女の鈴村さんは1組にとって強敵です。なにせスポーツ万能なのですから！

「今年はお前無しで球技大会、体育大会、優勝してやるぜ！」

「へえ」 じゃあ楽しみに待ってるよ」

笑いながら6組に戻る鈴村さん、実にたのしみという感じです。

そんな後ろ姿を見ている松人君、ぶっ倒すぞ！というオーラがバンバンでています。

四人はクラスに入り席に着くと・・・？

そして先生がきました。

「席に着いてください！ええ」コホン！今日からこの三年一組の

担任になります！白鳥要です！担任1年目ですが、どうぞよろしくね」

土村君の眼光が半端じゃありません！影太AIがバリバリ働いています！

「あら？席が一つ空いてますね？荒神麗花さんですか？」

土村君が尋常じゃないくらい焦っています。

どうしたんでしょうか？

その時、バン！と音を立てて教室の扉が開きました。

「荒神だ・・・」

そこには見るからに赤神君と同じ雰囲気のスケバン少女が仁王立ちしながらどーんと構えています。

遅刻した人とは思えないぐらいのオラオラオーラのものが出ています・・・

「席は・・・土村君の隣ですね。」

あまりにもものオーラで先生もびびっちゃってます・・・

土村君の顔色が真っ青です。お腹でも痛いのでしょうか？

「土村あまた同じクラスだな！赤神に望月、歩までいんじゃねえか今年も宜しくな！」

「疫病神・・・」

「ああ！？今なんつった！！」

土村君スケバン相手に「疫病神・・・」って・・・流石エロフェツシヨナル覚悟があります。

このスケバンさんは荒神麗花さん・・・はい、そうです。彼女は不良です。でも本当はピュアな女の子なんです。本当ですよ？

そんなこんなで先生があたふたしている中、土村君は荒神さんに胸ぐら捕まれています・・・お気の毒に、

そんなこんなでホームルームも終わり荒神さんを加えて5人しか居ない教室で何が始まる事やら・・・

#### 第4話：魔王と遅刻して来たスケバン、荒神さん（後書き）

優しい魔王の疲れる日々、第4話いかがだったでしょうか。縁の深  
いと書きましたがまたそれは番外編？で、感想などお願いします・  
・！来週テストなので、来週は書けるかどうか・・

## 第5話：魔王と4人の作戦会議（前書き）

ついに主要メンバーがそろった？球技大会までもう少し、三年生初  
めの学年競技しかしそれは、始業式から10日後・・・そこで赤  
神くあかがみ>君からの作戦が・・・？

## 第5話：魔王と4人の作戦会議

「さあて・・・あと十日で球技大会か・・・はええな、今年は確か・・・」

「野球・・・」

話始めた赤神君に土村君が割り込みます。

「そうか、野球か・・・最低9人は必要だな・・・俺達が狙うのは優勝だ！その為に作戦をたてた！」

「桧人！まさルール違グボア！！！！」

赤神君に殴り跳ばされる鑄鶴くいつる君、4、5Mは飛びましたね、さすが不良！

「これはルール違反じゃない！正当な作戦だ！ほら、ルールブックを見てみる。」

自信満々とルールブックをみんなに見せる赤神君、どんな事が書いてあるのでしょうか？

（第三学年普通科球技大会について）

- ・競技は野球です。
- ・大会は5日間行われます。一日一試合、計五回戦となります。
- ・各クラス9人を男女問わず選出して下さい。
- ・機材への細工、改造等は決して行わないでください。



・バット、ボール、クラブ、ユニフォームは学校側が当日用意させていただきます。

・金属物検査などを試合前に行わせていただきます。

・乱闘等は両チーム出場停止となりますのでご了承ください。

注意：バッティンググローブは希望者のみ貸し出しします。

「だ、そうだ。」

「んで？だからどうしたんだ？」

荒神くあらがみくさんが聞き返します。

「お前等、気づかないのか？このルールブックの抜け穴に。」

「抜け穴？そんなものあるのか？」

三河さんくみかわくさんは頭に？を浮かべています。

「む……！飲み物……！」

土村君がハッ！とした顔をします。

「そうだ、飲み物だ！さすがエロフェッショナル！」

「エロは余計……」

ポカ〜ンとしている三人、思いついてウキウキしている一人、ブツブツ言ってるエロフェッショナル。

「お前等、まだ分からないのか？飲み物に細工するのさ！」

「えっ？でも細工はダメじゃ・・・」

あたふたしている鑄鶴君、それを見てため息をつく赤神君、仕方ねえな〜と言わんばかりのため息です。

「飲み物は機材じゃねえ！個人またはクラスで用意する物だ！それに細工しようと改造しようと！俺達の自由だろ！！！！」  
スポーツドリンク入れようが炭酸飲料入れようが自己責任！つまりこっちの自由ってこつた！！」

卑怯です！下劣です！最低です！彼女持ちとは思えない悪業っぷりです。

土村君もコクコクとうなずきます。

「さあお前等耳を貸せ！これから10日間俺含めお前等4人には任務がある！それを今から伝える、各自耳を貸せ。」

なにやら色々な作戦を思いついた赤神君、さた10日後の球技大会にむけてなにをするのか・・・

「さあ！後はクラスの連中にも作戦を言い渡す！実行は今日からか明日からでも良い物もある。それじゃあ各自解散！」

それぞれ五人が任務を言い渡され帰宅していきます。

土村君は荒神さんと帰るらしいです。土村君はとてつもなく嫌がっていますけど、

「ほら！影太くえいた〜！行くぞ！」

力強く土村君を連れて行く荒神さん、  
そして、我らが主人公、鑄鶴君は三河さんと帰るそうです。青春で  
すね。

「十日後の前にもきちんと授業はあるからな！・・・その・・・  
一緒に帰らないか・・・？」

「一緒に？別にいいけど？たまには二人で帰るのもいいしね。」

別につて！色々な意味で乙女心を理解してほしいと思う、三河さん  
でした

ウチの主人公は鈍感だな〜と思う空の声でした。

**第5話：魔王と4人の作戦会議（後書き）**

第5話いかがだったでしょうか？感想いただけたら感激で泣きます

W  
W

それではまた次回の六話で〜

## 第6話：魔王と球技大会（前書き）

早くも10日間がすぎ、球技大会に・・・果たして赤神君の策は成功するの！

そして我らが主人公、望月くもちづき君の活躍はあるのか！

## 第6話：魔王と球技大会

「さあて！お前等！これから俺達は、球技大会という学園の競技に参加する！そこでだ！まずはこの球技大会に出る勇氣ある9人を紹介する！」

教卓で大声を出しながら張り切る赤神くあかがみく君、まさにやるぞー！っていう感じです。

そしてグラウンドに普通科中等部3年生が集まります。

開会式、普通科校長の長つたらしく挨拶を聞き終え

「エロフェッショナル！この大会の優勝かビリかはお前に掛かっている。絶対にしくじるなよ！」

「任せろ・・・後エロでは無くプロ・・・」

ボソツと呟く影太君くえいたく君、もつどつちでも良いと思います  
がねえ？

そしてだいたい一回戦、

2組対4組

あら？どうしたんでしよう、どちらも出てきません、

「なっ！腹が！腹があー！」

「しっしぬ！死ぬううううう！」

あららら・・・どうやら下剤か何か入っていたそうですね・・・  
2組も4組も男子生徒だけがのたうちまわっています。

「女子に手を出すほど・・・落ちちゃいない・・・」

あつ下剤を入れた犯人はエロフェツシヨナルだったそうです。それを見ながらうんうんと頷く赤神君、

まさにゲスの極みです。こうして2組と4組は試合続行不可能となり、失格となつてしまいました。

この珍事で、一時中断という事になり、そして二回戦3組対5組になりました。

「おい！てめえ！どういう事だあ！？俺達の水筒に下剤入れやがって！」

「はああ！？それはこつちの台詞だ！てめえらあ！」

あらあら・・・喧嘩が始まつてしまいましたね・・・それにしてもあの赤神君の顔、悪の総大将のような恐ろしくゲスな顔です。奴に彼女など与えた神様が実に愚かに思えます。

「さすがだな、エロフェツシヨナル！最高の出来だ！さあ！後は6組を落とすだけだ！！！！！」

「このくらい・・・当然・・・」

フン、と鼻から息を出す影太君、そして3組と4組は乱闘退場ルーで失格残るは6組と1組となりました。そして6組にも作戦を決行したそうです。不戦勝で優勝しようだなんて、まさに最低ですね、この男はウジ虫イかです。そんなもう優勝はもらったなという感じで高笑いしてる赤神君、  
すると・・・？

「へえ〜 桜人〜 作戦は練ったんだ〜でも・・・私達には通用しないよ?」

クラス用の水筒の飲み物をドブに捨てる鈴村くすむら〜さん、

「さすがだな、お前には通用しなかったか・・・詠歌くえいか〜! 全力できやがれ!」

早くも火花が散っている二人、一色即発な感じですよ。

そしてお昼休み、1組と6組以外は競技が終了してます 一人のゲスによつて

「さて・・・午後は全力で行くぞ!お前等!覚悟しろよ!」

「おう!」

こうして昼休みも終わり、ついに1組対6組!球技大会最終決戦です!

それでは1組のオーダー紹介しま〜す

- 1番 セカンド 土村影太
- 2番 キャッチャー 赤神桜人
- 3番 サード 三河歩
- 4番 ショート 荒神麗花
- 5番 ピッチャー 望月鑄鶴
- 6番 ライト 福原修
- 7番 センター 青木直人
- 8番 ファースト 仲谷昇平
- 9番 レフト 白鳥要



「わっ私も参加するんですか！？教師が参加しても良いのでしょうか・・・」

「白鳥先生、別に教師が参加しちゃうダメとか書いてねえだろ？それに先生にも作戦に参加してもらいたいしな。」

「はっ・・・はあ、まあ分かりました！私も頑張ります」

少し困る先生、可愛いです！あと三歳ぐらい若ければもっと可愛いですよ！はい！

「さて！プレイボールだ！」

「椋人！負けないわよ！」

そして初回、6組の先攻、ピッチャー望月！投げました！

キイイイイイイイイイン！

ホムラン！ って！どうしたんですか望月君！？ホームラン打たれちゃいましたよ！？

「椋人！どういう事だよ！ホームランだよ！？ちゃんとサインしろよバカ！」

「そっちこそ！ちゃんとコントロールしやがれ！このドアホがああああああああ！」

あらあら息が合ってなくて喧嘩が始まっちゃいましたね！

「つたく！こんな事で喧嘩してる場合か！ほら！元野球少年さつさと抑えるぞ！」

さすが赤神君、鏝鶴君をなだめています。

そして次のバッター、次はど真ん中のカーブの指示、鏝鶴君！振りかぶってなげました！

カキイイイイイイイイイイイイイン！

「バットを寄越せええええええええええ！こいつを殴つてから試合再開だ！」

「それはこつちの台詞だあ！この能無しキャッチャーがあああああ！」

またホームランそして喧嘩、この二人は・・・バカの塊ですねえく・・・

「能無しキャッチャー・・・次から本気で投げるよ？いい？」

「あつたりめえだろ！ばつちこいや！」

バンバンとミットを叩く赤神君、鏝鶴君も顔が本気になります。

そして場が緊張に包まれ、そして・・・鏝鶴君の表情が変わりました。

さあ！ここからが反撃です！

以上、空の声でした！



## 第6話：魔王と球技大会（後書き）

第6話如何だったでしょうか？感想いただけたら発狂します！7話はきちんとした試合をお送りしますのでよろしくお願いします！

## 第7話：魔王と反撃開始！（前書き）

とつてもゲスな作戦が成功したはいいが初回からいきなり2失点の大ピンチそこでついに、魔王兼主人公、望月鑄鶴くもちづきいずる  
>の本領発揮！？

## 第7話：魔王と反撃開始！

「鑄鶴くいづる>俺たちは勝つ！めいっばいこい！俺が全部捕ってやる！バツクもやる気を出してくれている！頑張れよ、元陽明学園小等部野球部のエースさんよ。さあ！お前等あ！しまっていくぞおらあ！」

やる気満々の赤神くあかがみ>君、その闘志が1組ナインにも伝わります。

鑄鶴君は自分の胸をトントンと叩きます。

「抑える・・・抑える・・・！」

「なんなのかしら・・・望月君さっきと雰囲気じゃまったく違う」

思わずびびってしまう赤神君の彼女、鈴村くすむら>さん、そりゃそうです。今、鑄鶴君はとてつもなくオーラのものを出しているのですから。

そんな鑄鶴君の第1球目、ズバンツ！と音をたてるミット、赤神君が目を見開いて驚いています。

「いつ！今の何?!?速すぎるんだけど！」

慌てる鈴村さんそんな鈴村さんが気にしている球速、みんながおずおずとバックスクリーンを見ながら、  
142?と表示されていました。学校にバックスクリーンって・・・この学校金持ち過ぎですよ〜・・・学園長の顔が見てみたい。

「私だつて負ける訳にはいかないのよ！」

燃え上がる鈴村さん、スポコン小説じゃないんですけどね・・・  
そして・・・

第2球目！横に歪むように曲がるスライダー、かんなの女の子が打てるはずもなく・・・

鈴村さんはあつけなく三振、悔しがる鈴村さんだからスポコンじゃありませんから！

そしてついに初めて！いややっとな！1組の攻撃！一番土村くつちむら君！

「エロフェツシヨナル！頼んだぞ！」

「エロは余計・・・」

相変わらずの返答、そして鈴村さんの第1球、土村君バントの構え！

「えっ？いきなり!?」

バットに当たりポテポテと転がる球、鈴裏さんが急いで投げるもさすが我らがエロブリティッシュです！そして2番赤神君、もちろんホームラン狙いしかしその鈴村さんの赤神君に対する第1球、

「盗塁だー！キャッチャー！」

土村君の盗塁を阻止しようとしたキャッチャー、しかしそこにはボールは無く、バックフェンスをボールが直撃していました。そして土村君がホームイン、赤神君は二塁で止まりました。

6組ー1組

「しゃあ！見たか詠歌くえいか！お前のなまくら球なんか屁でもねえぜ！」

余裕こきまくりの赤神君、すると・・・？

「誰の球がなまくらだつて・・・？脛人くかいと・・・人をバカにするのもいい加減にしなさい・・・」

暗黒のオーラのものをまき散らす鈴村さん、なんかもうヤンデレ末期の様な風貌です。

そして3番バッター三河くみかわさん、リードする赤神君、その時！ビュン！と音をたててボールがサード方向に、

「まつ・・・まじかよ!？」

牽制でまさかまさかの赤神君がアウト、相変わらずヤンデレ顔の鈴村さん！怖いです！怖すぎます！

構える三河さん、そして第1球、ビュン！と音がたちます。一応三河さんも女の子打てるはずがありません。そしてバックスクリーンを見る1組・6組の皆さんバックスクリーンには

155？

という数字が表記されていました。中学生で投げられる球ではありません、もちろん打つ事も難しいです。ヤンデレ状態って恐ろしいですよ・・・

そして4番荒神くあらがみさん、そんな不良少女でも打てる筈もなく三振に終わってしまいました。



そしてここからは両チームエース？の投げ合いです。  
両チーム8回まで何も起こらず鑄鶴君と鈴村さんが三振ショーとい  
う試合展開になり現在二人の成績はというと、

望月鑄鶴

三振15個

被安打4本

四死球0

失点2

自責点2

投球数98

鈴村詠歌

三振23個

被安打2本

四死球0

失点1

自責点1

投球数104球

そしてついに9回表最後の6組の攻撃はというと圧巻の鑄鶴君が三  
者連続三振にとり9回裏になりました。まだヤンデレ状態の鈴村さ  
ん、そして先頭バッターは赤神君、そこで土村君があるボタンを押  
しました。すると・・・？

「詠歌！許してくれ！俺はこんな卑怯な真似はしたくなかったんだ  
！俺はどうしても優勝しなければならぬ！詠歌、頼む！勝たせて  
くれ！優勝したら・・・俺はお前を嫁にするつもりだ！」

「は・・・？」

一番驚いているのは赤神君そりゃそうですよ。自分がアホな事言っ  
てるんですから、

それを一番聞いていたのは・・・

「そうだったの・・・？ 脛人、ホントう？」

上目使い+ものすごい至近距離で赤神君を見つめる鈴村さん、それはまるで子犬のような瞳です。

「うっ……ちがつ……」

ゴゴゴゴゴゴ……というオーラの出来そうな鈴村さんを見て赤神君はというと？

「そうだ分かったか？なら早くベンチに戻れ後で迎えに行くから（棒読み）」

「うん 待ってるね」

うわぁ……この男最低ですね！最低すぎます！騙される鈴村さんもそうですがこの男最低です！

そして6組はスローボールしか投げられない小が登板その第1球！

「ちくしょおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

ギイーン！と音の鳴ったバットから放たれた特大ホームラン、まあ今までの悪行の報いですね。

涙を流しながらダイヤモンドを走る赤神君 そんなに結婚が嬉しかったんですかね

そして土村君が塁に出て、ヒロイン？二人は三振、いいところを跳ばされた主人公が最後にホームラン

という事はなく、荒神さんがホームランを打ってしまいサヨナラ勝ちを収め見事1組は優勝しました

一人を除く1組メンバーは歓喜に沸きました……

しかし鑄鶴君はその後、何が起こるかも知らず  
仲間達と喜びを分かち合うのでした・・・

**第7話：魔王と反撃開始！（後書き）**

さあ！球技大会！見事にグダグダですが完結しました！だい8話は現在考え中です！これからもガンバっていきますので！応援していただければいいかなと思います

## 第8話：魔王と謎の魔王科生徒（前書き）

祝！1組球技大会優勝！打ち上げなども終わり魔王兼主人公、望月  
鑄鶴君くもちづきいづるくは、クラスメイトで幼なじみも三河歩く  
みかわあゆみくさんと仲良く帰る所です。しかし二人が家まで着き  
かけた時、事件は起こったのです。

## 第8話：魔王と謎の魔王科生徒

「今日は疲れたな、ほら」

自動販売機で飲み物を二本買い鑄鶴君に一本ジュースを投げ渡す三河さん

「あつありがと、珍しいね歩が飲み物奢ってくれるなんて・・・」

「私がお前に物を奢ってはいけないのか!？」

波瀾万丈の球技大会が終わり二人で帰る三河さんと鑄鶴君、そんなことよりも!

鑄鶴君!素直に受け取りましょ!相変わらず羨ましい。

「今日はお前のおかげで勝てたようなものだ。よっ・・・よくやったな・・・」

「歩、ありがと　また明日は学校かいや〜やっと褒められて嬉しいよ」

「そっ!そうか!わっ!私に褒められて嬉しいか!」

あまりの恥ずかしさに顔が真っ赤になる三河さん青春ですな〜

もう家の近くまで来てしまいました。しかしまだ真っ赤なお顔の三河さん家まで後5m

という所で鑄鶴君が何かに気がつきました白いマントを羽織った人が望月家前に立っていました。

「ええつと……家になにか用かな……？良かったら家に入れるけど……」

「……………結様に会いに来た……………」

「結姉？今学校でさまた明日か帰ってくるまでまつ……………！」

鑄鶴君の腹にいきなり鋭い蹴りが食い込む、そしてその白マントが重い口を開いた

「その方の名を気安く呼ぶな……弟というだけの存在で……」

「歩……………！家に入れ！早く！」

「鑄鶴！」

「早く！入れ！」

怖々と家に入る三河さん怯えきつた目をしています。鑄鶴君は臨戦体勢です。

「お前の存在が我らが将軍に迷惑をかける……お前には死んでもらわなくてわな……お前が将軍の邪魔になり……陽明を滅ぼすきっかけとなる前に……」

「じゃあ……君は結くむすび>姉のなんなんだ……」

「私はあの人の側近であり部下だ……」

「君だつてその程度じゃないか！それで結姉を俺から離そうとするんだ！」

「お前は將軍様にとって邪魔な上、迷惑だ他人にもお前の周りの人間も・・・今までに無かつたか？お前のせいで死んだり、傷ついたりした人間が・・・」

「黙れ・・・」

「そしてお前が殺したようなものだ。なあ？魔王」

「僕は魔王じゃない・・・その口を塞ぎやがれ・・・」

声が冷たく小さくなる。

「お前は魔王さ、左胸を見ても・・・刻印があるではないかそれとも無いとしらを切るのか？」

それとも自分を魔王と認めるのか？」

「その口を塞ぎやがれええええええええええええええええつ！」

叫び声を上げ殴りかかる。しかし白マントはそれを何も無かつたかのようにヒラリとかわす。

「なぜ怒る？事実ではないか！お前が周りを苦しめ！悩ませ！終いには殺していく！」

それが魔王だ！それがお前だ望月鑄鶴！」

「僕は魔王なんかじゃない！僕はただの人間だ！望月鑄鶴だあ！」



「その考えが周りを終いへと導く！お前が消えゆけば周りは幸福になるのだ！」

ドゴツ！つと望月鑄鶴の鳩尾に強くしなやかな右腕が入る。蹲る鑄鶴君を尻目に白マントは言う

「自分を魔王と認めたくない・・・なんという傲慢そして弱さ、自覚の無さ・・・さあ・・・これでお前は死ねる大丈夫だ家族には留学にでも行ったとでも言っておく・・・」

大きな剣を懐から抜き出す。その時・・・

「なぜだ・・・なぜ立つ！魔王とはいえ覚醒無しに！普通化の人間では普通耐えられん程の打撃を打ち込んだ筈だ！そなのになぜ！」

倒した筈の男がそこに・・・確実に倒した感触があった。それなのに男は立っている。

その上半身には左胸にある筈の刻印を漂わせて

「俺は・・・魔王じゃない・・・」

「認める！それが刻印だ！お前は魔王だ！」

その時、右手から黒い閃光が白いマントへと飛び襲う、

「暗黒魔法だと・・・！？魔法科ではないはず！」

この男はおかしいそう思い恐怖したその時、男は倒れた。そこには彼の姉の結が居た。

「命令違反とは・・・随分とでかくなつたな」

「將軍！もっ申し訳ございませんっ・・・！」

「謝る位ならはじめからこの様な事をするな・・・分かつたか・・・もう今日は寮に帰れ」

「かしこまりました・・・申し訳ございません・・・」

トボトボと帰っていく白マント、鑄鶴君を抱き抱え、結さんは家に入りました。

「右手をかなり酷く打撲してるね・・・愛弟をこれ程傷つけるとは・・・」

鑄鶴君の手当をしている望月家の三女・穂詰くほつみくさんととも弟思いのいいお姉さんです。

一番そわそわしているのは次女の安奈くあんなくさんそわそわしすぎです。

「うっ・・・いてて・・・うっ・・・家か・・・」

「おお！鑄鶴！起きたか・・・良かった・・・」

「僕は・・・あっ！夕飯の支度しなきゃ！」

「お兄ちゃん神奈くかなくがやっておいたよ」

鑄鶴君の代わりに夕飯を作ってくれたのは八女の神奈ちゃんです。そして今洗濯場から誰かがでてきました。

「おっ……！お兄ちゃん！ゆりっ！ゆりが洗濯したいたよっ！ぜえぜえ……」

猛烈な速さで洗濯を終了させて息がただ漏れの子は七女のゆりさんです。

「おい……大丈夫かよ……虐められたか……？」

顔に似合わず長女の恐子さん、意外と心配性なんですよ？ほんっと人は見かけによりませんねえ……  
こんな優しい姉妹方に囲まれてうらやまし……じゃなかった！幸せそうですね！ほんっと羨ましい……  
しかしあの白マントそして魔王科の謎……いったいなんなのでしようか……

以上空の声でした

## 第8話：魔王と謎の魔王科生徒（後書き）

今回第8話！いかがだったでしょうか！少しシリアルさというかバトルを加えてみました！感想など頂けたらうれしいです！9話はいつになるだろう？・・・

第9話・魔王悩むそして・・・（前書き）

昨日の魔王科の白マントの闘いで傷を負った鑄鶴くいづる君、それでも学校に行きます。しかし彼の悩みは尽きません。

## 第9話：魔王悩むそして・・・

「僕は魔王なんかじゃない・・・僕は・・・」

昨日の事が忘れられないのでしょうか、鑄鶴君は悩んでいます。

自分の情けなさに苛立ち始める鑄鶴君、なんといいない負の感情が抑えられません・・・

「なぜ怒る？事実ではないか！お前が周りを苦しめ！悩ませ！終いには殺していく！」

それが魔王だ！それがお前だ望月鑄鶴！」

記憶が鮮明に醜く蘇る

「僕は・・・居ない方がいいのかな・・・僕が居るとみんなが死んでしまう・・・くっ・・・うっ・・・」

あまりの悲しさに泣いてしまう・・・ただ自分の非力・情けなさではない。ただ自分が魔王というだけ・・・それだけで嗚咽、涙、感情が溢れ出してくる。

「自分を魔王じゃないって言えばいいのよ　そうすればあの人達も言わなくなるって」

望月家三女の穂詰くほつみ>さんが鑄鶴君にフォローを入れます。  
そのフォローに鑄鶴君は、

「うるさいよ・・・穂詰姉に何が分かるんだよ！僕に関わらないで

くれよ！この飲んだくれ！」

あらら・・・ 鑄鶴君、そういうことは言っちゃ駄目でしょう・・・  
すると・・・ 穂詰さんはギョツと鑄鶴君を抱きしめ・・・

「私達は家族でしょ・・・ とくに鑄鶴は長男なんだから！こんな事  
で泣いたりしてどうする！娘に死ねって言われて泣く私たちの父さ  
んより酷いわよ!？」

これも姉の愛情というやつなんですかね・・・ 望月父はどんな人な  
のでしょうか・・・ 少なくともガラスのハートですね。

「でも・・・ 僕が居たら・・・ みんな死ぬかもしれない・・・」

「死なないわよ 死ぬわけじゃないじゃない！私たちの母さんを思い出  
してみなさい！」

表情が変わる鑄鶴君、コクコクと頷きました。

「死ぬわけないよ・・・ ね」

「はい！そうと決まったら朝ご飯作りなさい！みんなお腹すいてん  
だから！」

「そうだね よし！朝ご飯つくるか!！」

やる気の入る鑄鶴君、微笑ましいです

彼の朝は大変です。それでも彼は今の生活が大好きです。彼が彼ら  
しく生き暮らしているのですから、

そして朝の準備みんなの出迎えも終わり鑄鶴君も学校に行きます。

「鑄鶴〜！おせえぞ〜」

「遅い……！写真5枚も撮れた……」

「鑄鶴……すまなかつた……私は……」

「いいんだよ 気にしないで、歩がした事は正解だよだから、ね  
気にしないで。」

「何かあったのか〜wwお二人さんww」

「怪しい……」

「なっ！何も無いから！うん！早く行こう！遅刻しかけるよ!？」

「そうだな 行くか!」

今日も元気で四人が学校に走って行きます。まさに青春って感じですね〜 こうして魔王兼主人公の望月鑄鶴の一日がスタートするのです。

そのころ……陽明の普通科のある部屋では……

「魔王が普通科に居る？冗談でしょ？」

眼鏡をかけた男が口を開く



「会長、冗談ではありません、これをご覧ください。」

冷静沈着に秘書らしき女性が答える

そこには、昨日の家の前での鑄鶴君の姿が・・・

「いやいやいや！CGでしょ！CGだよ！絶対CG！」

「何回言ってますか・・・困った人ですね・・・」

「普通科に魔王か・・・困ったな・・・」

「どうしますか？」

「相談は無し！うん！魔王が普通科に居てもいいじゃないか！それに僕も普通じゃないしね！」

「自信満々に言われても・・・」

「でも一度会ってみたいなあ・・・僕は圧倒的普通者だからね 彼に敬遠はされないでしょ」

「はぁ・・・この駄眼鏡は・・・」

第9話：魔王悩むそして・・・（後書き）

第9話いかがだったでしょうか！そろそろ番外編などなど作っていきたいと思っています！感想等々お待ちしております！

第10話：魔王と陽明学園普通科生徒会長（前書き）

ついに！主人公兼魔王の望月鑄鶴くもちづきいづるく君の通う陽明  
学園普通科のボス！いえ生徒会長が鑄鶴君に会いに来ました・・・  
はてさてなにが起こる事やら・・・

## 第10話：魔王と陽明学園普通科生徒会長

―普通科生徒会室―

「嫌だ！嫌だつたら！僕は会いに行かないよ！？絶対行かないしめんどくさい！会長命令で他の生徒に接触させてよ！」

椅子に居座つたまま離れない人が居ます。あの駄々こねながら暴れているのは我らが、陽明学園普通科

生徒会長 風間一平くかざまかずひらく君です。女つたらし眼鏡！オタク兼生徒会長と駄目駄目で残念な人です。

「あなたは会長でしょうが！少しは側近である私の身にもなつて下さいよ！誰が学園長にあなたの駄目っぷりを教えてあげてるんです！？学園長もガツカリされてましたよ！昔は良い子だったって」

「雛罌粟くひなげし！僕はね！？駄目を演出してるんだよ！普通に駄目な人間おぼふおおおおお！！！」

跳んでいく駄目会長それを蹴り飛ばし椅子から降ろしたこの方は、雛罌粟涼子くひなげしりょうこくさん、眼鏡っ娘で普段はクールで売っています。駄眼鏡の側近で毎日苦労しているそうです。

「行ってくださいね・・・普通の事ですよ・・・？普通の！！！！！」

「分かった！行く！行くよ！行けば良いんですよ！・・・そんなに怒るから小じわとか出来かけてるんだよおい！」

「何ですか 誰のせいでそういう事気にしているか分かってますか

「  
もう一辺言ってみるやオーラの出てる雛罌粟さん恐ろしく怖いです。  
そして昼放課普通科の皆さんの大移動が始まりました。」

「会長、望月君が1人になった所をかつさらってください。」

「はいはい・・・ええ〜つと・・・へえ〜あれが魔王か・・・  
っ!?彼女と飯か!?リア充爆発しろ!」

なんとという負け犬台詞でしょうか色んな意味で哀れです。 鑄鶴君は  
三河くみかわ>さんと相変わらずリア充しています うらやましっ  
たらありゃしない・・・

「いつ!鑄鶴!きつ!今日はべっ!弁当を作ってきてやったぞ!?  
感謝するがいい!」

照れ隠しが旨くいつてない三河さん、完璧に浮いちゃってます。

「ありがとね歩 今日はお弁当自分のだけ作るの忘れちゃってさ〜  
・・・助かるよ〜・・・」

やった〜!という感じの鑄鶴君幸せそうな顔をしています。よつぽ  
どお腹が空いていたのでしよう、もう食べ始めちゃってます。

「いつ!鑄鶴!口をあっ!開ける!あっ〜あーん・・・あれ・・・  
?」

一瞬で自分の視界から鑄鶴君とお箸で持っていた卵焼きが消えてしま  
まった事に動揺を隠せない三河さん、1人寂しくお弁当を口にしま

す。

そんな消えた卵焼きと鑄鶴君の行方は………駄眼鏡の隣に居ました。

「君が鑄鶴君？中等部の生徒にしては大きいね〜177cmぐらいかな？」

まじまじと鑄鶴君の観察をしだす風間さんちよつとキモイです。あ、言っちゃった。

「あなたは……？バッチで見たら普通科の方ですけど……」

おどおどする鑄鶴君さすがの鑄鶴君も動揺を隠せない様子。

「よくぞ聞いてくれた！僕はこの陽明学園普通科高等部生徒会長！風間一平である！」

決まった………という感じの駄眼鏡さん、鑄鶴君の口がポカーンと開いています。

「ええつと……まず僕が質問するから答えてね？嫌なのがあつたら答えなくてもいいから」

「えっ？あつはい」

「1、君は魔王ですか？」

「魔王じゃないですし魔王になる気なんかさらさらありません」

「2、体育大会には出たい？」

「出たいです！是非とも！普通科に貢献したいです！」

「最後！3！あの女の子は彼女！？」

「あれはただの幼なじみです！なんでですか！？」

あたふたする鑄鶴君若干顔が赤くなっています。

「うん それだけこの3つが聞きたかった。今日はこれでおいとまするよ まったね」

帰っていく駄眼鏡さん、ポカーンとする鑄鶴君、なぜですか？  
普通科の人間、会長といつても空に浮くのですから、そして

―生徒会室―

「ですからそういう事と・・・まだ魔王でないという事は、覚醒無し一般人という事ですね？はい分かりました了解です。」

駄眼鏡からの通信と切る雛罌粟さんまだやる事は残っています。今日も大変です。

・  
・  
「まだ、まだ魔王でないという事はあっている・・・体育大会で何か起こるかもしれませんね・・・」

繭をしかめる雛罌粟さん、そんなに睨むと小じわが小じわがあああああああああ！

そんな事はさておき、怒った三河さんをなんとか授業中にも上機嫌にさせようとする鑄鶴君・・・

見苦しいですね・・・  
そして放課後、陽明学園のどこかで会議が開かれました。



第10話：魔王と陽明学園普通科生徒会長（後書き）

第10話いかがだったでしょうか！次回は各科の会長さんが出る！  
かもしれない！ではまた次回で感想など頂けたら・・・

発狂します！

第11話：居残りさせられた魔王と陽明学園密会・・・？（前書き）

授業も終わり帰るぞ〜ムードだった我らが主人公、望月鑄鶴くもちづきいづるく君しかし、クラスの担任の白鳥くしらとりく先生に教室に残されてしまいます。

その頃、陽明学園某所では、各科の会長達の密会が行われようとしていました。

第11話：居残りさせられた魔王と陽明学園密会・・・？

チャイムが鳴り今日の学校の授業が全て終わりました。もう帰るぞムードの皆さん、赤神くあかがみく君が鑄鶴君と土村くつちむらく君と一緒に帰ろうと誘おうと声をかけます。

「鑄鶴く影太く帰るぞく？」

「・・・今日は荒神くあらがみく誘われてしまった・・・死ぬかもしれない・・・」

「ごめん松人くかいとく！先生に教室に残れって言われちゃってさく・・・ごめん！」

「二人とも無理か、一人で帰るとするか」

二人の用事などを聞きその場を立ち去ろうとする赤神君、その時！6組から猛スピード走ってくる何かを目にしました。するとその何かは赤神君の前に止まり言葉を発しました。

「松人く 一緒に帰ろく」

そこに居たのは6組の赤神君の彼女さんの鈴村くすずむらくさんが居ました。

「何でお前と帰らなきゃいけないんだよ！お前等！？違う！これはだな！？」

焦る赤神君一部始終を皆さんに見られてしまいました。

「赤神いゝ……てめえゝ……リア充しやがってえゝ……」

1組の非リア充男軍団＋鏗鶴君と土村君が赤神君を殺気で満ちた目だ見ています。すると詠歌さんはそんな皆さんの前で……

「松人……ぎゅうつてして……」

爆弾を投下しました。確実に核弾頭の域を超えた爆弾が落下しました。それを見て刃物やらカッターやらほうきなどを構える非リア充諸君、

「詠歌くえいか>！俺から離れる！頼む！離れてくれ！離れてくださいっ！」

「松人お願い……あの日の続き……して……」

まるで子犬の様な甘えた声を出す鈴村さん、この現場を見て黙ってる1組の男は誰もいません。

「赤神を殺せええええええっ！骨、いや！細胞も残すな！とにかく殺す事だけを考える！」

「ちいいいいっ！どいつもこいつも！俺は無実だ！何もしてない！」

猛反論する赤神君、そこに鈴村さん横槍が飛んできました。

「松人が……したいって言ったから……」

猛ダツシュ！1人のリア充が今猛ダツシュしました。

「お前等あつ！あの野郎を許すなあああ！全軍突撃い！」

「桧人はやつぱ面白いや 望月君、居残りガンバってね」

ニコツと笑う鈴村さん、嘘だったみたいです。

鈴村さんが桧人君を追い走り去っていきました。そうして今、教室には鑄鶴君と土村君しか居なくなっていました。

「影太？帰るぞ？望月は居残りか？ご苦労なこつた・・・まあがんばれ！行くぞ影太！」

スケバン少女の荒神さん、掃除のおさぼりから帰って来ました。影太くんは鞆を持って、

「・・・鑄鶴・・・頑張れ・・・！」

と、友達らしい事を言ってくれました。

なにかと心配してくれている二人のそんな優しさに鑄鶴君もこれからどんな居残りが待っているようにとも乗り越えていけそう！という雰囲気です。

すると、担任の白鳥先生が入ってきました。相変わらずの白衣です！ナースっぱいです！一応理科の先生ですからね！

「望月君・・・先生はほんとの事を言っしてほしいんだけど・・・言いたくなかったら答えなくていいからね・・・？」

重苦しく会話をはじめると白鳥先生、鑄鶴君の心の中に緊張が生まれます。

「何ですか・・・？基本的に答えられる事は答えますけど・・・」

「あのね・・・先生は望月君の事を大好きよ？もっ！勿論先生としてね！？球技大会も真面目にやってくれたし、掃除やゴミ捨てとかもキチンとしてるし・・・でもね・・・魔王科の子と喧嘩とかしてない・・・？」

おずおずと聞く先生、しかし鑄鶴君はキツパリと・・・

「あつ・・・ええつと・・・あれは喧嘩ですかね・・・？はは・・・」

「言えませんでした。」

「でも喧嘩なんかしていません！これは本当です！」

キツパリと言う鑄鶴君、その答に先生は涙ぐみながら・・・

「よかったあ・・・先生心配してたの・・・そういう噂をきいたから・・・よかったあ・・・」

「ブハア！先生！上着はだけてる！言わなきや！言わなきや！」

思春期ですね・・・先生はまだ22歳なのでピチピチなボディーが目の前にあります。鑄鶴君はK.O寸前です。

「先生まだお仕事あるからじゃあまた明日、さようなら」

「はあ〜やつと帰れる〜・・・」

ため息をつく鑄鶴君！彼の一日はまだ長いのです！

—————陽明学園某所—————

「さて・・・そろそろはじめる？」

「風間くかざまくが来てないようだが？」

風間さんは前にでた普通科の駄眼鏡会長です。

「では私が変わりにやろう・・・出席をとるぞ・・・機械科、金城沙耶くかねしろさやく」

「はいであります！」

「魔法科、虹野瀬綾佳くにしのせよりかく」

「1111に居るじゃない・・・」

「銃器科、月野螢くつきのほたるく」

「なんだい？」

「科学科、朝倉藍子くあさくらあいいく」

「はあ〜い」

「やっときたか・・・普通科、風間一平くかざまかずひろく」

「いや、遅れてすみません。」

「そして私、魔王科、望月結だ。それでは会議を始めます。」

ついに始まる会議しかしこの駄眼鏡……完璧に場違いです。こっぴどくして長いようで短い会議が始まったのです。



**第11話：居残りさせられた魔王と陽明学園密会・・・？（後書き）**

今回は会長集合会にしました次回は、会長達の会議の内容になると  
思います。。多分・・・

**第12話：魔王と体育大会会長陣会議（前書き）**

やっと居残りが終わり家に帰れる我らが主人公、望月鑄鶴君、しかしその時陽明学園某所では体育大会の会議が行われ、そして・・・望月家についてあの人が！？

## 第12話：魔王と体育大会会長陣会議

「はあく……やっと終わった……先生に心配かけるんじゃないかな  
った……ふう……」

やっと帰れるムードが出ている鑄鶴君、よほど疲れたんでしよう、  
普通の男の子なら、まあねえ？

そして家に向かう準備をして学校をあとにしました。

————陽明学園某所————

「で？会議とは何をするでありますか？我が輩には機械の整備と新  
兵器の開発があるのでありますか？」

眼鏡ロリの機械科会長、金城くかねしろくさんがそう言い放つする  
と、文句を言う人がもう1人。

「私も……研究があるのですけど……早急に終わってくださいさる  
と……嬉しいです」

白衣お嬢様の科学科会長の朝倉さんもめんどくさいと言わんばかり  
の態度です。

「まあ、体育大会の話だ。とにかく早めに終わるつもりだ」

魔王科代表の鑄鶴君のお姉さんの結くむすびくが周りをなだめます。  
するとあの駄眼鏡が……

「虹野瀬くじのせくちは彼氏とか居るの？」

「あなたに答える義務が私にある？あなたみたいな間抜け野良に教える義務なんてこの世に存在しないわ、私にもやらなきゃいけない事が沢山あるのよ。山の様だね」

駄眼鏡を罵倒しつつ自分も帰りたい事を示す魔法科会長の虹野瀬さん、いや様でしょうか？

こんな駄目・・・じゃなかった！こんな素敵な会長達の上に立つ学園長はさぞ素晴らしいんでしょう！  
多分いえ！きつとです！はい！

「とにかく・・・今年の体育大会は、各科対抗戦争にしよう」

「戦争・・・？」

各科の代表が魔王科代表に尋ねる。

「ああ、死なないがダメージや痛みは感じる、リアルでいいだろう、それにルールも今作った」

「————各科対抗戦争ルール————」

・魔王科は4人、機械科は6人、普通科は9人、魔法科・銃器科・科学科は5人までが参加人数とする。

・トーナメント戦となり二科ずつ闘い勝った方が二回戦に進み、二回戦が終わると決勝戦となる。ちなみに一回戦が終わった時点で人数の少ない科が優先的に決勝シードとなる

・敗北条件は全滅または敵大将を撃破されるかのみである

・大将は各科の会長がやる事

・核兵器、衛星兵器、禁忌魔法、超弩級帆船または戦艦の使用、毒物、殺傷能力のある薬などの使用を禁止する。

・対抗戦争は各科の教室、食堂など全ての場所で放映される

・戦闘場所は旧校舎のみ、旧校舎がなんらかの不祥事で破壊された場合大規模下層グラウンドを使うこと

「以上だ。異論はないな？よし！では解散！」

各自散り散りになる会長達各科はこの学校競技を本当に楽しみにしています。普通科の方々以外ですが・・・

————望月鑄鶴————

「もうすぐ家だ・・・なんか嫌な予感がするな・・・」

そんな事を呟く鑄鶴君、手帳の電話機能何気なく起動させましたすると・・・

「お兄ちゃん今どこ？」

「今？もうすぐ家だよ？」

電話をかけてきたのは望月家7女のゆりさんでした。

「お母さんが帰ってきたよー早く帰ってこいだつてー」

「そっ！そうか！わかった！もうすぐ帰るって！っっ！伝えといて！」

「は〜い」

そうして電源を切る鑄鶴君、冷や汗が止まりません、まるでこの世のは終わるのか！っていう顔してます。

「嘘だろ・・・？あの人・・・？」

ブルブル震える鑄鶴君、なんか大変な事が起きそうな予感です。

**第12話：魔王と体育大会会長陣会議（後書き）**

第12話如何だったでしょうか！最近お気に入り登録してくれたかた。ありがとうございます！前から登録していただいてる方！いつもありがとうございます！

ご感想、励ましの言葉等々頂けたらうれしいです！

第13話：魔王と人類史上おおよそ最強で最恐の母親（前書き）

ついに・・・望月くもちづきく家の母親が帰ってくる・・・我らが  
主人公鑄鶴くいづるく君は冷や汗が止まりません、しかしその母親  
様は本心はいい人なのです。そして・・・鑄鶴君は、選択するの  
で・・・



### 第13話：魔王と人類史上おおよそ最強で最恐の母親

母親が帰ってくる・・・ 鑄鶴君の冷や汗が色んな意味でヒートアップしています。なぜなら、鑄鶴君の母親は世界最強いや、世界最恐のお母さんなのです。

しかし医者です。

しかも世界一のお医者さんなのです。

そんなハイパー超凄いお母さんなのですが、鑄鶴君にとってはただの最恐のお母さんです。と鑄鶴君が思っています！本当ですよ？

「はぁ・・・どうしてこんな時期に・・・いつもならお盆すら帰ってこないのに・・・」

とぼとぼと・・・まるでリストラされたサラリーマンの様な雰囲気醸くかも>し出す鑄鶴君、中学三年生に見えませんかそんなとぼとぼ歩いてても家には着いてしまいます。

「ああ・・・帰ってきてちゃった・・・ううん・・・入ろうかなあ・・・」

うじうじしている鑄鶴君、さっさと入れ！とか言いたいのですが、私は天の声なので

「ふう〜・・・望月鑄鶴・・・！僕は男なんだ！よし！行くぞ！ぶべはっ！」

その時扉がブチ破られました。そこにはとてもキレイな御美足がそして視線を上にあかすと、

「何してんだ……？私が帰って来たのに飯すらねえとは……いい度胸してんなあ……鑄鶴……ただいま」

そこには鑄鶴君の母親の

「間違ってる！前の言葉と後ろの言葉の順番が間違ってる！あつ、おかえり……」

鑄鶴君も前の言葉と後ろの言葉の順番を間違えています。

「あつ扉壊れた、治しといてくれ私は風呂入ってくるからあと飯と洗濯なあ」

「は……い……しつかし8ヶ月ぶりなのにこの仕打ち……疲れるなあ……」

「鑄鶴　お酒頂戴」

「キッチンの下にあるから！あと飲み過ぎないでね！神奈ー！夕飯お願い！ゆりー！洗濯ー！」

「了解しました！神奈ー！行くぞー！」

「はいはい　お兄ちゃんケガしないでねー！」

「ああ……あんな優しい妹達が居て僕は幸せだな……」

幸せとでもい思っていそうな鑄鶴君、いつつもご苦労様です。

お酒を飲み漁る三女、穂詰くほつみくさん、駄目兄貴の為に頑張つて代わりに洗濯している七女のゆりさん、またまた駄目兄貴の為に

頑張つて料理をしているのは八女の神奈さん、ちなみに他のお姉さん達は帰ってきていません。

「扉が無い・・・鑄鶴！何があつた！」

「扉・・・？そんなもんあつたか・・・？」

「母さんが壊したの！恐子姉はいつも壊してるだけ！扉はあるから！僕が治してるから！」

ただいま帰つて来たのは長女の恐子さんと次女の安奈さんです。相変わらずこの人達も変わってませんねえ・・・

「もうすぐご飯できると思つから・・・早く中に入って・・・」

「飯・・・！」

「そつか、怪我するなよ」

いそいそと歩いていくお二人、もう6時半・・・六女の結さんと四女の真宵さんが帰つてきません・・・いつも帰つてこない真宵さんはいいいのですが、いつも剣道着で帰ってくる結さんが帰つてこないと鑄鶴君は心配です。

「結なら陽明の女子寮で泊まるそうだから後、梓はアメリカに帰った」

「ならよかつた・・・安奈姉ありがとう」

ニコツと笑う鑄鶴君殺人級の笑顔です。  
ついつい赤くなってしまう安奈さん鑄鶴君の笑顔は姉をも虜にする  
そうです。

そして扉を直しやっと席に着いた鑄鶴君、みんなで手を合わせ頂き  
ますをしてみんなでがつつきます。

これが普通の家族の普通の日常なのです。

-----

やっと・・・やっと食事が終わりもうみんな寝てしまったのですが  
まさかのお母様のおかわりコール無限の胃袋ですしかも夜の2時ま  
でおかわりですよ!？信じられませんか・・・

「腹一杯だ〜・・・鑄鶴、私はお前を珍しく褒めようと思う。頑張  
ったな〜」

「あっありがとう・・・あのさ・・・母さん・・・今日はどうして  
帰ってきたの・・・?」

「帰って来たら悪いか?」

「僕に嘘は通用しないよ・・・母さんの嘘つく時は顔がしかめっ面  
になるからね・・・」

鑄鶴君! あんた何者ですか! もうさすがとしか言いようがない人間  
観察力です

「ばれたか・・・まあお前の事では無いと言えば嘘になるな・・・  
ある占いというか・・・科学者がな予測したんだよ・・・近々・・・  
魔王が現れるってな・・・それがお前とかぬかしやがった・・・否

定はできなかつた……」

「僕が魔王になるとでも……？」

口を割る鑄鶴君、冷たく不穏な空気が流れます。

「誰もお前が魔王とは言っていない、私はお前の意見を聞きたい……たとえ自分が魔王という事が確定したとしてもそれで周りの人間が死のうと後悔とかしねえな？それが嫌なら引越す」

冷たく言う雅さん、息子には不幸になつてほしくない母親らしい部分が滲み出ています

「引越もしない、誰も不幸にさせない、死人も絶対出したりなんてしない……魔王になるのは嫌だ……でもそれが努力や気をつけるだけで治るとかどうにかなるとも思っていない、魔王になったらの考えだよ……それが必然的であつたとしても僕は後悔しない……僕は家族や……僕の事を思ってくれる人達が大好きだから……」

「ああ……あ……分かつたよそのかわり後悔すんなよ……後悔したらブラジルから帰ってきてお前をぶん殴つて地球一周させてやるからな……？覚悟しとけよ！」

「地球一周!？」

地球一周の言葉にびびる鑄鶴君さつきまでの真面目はどこにいったのでしょうか……

しかしその答えを聞いて微笑む雅さん、そして……医者鞆を持ち出発する準備をしています。

「ええ！？もう帰るの！？」

「つたりめえだろ？緊急できてんだ、もう帰る後は任せた他の奴の  
も伝えといてくれ」

「えっ？なんて？」

「頑張れってなぐじゃ！行ってくる」

あっという間に消えてしまった雅さん、さすが史上最恐のお母さん  
です！

こうしてさらに鑄鶴君の決心が再び固まりました。  
そして

「あいつも8ヶ月で成長したな．．．」

空中で家族写真を眺める雅さん、寂しいような嬉しいような、お母  
さんの顔をしています。

ごく普通の母親の顔、それは史上最恐のお母さんがみせた．．．一  
秒間の笑顔でした．．．

――陽明学園魔王科某所――

「結様．．．」

甘い声で1人の少女が鳴く……

「今日は貴様か……さあ……どうされたい……?」

不適に微笑む望月家6女の結さん、少女は頬を赤らめながら……  
ただしてほしい事を結さんに伝えます。すると結さんはまた笑みを  
浮かべ……

「いいだろう……相手をしてやろう……フツ……壊れるな  
よ……?」

「はい……んっ……!」

嫌がりはしません……それが彼女の願いなのだから……そして  
女の子は快樂に堕ち……結さんのものとなっていくのです……

「私には……ここしかないのだ……ここには沢山の少女が居る、  
フツツ……」

「鑄鶴……ふっ……ここでは私は將軍だ……弟の事は忘れよ  
う……」

こうして……魔王科の夜は始まるのです……

**第13話：魔王と人類史上おおよそ最強で最恐の母親（後書き）**

優しい魔王の疲れる日々！第13話如何だったでしょうか！作者は最近寝不足でしにそうです！でも頑張ってもつと書いていきたい思います！感想等あればお願いします！確実に発狂します！とにかくいまは寝ようと思います！



## 第14話：魔王不在、陽明学園の夜（前書き）

夜の2時の陽明学園・・・その時間には基本は誰も居ません・・・  
しかし・・・1人の少女がそこに現れたのです。そしてその少女は  
陽明学園の学園長・・・学園長は嘆く、世界に、神に、己の運命に、

## 第14話：魔王不在、陽明学園の夜

月が出て良い夜になりました。陽明学園の上には怪しい影・・・白銀に光るものがありました。

「良い月が出ていますね・・・アンリエッタ・・・私の絶望を知らずに・・・夜は月が夜を照らし、朝昼は嫌というほど太陽が全てを照らす・・・私の気持ちも知らないで・・・」

そこには少女が、執事を連れてお茶をしています。

「ジャン又様・・・あなた様の絶望はどうしたら治るのでしょうか・・・」

アンリエッタという執事が淡々と言葉を返す、ただ否定文から疑問文になったただけの話、

「私の絶望・・・？世界から悪が消えないということかしらね・・・まあ・・・悪が無くなったらこの世の中は崩壊するわ・・・」

「確かにそうでございますが・・・」

執事がおどおどした態度で返す肯定しただけ受け流す、しかしそこに来た1人の医者とは違った。

「悪は消えねえよ？あんたが悪だしな？」

一瞬で来た。気配を察知されず。執事はいくら普通の人間といえ確実に鍛錬をしている、それなのに気付けぬ速度で・・・医者は来た。

「あら・・・こんな月夜に・・・変なお客さんね・・・」

「そこから一步でも動いてみる・・・私がお前を切り捨てる！」

「あゝはいはい、うごかねえよ男装執事、おい年増。んなアホな事言わず働いたらどうだ・・・？」

「今日はもう働いたわ・・・今日はもう仕事も終わりよ？」

「少しは心配したらどうだ？自分のお気に入りの魔王科をよ・・・」

「心配？なぜ心配しなければならないのかしら？」

「そろそろ歴史が覆る何か起きるかもしれないぞ？私の言うことは正しいと思うが？」

「男の魔王の事ね・・・知ってるわ、私に知らない事があると思っ  
て？確かあなたの息子よね？大変ねあなたもあなたの子供も、男の  
魔王が居ないのは知ってるでしょ？」

「ああ・・・30年前の大戦でしか居ないとは聞いた・・・」

魔王・・・それは全てを破壊しめし滅ぼす者、その者の前には全て  
が無力ただ、ただただ、無力、残虐以上のもの妻には世界の美女を  
与え、なにもかもを与えたそして・・・30年前の魔王が開いた大  
戦、無敵であった魔王は堕ちた・・・何か説明のつかぬ力で、

「辞典にはそれぐらいしか書いてないわ・・・私にはただの野蛮人

にしか思えないわね・・・」

「あいつが魔王だとしたらどうする?」

「多分殺すわ、覚醒してしまう前に確実に・・・殺す・・・」

「そうか・・・お前の選択か?それとも神のお告げとかほざくのか?」

「ええ・・・そうよお告げ・・・」

「神なんてホントに居るのか?あたしは信じねえな、あいつらいざという時見て見ぬふりをして人を見殺しにさたり人を蹴落とす。まるで児戯とはおもわねえか?児戯をする神もその児戯の神を信じるお前も」

「貴様あ!ジャン又様を愚弄する気かああ!」

雅さんに腰につけた太刀で斬りかかる執事アンリエッタしかしその太刀は雅さんの鉄拳に砕かれた。

「・・・・・・・・・・!??」

「胸ちっせえな〜お前・・・もう少し成長しろ顔も女だしな〜」

男装執事の胸を揉みしだく雅さんアンリエッタ執事も動揺を隠しきれません、

「わっ・・・・・・・・私が・・・触られた・・・?嘘だろ・・・?」

立て膝で立ちつくしたまま震えだす男装執事、それはそうです・・・  
自慢の太刀筋を見切られたのですから、それを尻目に医者は言う

「お前は若えわ・・・30年前の大戦を経験してねえクソガキが私  
に勝てるとおもってんじゃねえぞ・・・？」

「アンリエッタ・・・やめなさい・・・貴方の負けよ・・・そのま  
ま闘えば・・・コンマ1秒かからず彼女に殺されているわ・・・そ  
れにしても貴方こそ兇戯が好きね・・・人の事言えないじゃない・・・  
貴方なら彼女を触れずに殺せるでしょう・・・？」

「ああ・・・わたしも兇戯は楽しむべきだと思っどんな兇戯であっ  
てもな・・・」

「あら・・・奇遇ね、私もそういう意見は好きよ・・・」

「んじゃ私は用事あるからこの辺で」

「ごきげんよう・・・」

「あの人は面白いわ・・・私に啖呵をきるなんて・・・」

「申し訳ございません・・・ジャンヌ様・・・私は何も役にたてず・・・」

「いいのよ・・・でもキレるのはよくないわね・・・お仕置きが必  
要かしら・・・？」

「いえっ！大丈夫です！私は訓練の時間ですので！はい！」

「あら．．．いつの間に一人になってしまったわね．．．まあいいわ．．．」

あおう言って彼女は夜空を見つめる．．．丸い満月．．．照らす月光．．．彼女は思う．．．

世界は兎戯で満ちている．．．

人は神の兎戯で出来ている．．．

何もかも兎戯．．．

全て兎戯．．．

神さえも．．．なにもかも．．．

ジャンヌ・アヌメツサにとっては兎戯に等しく無に同じ

それが彼女の生き方．．．

世界で一番神に近いと言われた．．．少女

その頃・・・主人公の鑄鶴君はそんな事があるとはいざ知らず

「ああ〜！もう！皿洗い終わらないー！」

皿洗いをしていました

第14話：魔王不在、陽明学園の夜（後書き）

皆さんかんぱんは〜・・・nです！やっとお気に入り件数登録数が二桁、10という数にきました・・・！ありがとうございます！そしてこれからもよろしくお願いします！



## 第15話：魔王と体育大会にむけて（前書き）

昨日、まるで嵐が来たように散らかった家の掃除や色々すませて大変だったにもかかわらず。

今日も学校の我らが主人公望月鑄鶴くもちづきいづるく君、いつもの五人でお昼休みお弁当を食べていると、あの駄眼鏡が・・・来ちゃいましたく・・・

## 第15話：魔王と体育大会にむけて

学校ももう4時間目まで終わりお昼休み、鑄鶴君はいつものメンバーでお食事しています

「昨日は大変だったよ・・・母さんが帰って来てさ・・・もうホントに大変だった・・・玄関壊すし  
ご飯食い荒らすし、母親らしい事をこれっぽっちもしてくれなかったよ・・・」

まるで夫の愚痴を言う奥様です。鑄鶴君の主婦としての才能が開花してしまいそうです。

「あゝ・・・雅さん、だっけか？俺もびびるわありゃあ」

「・・・知らぬが仏・・・」

怖さに肯定する鑄鶴君の親友？赤神脛人<あかがみかいと>君、そしてお思い出して顔が真っ青になっている赤神君の隣の小柄なカメラ小僧は、これまた親友？の土村影太<つちむらえいた>君、二人とも色んな意味で昔雅さんにお世話になったらしく、知り合いの域です。

「俺も世話になったけど・・・やっぱりあの人とは同じ女として一戦交えてみてえな」

「荒神<あらがみ>、やめておけ・・・敵わない事が立ち会った瞬間嫌でも分かる・・・」

「まあ・・・そうだけどな・・・」

荒神さんに鑄鶴君のお母さんの強さを教えてあげてるのは、鑄鶴君の幼なじみの三河歩くみかわあゆみさん、そして女の子なのにだらしなく胡座をかき鑄鶴君のお母さんに興味津津なのは1組のヤンキー少女の荒神麗花くあらがみれいかさん、命知らずにも程があります。

「僕の母はね・・・強いよ・・・？30年前の英雄の筆頭でもおかしくないし・・・魔王と殴りあつた証拠とか写真やらあるらしいし・・・」

「あゝ！あれだろ！？高等部の人に聞いた事あるぜ！？最強で最恐のお母さんだろ！？俺の憧れなんだよ・・・」

鑄鶴君のお母さんは一応英雄なのです。魔王討伐軍の1人だったとか、ホント医者のお癖して何してんですかねえ・・・暴れん坊だったらしいですよ？

「さあて・・・そろそろチャイムが鳴るし全員食い終わったみたいだし・・・そろそろ教室戻るか」

赤神君の声で教室に戻ろうと支度を始める五人すると皆さんの目の前に・・・

「やあ！君達！体育大会にでないか！？きっと楽しいぞ？」

駄眼鏡会長の風間くかざまさんが現れました。相変わらずバカっぽい話方ですねえ・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無視しようとする5人、

「無視！？会長が声かけたのに無視！？ねえ！お願い！体育大会に  
でてくれない！？お願いします！」

もう敬語になっちゃってます。これが会長なんですか！？信じられ  
ませんねえ・・・

「体育大会は・・・高等部とか大学の先輩達を使えばいいじゃな  
いですか・・・」

「ああ・・・それがね・・・？みんなびびっちゃってね？ある人  
をを除いて誰も参加してくれないんだ」 雛罌粟くひなげし>は出  
てくれるけどね>それでも二人しかまだ決まってなくてね>？後7  
人なんだよね>出てみる気ない！？」

「出るっ・・・って言っても中等部じゃ出れないだろう？それに相  
手は一般の人間の肉体やら頭脳やらが優れてるし・・・」

確かに赤神君の言うとおりです。中等部の人間は普通出ませんそれ  
に普通科はあくまで基本的に普通の人しか居ません、そんな人間達  
で作ったチームなど他の科の子にとっては力モです。

「いや？中等部でも出れるよ？但し怪我とかするかもしれないけど  
」

「あなたの言うことは信じれないな・・・ルールブックとかは無  
いのか？」

「あるよ？ちよつと待つてね？」

生徒手帳を開きなやら探し始めました

「これ」

「……………各科対抗戦争ルール……………」

・魔王科は4人、機械科は6人、普通科は9人、魔法科・銃器科・科学科は5人までが参加人数とする。

・トーナメント戦となり二科ずつ闘い勝った方が二回戦に進み、二回戦が終わると決勝戦となる。ちなみに一回戦が終わった時点で人数の少ない科が優先的に決勝シードとなる

・敗北条件は全滅または敵大将を撃破されるかのみである

・大将は各科の会長がやる事

・核兵器、衛星兵器、禁忌魔法、超弩級帆船または戦艦の使用、毒物、殺傷能力のある薬などの使用を禁止する。

・対抗戦争は各科の教室、食堂など全ての場所で放映される

・戦闘場所は旧校舎のみ、旧校舎がなんらかの不祥事で破壊された場合大規模下層グラウンドを使うこと

「だよ？至って簡単でしょ？君達ならできる！っそれに普通科にも

有利にもできてる！  
ね！？ね！？」

このルールブックを見て帰りだそうとする5人

「そういえば……豪華賞品もでとか……後学園長がなんでも願いを聞いてくれるし」

「参加しよう……！」

はやっ！土村君が早速手を挙げました。意志が弱いですねえ……

「みんな出るよな？な、鏝鶴？」

「みんな出るの！？だったら……僕も出ようかな……」

意志の弱い五人、+ 駄眼鏡と超厳しい秘書なんというドリームチームでしょうか……

「さて！チームに入れるのは後、一人！さて！君達には最後の一人をチームに入れてもらおうか！」

「へっ？後一人？二人じゃないんですか？」

「あゝもう一人は今決まったから」

「誰ですか？」

五人が言葉を揃えて言う、そして……

「鈴村詠歌さんです〜これで後一人！赤神君が出ると聞いて出てくれるってさ」

「はめられたあああああああああああ！」

これこそ絶望ですね、今の赤神君はムンクの叫びにも負けないほどの叫びを放っています。

そして最後の一人の名が会長から発表されました

「—————城屋誠—————」

「ああ〜あ・・・何かおもしれえ事ねえかな〜・・・どの科も弱え奴ばかりで、つまらねえったらありやしねえ・・・暇だ・・・」

人の山の上に立つ男・・・金髪、乱れた服、胸のアクセサリー、

うっわぁ・・・不良〜・・・





## 第15話：魔王と体育大会にむけて（後書き）

第15話如何だったでしょうか！感想、コメントなどもらえたらうれしいです！

次回からまた新キャラ登場です！

**第16話：魔王と普通科最強の不良（前書き）**

城屋誠「普通科最強の不良、敵う者は基本居ない、小さい者や小さい物が好きいわゆるミニコン？しかし見た目は残念な程に不良である。

## 第16話：魔王と普通科最強の不良

「結局・・・僕1人か・・・友達っただけでわなあゝ・・・厳しいよなゝ・・・」

ため息をつく鑄鶴くいづる>君、そう何を隠そう！鑄鶴は城屋誠君と友達なのです！理由は知りませんが・・・まあ・・・鑄鶴君も昔はグレてたらしいですしねえゝ・・・そんなこんなでもう城屋さんの所に着いてしまいました。

「鑄鶴かゝ？何しにきた？」

「また・・・今度は魔法科の生徒！？さすがにまずくない！？」

「まずかねえよ・・・俺は魔王科以外には手を出してる、今更怖じけずきやしねえよ」

男前です。でも無駄にヤンキーな城屋さん、

「俺が普通殴る奴は普通科を馬鹿にした奴だしな、基本的に迷惑はかけてないと思うぞ？俺は悪くねえし、」

「殴るのは良くないから！あぶないし、手痛くなるし、怪我するし」

「変わったな・・・お前・・・昔はお前の赤髪に染めて・・・魔王とか自分で言ってたのによおゝ・・・」

「それは昔！今は今！勝手に人の思い出したくない過去ほじくるのやめてくれる！？城やんはいつつもそうだよ！それに・・・その記

憶はやっぱり思い出したくないよ・・・」

「あつああ・・・ごめん・・・」

悪いことしたのを反省する・・・城屋さんは良い不良さんですねえ・  
・後鑄鶴君は、昔は不良だったんですよ？はい！

「んで？俺に何か用でもあんのか？あの馬鹿の頼みかなんかかは重  
々承知だけどな」

「体育大会に出て欲しいらしいんだけど・・・城やん出る気ある・  
・・・？出たくなければいいんだけど・・・」

「体育大会か・・・祭か・・・高校生になって球技大会でてな  
かったしな・・・今年は何するんだ？去年は出てねえからしらね  
えけど」

「今年はね～はい！これ」

「————各科対抗戦争ルール————」

・魔王科は4人、機械科は6人、普通科は9人、魔法科・銃器科・  
科学科は5人までが参加人数とする。

・トーナメント戦となり二科ずつ闘い勝った方が二回戦に進み、二  
回戦が終わると決勝戦となる。ちなみに一回戦が終わった時点で人  
数の少ない科が優先的に決勝シードとなる

・敗北条件は全滅または敵大将を撃破されるかのみである

・大将は各科の会長がやる事

・核兵器、衛星兵器、禁忌魔法、超弩級帆船または戦艦の使用、毒物、殺傷能力のある薬などの使用を禁止する。

・対抗戦争は各科の教室、食堂など全ての場所で放映される

・戦闘場所は旧校舎のみ、旧校舎がなんらかの不祥事で破壊された場合大規模下層グラウンドを使うこ

「出るぜ！戦争か！俺の得意分野だ！それにこれなら手加減無しに人をぶん殴れそうだしな！俺は出るぜ！馬鹿に伝えておけ！」

「了解！じゃあ伝えとくね？またね城やん！」

「おゝい・・・まったく元気になっちまって・・・あの頃に比べれば全然まともになったな・・・赤髪の魔王と金髪の阿修羅か・・・懐かし・・・さあて！体育大会まで鍛えるか！」

こうして鑄鶴君は城屋さんをチームに加え、9人規程人数をクリアし戦力も充分！後は体育大会までの下準備だけです。そすそうたる馬鹿達のきょうえ・・・じゃなくて・・・そうそうたる普通科メンバーです！

・望月鑄鶴

・赤神松人

・土村影人

・三河歩

・荒神麗花

・鈴村詠歌

- ・ 風間一平
- ・ 雛罌粟涼子
- ・ 城屋誠

「後は作戦か〜・・・雛罌粟くひなげし〜作戦プランよろしく〜」

「お任せ下さい、面倒ですが一応頑張ってみましょうか・・・」

「今年は勝よ〜・・・普通科の天下をとる！勿論僕が大将でね！」

この駄眼鏡は・・・でもやっぱりこの馬鹿が居ないと普通科は成り立ちません！それがこの男の力というか、雰囲気というか・・・

**第16話：魔王と普通科最強の不良（後書き）**

第16話いかがだったでしょうか！今回はかなり行を少なくして  
います・・・

次回はまだ考え中です！

**第17話：魔王と魔法科生徒会長、虹野瀬綾佳（前書き）**

城屋さんを仲間に加え、普通科の敷地内に戻ろうとする鑄鶴くいつる君、その帰り道の途中いつもの道には居ないはずの人が・・・



## 第17話：魔王と魔法科生徒会長、虹野瀨綾佳

城屋さんをメンバーに加えて、任務を果たした鑄鶴君、今は5時間目の途中だというのに歩いて教室に帰っている途中です。いつも通る訳ではない道しかし校内なので彼にはどう普通科の校舎まで行けばいいかは分かっています。

「5時間目か……うわぁ……英語かぁ……さぼろうかな……  
……体育大会の用事で遅れましたって言えばいいしな」

鑄鶴君ゲスモードに入ってしまった。このうえなくゲスです。中学生でそんな事を思いつくなんて……親の顔が見てみたいですねえ……

トボトボ歩く鑄鶴君色んな事を思い出しながら帰ります。過去の事や今日起きたこと、色んな人との出会いや様々なまあ……不幸な事を思い出しながら色んな意味で自分が可哀想と思いはじめ、鑄鶴君しばらく歩いているとそこには……

綺麗な花園がありました。

美しい……それでは足りない、美しいを陵駕した美麗、こんな美麗な花園は鑄鶴君はみたことありません、すると……園の丁度中心でお茶をしている貴婦人の様な女性を見つけました。

「あら？こんな所に生徒がごきげんよう」

そこにはびっくりするほど綺麗でお人形さんみたいな女性が居ました。

「じつ、こんには！」

「どちらの生徒さん？ここは魔法科の敷地内よ？」

「すつすいません・・・ちよつと急いでて・・・」

「あら、それでは伝えておかないと・・・お友達の皆さんや先生方が心配してらっしゃると思いますし、お名前と何科かとあと何年何組かを教えてくださいさる？」

「普通科中等部3年1組の望月鑄鶴です！」

「望月鑄鶴、良い名前ね 親御さんがよく考えたんでしょうね」

「ええ・・・まあ・・・はい・・・」

びびってます！鑄鶴君びびってます！こんな綺麗なお姉さん見たことが無いでしょう・・・かなりのびびり様です。

「あつ！私は虹野瀬佳くにじのせよりか＞魔法科高等部2年で生徒会長をしています 以後お見知りおきを、貴方は体育大会に出るのかしら？」

「教えるわけにはいきませんよ！対決してからのお楽しみですし、それに駄眼・・・じゃなかった！会長さんに口止めされてますし！」

「そう 貴方も出るのね。だって知っているというとは出るんじゃない」

「ああー！言っちゃった・・・僕って馬鹿だなあ・・・」

「自分を責めないで、教える会長が悪いもの」

「そうですね！そうですね！」

駄眼鏡に押しつける鑄鶴君、何気に酷いです。

「僕はそろそろ行きます。また今度！でわ！」

普通科の敷地内にまで走っていく鑄鶴君それを後ろから見る虹野瀬さん、妖しい笑みを浮かべニツコリと微笑む、その彼の走りを見ている女性はその少年に向かって囁いた・・・

「彼が・・・魔王なのね・・・面白そうな子じゃない・・・私の楽しみが増えたわ、それに・・・私の使いや下僕にも使えそうね・・・魔王だなんて・・・面白い怪奇じゃない・・・私そういうの大好き・・・」

彼には一言も聞こえていない

不適な笑みを浮かべる女性・・・高校生離れした身体、顔、性格、彼女は怪奇現象や奇妙な事が大好き、それは彼女自身が怪奇だから・・・彼女は・・・

「魔王を手に入れるのは私ですよ？貴方には勿体ない」

口を挟む女性、それに答える怪奇

「私は何だつて手に入れるわ・・・貴方も私の部下じゃない・・・貴方の怪奇は私のモノ私の怪奇は私のモノだつて私は小さく重い器の女なのよ・・・？自分に怒る怪奇だけじゃ満足出来ないわ・・・魔法科にももう飽きてしまつたし・・・」

「貴方も私も教師クラスですしね・・・貴方が私より年下なのが腹立たしいですけどでも現時点では貴方が会長な訳だし・・・貴方に任せるわ・・・でも私は貴方と同意見よ？」

「何が？私と貴方の同意見なのかしら？」

「3つあるわね・・・1つめはお互いが一番魔法科で偉いという事を自負している事、2つ私も貴方もここ「魔法科」にうんざりしている事、」

「3つ目は何かしら？早く言って欲しいのだけれど？」

「どちらも魔王を必要としている事・・・」

「結局取り込もうという事・・・でも・・・過激な事は出来ませんわ・・・私お嬢様ですし・・・ランキングにヒビは入れられませんわでわご機嫌よう」

「ランキングねえ・・・私は2位くらいだったかしら・・・まあ・・・寿よりは上だから満足するとうましよう・・・」



第17話：魔王と魔法科生徒会長、虹野瀬綾佳（後書き）

第17話！出来ました・・。学園長・・。そろそろ出したい・・。  
しかし受験生なもので時間が無い！一応虹野瀬さんは超美人ってこ  
とで！詳細に表現できなくてすいません！次回は時間があれば書き  
ます！感想等あればよろしくお願いします！

**第18話：魔王と城屋さんの過去と2年前に起きた抗争（前書き）**

魔法科の超美人で生徒会長の虹野瀬くにじのせゝさんに魔法科の秘密の花園で出会った鑄鶴君、気分は有頂天しかし？

今日は5時間授業だったので今日の授業は終わってしまい清掃時間しかし・・・

## 第18話：魔王と城屋さんの過去と2年前に起きた抗争

チャームがなり清掃時間、鑄鶴くいづる>君は早速先生に授業をサボった事がばれ白鳥先生にめっちゃめっちゃに怒られています。

「もう！先生心配したんですからね！？もう・・・体育大会の為とか言つて、先生の授業さぼろうとしたんじゃないの？」

ちなみに白鳥先生は英語と理科の先生をしています。先生としても普通科の皆さんにとつても憧れの的であり仲裁役であつたりいいお姉さんでもあるんです。

しかし・・・白鳥先生の場合同姓はいいのですが・・・彼女のまゝ・・・巷でいうモデルさん並のルックスと抜群のスタイルなので男子は基本イチコロです。

特にお説教の時、先生は相手に寄つてお説教をするのではち切れんばかり上半身のモノ二つが生徒の前に行くのです・・・普通の男の子で緊張すれば鑄鶴君はさらに緊張しますし、土村君なんて全身から血を吹き出し死ぬでしょう。

「いやっ・・・その・・・さぼりたかつたというか・・・忙しかつたというか・・・」

顔が真っ赤な鑄鶴君、そりゃそうですよ・・・鑄鶴君だつて男の子なんですから！

「もう！先生は怒っているんですからね！私は宿題や忘れ物してもあまり怒らないけど、サボるのだけは許さないんだから！ど・・・う・・・して・・・サボつたの！？」



「体育・・・体育大会の打ち合わせというか僕は僕なりの体育大会任務というか・・・押しつけられたというか・・・義務というか・・・だからその・・・」

「何か理由があるんだつたら先生聞くけど・・・？」

「体育大会の最後のメンバー収集に行つてて・・・城や・・・城屋誠さんに会つてきて・・・勧誘を・・・てか近い・・・胸が・・・」

先生の胸と顔が鑄鶴君の前にあります。先生はその名を聞いて顔を青ざめました・・・

「城屋誠君に会つたの！？超問題児なのよ！？よく無事で・・・でも彼は戦力になるわ！私の防御魔法人を異能で破つたのよ・・・普通科に異能力者が居るなんて思わなかつたし・・・私も歳かなあ・・・それとも恋とかしてないからかな・・・」

「そつそつでしようか・・・でも城やんと僕は一応親友ですし・・・」

「親友なの！？喧嘩しないほうがいいわ・・・親友だとしても怒らせたら大変よ？彼は普通科最強でもあるけど他科でも彼に喧嘩勝そうなのは会長クラスだけだし・・・先生は基本生徒に攻撃は厳禁だし・・・後城屋君の能力を教えてあげるわ・・・」

ゴクリとのを鳴らす鑄鶴君、緊張がはしります・・・彼も城屋さんに異能があつたことは知りません、それに彼は普通科、異能があるのなら他科へ行つています。そして、先生が眼鏡を中指で上げ直し・・・その重い口を開きました。w

「「鬼」よ……」

「鬼……?」

皆さんは鬼をご存じだろうか……はいあのツノの生えた赤と青とか虎のパンツとかはくひとです。

語尾にだっちゃんなどつける鬼も居るとか居ないとか……しかし普通の鬼なら金棒に鬼のパンツそれに角や赤い肌など……しかし城屋さんにそのものは何一つついちゃいません。

「それでも本物の鬼じゃないわよ？鬼みたいに見えるけれど、筋肉が膨張したり鬼の様な魔術みたいなのを使えるのよ」

「でも魔法科じゃないのはなぜなんですか!？」

「それは……彼が魔法科で暴れすぎて魔法科から普通科に追い出されちゃったからよ……」

「どうして？魔法科には異能を持った人が沢山居て、その人達を管理してるんじゃないんですか!？」

「けれど……彼はそれでも抱えきれない問題を起こしたのよ……色んな意味でね……勿論授業態度も悪かったし……喧嘩もしたわ……でもね……一番の事件は貴方達も聞いたこともあると思うけれど……あなた達今の何処の科でも中学1年生の頃に入る頃に起きた色んな意味で学園抗争……」

第一次魔法科学園内抗争……」

「僕らが一年の時……」

一年の時・・・鑄鶴君は思い出す・・・城屋さんを止められなかった自分が居て・・・魔王と自ら名乗っていたあの頃、大切な物を失って自分も抗争を起こしかけたあの頃、

「彼にはお姉さんが居るの・・・でも事件は起きてしまった・・・体育大会があるでしょう・・・？あれでね・・・城屋君のお姉さんが不慮の事故で足を失ったの魔法科生徒がね・・・勝つためにお姉さんもろとも校舎と相手を今では禁止されている禁忌魔法の一種で吹き飛ばしたの・・・それからね・・・戦争が起きたのは・・・それで城屋君は激昂し・・・その魔法科生徒とその場に居た魔法科の大会参加者、止めに入った先生、勿論私は止めたけど軽傷で済んだ・・・私だけは・・・」

「先生だけ・・・？その場に居た他の人は・・・？」

「全員骨折やら・・・それ以上の怪我やら・・・禁忌魔法を使った生徒は・・・半殺しよ・・・終わった頃には身元もつかないぐらい・・・顔が腫れていて・・・首から上の骨と骨髄以外は粉碎骨折、または複雑骨折・・・酷かつたわ・・・戦争よ・・・彼が今でも鬼神と呼ばれているのはそれね・・・あれは人じゃない・・・自我の無い怪物・・・彼の従兄弟が居なかったら・・・私も此処にいなかったかも・・・資料室にビデオがあるわ・・・」

「え、普通科の体育大会代表生徒9名は生徒会室に来るように、以上会長からでした」

駄眼鏡の臨時放送が入る、相変わらず空気よめませんね・・・

「資料室に行つて・・・望月君には見る義務がある・・・見てあげ

て・・・風間君には伝えておくから・・・行っておいで」

「はい・・・」

先生は教室からの電話で生徒会室に連絡をする・・・鑄鶴君には資料を見てもらわなくてはならない・・・暴走した異能者というものを・・・

僕は見なくてはいけないのか・・・？見なければならぬのか・・・？自分の親友の見られたくない所と思われる所を・・・罪悪感しか彼の周りを廻らない、ただただ罪悪感、隠しきれない嫌悪親友の秘密・・・彼は言いたくないであろう秘密・・・

そして望月鑄鶴は・・・立ち止まった・・・

**第18話：魔王と城屋さんの過去と2年前に起きた抗争（後書き）**

第18話如何だったでしょうか・・・相変わらず自分は未熟と思っ  
ばかりです・・・やっぱり楽しんでいただけのような物をもっとい  
っぱい書いていきたいです！次回はすぐ更新したいと思います！で  
わでわ・・・

**第19話：魔王と城屋誠そして体育大会一回戦の発表（前書き）**

城屋さんの事で頭がいっぱいの鑄鶴そして・・・二年前の抗争映像を見て・・・

体育大会の一回戦！ついに発表です！

## 第19話：魔王と城屋誠そして体育大会一回戦の発表

望月鑄鶴は迷っていた・・・自分のすべき事に、自分のこれからする事に罪悪感、嫌悪感、ただただ・・・それが廻る無限に不条理に自分を救ってくれた人の見られたくない過去を見る、

嫌悪

嫌悪

嫌悪

嫌悪

廻る廻る廻る廻る・・・思考が想いが募る。ただ募る重い扉を開ける資料室のいつもは軽い扉いつもは開けるのに2秒もかからない・・・

しかし重い・・・まるで・・・とてつもなく重いものを持ち上げるような感覚・・・

「資料室の奥・・・南京錠の掛かった扉この奥に極秘資料が・・・」  
南京錠を開け奥に入っていく・・・その先にまた南京錠のついた扉・・・また・・・また・・・

何枚開けたか分からないが奥についた最後の扉の向こう何枚かある資料の中から「鬼」とだけ書かれたDVDカセットを取り出すそして近くにあるDVDレコーダにDVDカセットを差し込みテレビを

つけた。

そこには二年前の魔法科の校舎・・・映ったとたんその校舎の一部が損壊した。

「皆さん！ご覧下さい！鬼が！鬼が暴れています！」

眼鏡をかけた生徒らしき男がビデオで抗争の状況を撮っている。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！貴様ラ・・・姉サンノ足ヲ返セ・・・サモナクバ・・・世ノ全身全霊ヲ用イテ貴様等ヲ鬪ツテクレル・・・」

その言葉を鬼が放った時・・・血飛沫をあげで・・・1人の生徒が倒れた。そこで見るのをやめた・・・

人が死んだかは分からないが・・・多分死んだ・・・あれが抗争・・・暴走した異能者・・・ピントがあっていないが分かるカメラで撮った中央に撮されていた禍々しいオーラを放っているのが城屋誠でということであれが人の理性を無くした異能者、一時の感情の揺れに起きた暴走、自分は魔王と言われていた。実際にいうと魔王と自分で言い自覚し、謙遜すら無かった自分があるとき過去にこうなる前に止められていなかったらと思うと震えが止まらなくなる・・・

「城やん・・・言わなきゃ・・・ありがとって・・・僕はまだ言っていない・・・救ってくれたのに・・・お礼を言っていない・・・」

自然に涙が溢れる涙腺が肥大化し涙が溢れる・・・あの頃・・・魔王と名乗っていた頃に流れなかった事を悔やみながら、あのころか



ら二年経った今でもあの頃ありがとつと言えなかつた事を恥じるように泣いた……

「生徒会室にそろそろ行かないと……大分遅れちゃったな……」

涙を拭き生徒会室へ急ぐ鑄鶴君、その頃生徒会室ではというと……

「暇すぎる！詠歌くえいか！離れやがれ！畜生！なんで体育大会に出るなんて言つたんだ俺はー！」

「私は後悔してないよ？私が危なくなったら捨人くかいとが守つてくれるしね！いつつ私のお守りしてくれるもんね！」

「あー！鑄鶴！早く来やがれ！」

「リア充……爆発させる……！」

起爆剤を取り出す土村君、その隣に居るのはスケバンの荒神くあらがみくさん、

「土村く鑄鶴はまだか？俺は腹へつただけど……メロンパン買ってきてくんね？金はもちろんお前持ちで」

その飛ぶ鳥を落としかねない目付きが今日の荒神さんにはありません、しかし土村君がパシリにされかけています。

「断る・・・！俺はこの世の非リア充の味方だ・・・！目の前で起こっているリア充の不順異性好意を無視すると・・・！？俺は・・・！この世の・・・！」

「うるせえな！てめえはグダグダうつせえんだよ！そついつの見るのが嫌ならさつさと彼女でも作つていちゃいちゃしてやがれ！」

「むっ・・・！？？」

いちゃいちゃという言葉に動揺し口から血を出しかける土村君しかし鼻からの血は止められませんでした。

「うるさい！お前等！少しは静かにしろ！会議にならんだろうが！少しは雛罌粟くひなげし>さんの手伝いでもしろ！」

歩さんがブツチしてしまいました。

「私はいいわ、もうすぐ終わるから早くみんな席に着いてもうそろそろ来る筈よ」

「はいはいみんな座ってね！もうすぐ鑄鶴君来るから！」

そついつと会長の駄眼鏡はカウントを始めました。

「はい！」

「5！」

「4！」

「3！」

扉が開きそこにはいつもの見慣れた汗だくの彼が

「遅れました！すいません・・・お説教されてて・・・」

「別に構わないさ、3秒早かったかな！さてと！会議会議！」

「ええ〜とね〜みんな居るね？今日は体育大会の一回戦の相手が発表されたよ〜これがその標だよ〜目を通しておいてね〜？あとルールものせておくね〜？」

一回戦：魔王科VS銃器科

魔法科VS科学科

普通科VS機械科

—————各科対抗戦争ルール—————

・魔王科は4人、機械科は6人、普通科は9人、魔法科・銃器科・科学科は5人までが参加人数とする。

・トーナメント戦となり二科ずつ闘い勝った方が二回戦に進み、二回戦が終わると決勝戦となる。ちなみに一回戦が終わった時点で人数の少ない科が優先的に決勝シードとなる

・敗北条件は全滅または敵大将を撃破されるかのみである

・大将は各科の会長がやる事

・核兵器、衛星兵器、禁忌魔法、超弩級帆船または戦艦の使用、毒物、殺傷能力のある薬などの使用を禁止する。

・対抗戦争は各科の教室、食堂など全ての場所で放映される

・戦闘場所は旧校舎のみ、旧校舎がなんらかの不祥事で破壊された場合大規模下層グラウンドを使うこと

「城やんも憶えておいてね？ルール憶えるの大変だと思うけど・・・頑張って憶えてね？」

「やつぱ・・・俺、出るのやめていいか？」

その場の空気が凍り付く

「なんで！？城やん！もう登録しちゃったしね？出てくれないと困るんだけど・・・何か理由でもあるのなら別だけど・・・？」

「なんもねえよ・・・てかてめえはわかんだろ・・・？雛罌粟もなあ・・・」

場が静かにただただ凍り付くそこに口を開けた者が1人・・・

「城やん・・・お願いだよ・・・出てくれない・・・？君が出てくれないと・・・」

「鑄鶴・・・てめえは何もしらねえくせに馬鹿な事言ってんじねえよ・・・てめえには何もわからねえんだろうな・・・」

「知ってるよ……二年ま……」

ドゴンツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

鑄鶴君の首隣、ミリ単位で教室の壁に穴が開く……一撃で……

「何で知ってるかしらねえが……次言ったら……ぶっ殺すぞ……  
……？たとえお前でもなあ！」

「何度でも言つてやるよ！二年前……君は暴走して魔法科の校舎を半壊させたんだろ！？お姉さんの為に闘って狂ったのは知ってる……それがトラウマなんだろ……！城屋誠！」

「ベラベラ語りやがつて……俺を本気で怒らせたな……？」

「みんな！逃げてほしいな……？雛罌粟、みんなを安全な所へ……普通科の敷地内から生徒と教職員を全員退避させてくれ？任せたよっ。」

「了解です……皆さん、さあ早く……」

「何いつてんだ！鑄鶴が！おい！」

「巻き込まれるだけです。それに啖呵を切ったのは彼です。皆さんは退避してください、会長は後で退避すると思いますので……」

「……鑄鶴……」

「さあて・・・安心しろ・・・お前なんか一撃で終わらせてやるよ・・・」

もうもぬけの殻となった普通科校舎、そこには二人の男しか居ませ  
ん、

「君には出てもらわなきゃいけない・・・！出てくれるまでは倒れ  
ない・・・！」

その言葉を発した数秒後、魔王の鳩尾に鬼の右拳が入った。

**第19話：魔王と城屋誠そして体育大会一回戦の発表（後書き）**

第19話！いかがだったでしょうか感想などしどし送ってください！そろそろ番外編など書きたい気がします・・・次回は20話か番外編です〜

番外編：嘘つきスケバン狼少女とエロプリティッシュ（前書き）

今では仲良し？の二人そんな二人の出学校の帰り道、荒神くあらがみくさんと土村くつちむらゝ君が仲良く帰っています。相変わらず青春してますねゝ 今日はその仲の良い二人が出会ったばかりの時のお話・・・



番外編：嘘つきスケバン狼少女とエロプリティッシュ

それはある日の夕暮れ時エロプリティッシュと荒神さんが仲良く帰っています。

「あゝ うめえゝ！あんみつうまいなゝ 土村食つか？」

「・・・お前の唾液が付着したものを食べと・・・？」

「いらねえのか？俺が全部くっちまっぞ？」

「あんみつ・・・！俺の好きなものを・・・！」

「ホントは食いたいんじゃないの？」

「・・・いらん！」

怒りに震える土村君、しかし怒りたくても怒れません、荒神さんの方が遙かに強いですしねえゝ

「みたか？球技大会の俺のサヨナラホームラン 凄かっただろ？」

えへんと無い胸を張る荒神さん、それ対し土村君はというと・・・？

「たいして凄くない・・・無い胸を張っても意味をなさない・・・」

「ああ！？今なんつったあ！？」

「なっ・・・何も・・・」

あまりの恐喝にびびる土村君まさにカツアゲする人とされる人です。

「まあ……今年もお前と同じクラスか……今年もよろしくな」

「……願い下げだ……!」

「白鳥先生隠し撮りしたの先生にはらすぞ……?」

「……うれしい!……」

まさにする人とされる人です。

「お前は昔つからかわらねえな……」

それは今やコンビの様になってしまった嘘つきスケバンとエロブリ  
テッシュの昔のお話……

-----

「こんな所にまあ……屑が……」

柄の悪い少女が溜まり場に居る柄の悪い人からむ

「ああ……?てめえ!荒神麗花か!ちよつどいい……ボコッ  
てやるよめ!」

5分後

その男は彼女の右ストレートの前に沈んだ。

「けっ……ボコられたのはてめえのほうじゃねえか……けっ……」

彼女の名前は荒神麗花、嘘つきオオカミのスケバン少女

「あぢい……暑すぎるぞ……」

学校の屋上で真っ昼間から授業をサボって居る人が居ますそれにしても……2年生でも荒神さんはバリバリヤンキーですねえ、誰も居ない屋上でスカートをパタパタしています。すると……カシヤ！っという音がしました。

「誰だ？俺になんか用でもあんのか？」

何もありません、すると？

荒神さんは自分の5m先に少しもりあがったビニールシートを見つけました。それを捲りあげると……

「俺が……！ばれた……！！？」

そこには見るからに盗撮魔……ではなく小柄な少年が居ました。

「おいてめえ……俺の事盗撮してたのか……？ああ？」

「違う……無い胸を撮る気は無い……！」

どこからかブチツ！という音が響いてきました。

「てめえ……なめてんのか……？」

「……なめてはいない……お前の事は言えないがなぜ授業をサボる？」

「そりゃめんどくせえからだよ！てめえはなんでサボってんだよ」

「カメラ等……備品の整理……」

「盗撮用のか？」

「……ッ！観察用……！」

顔に思いっきり盗撮用とか浮き出てます。まったく隠せていませんね。

「まったく……まあ……ほおっておくか……」

そして荒神さんは寝てしまいました……土村君は階段の途中でボソリと

「あれが荒神麗花……なんとかしないと……一仕事……仕事料は盗撮した美脚写真でいいか……」

と呟きました・・・  
今やエロブリテツシユがスパイみたいな事をしています・・・流石盗撮魔ですね・・・

荒神さんはいつつも一人・・・ご飯も一人、授業中も彼女に話しかけてくれる人は居ません。  
喧嘩も一人・・・仲間なんて邪魔なだけです。でも最近彼女には友達ができそうなのです。

彼女は友達が欲しいという感情が生まれてきたのです。

「よお 土村 俺に何か用か？」

荒神さんが答えるすると土村君は・・・？

「特になにもない・・・今日もカメラの手入れ・・・」

いつもどおりに返します言葉のキャッチボールってやつですかねえ、  
そして屋上への一つだけの扉が開きました。

「ほお〜こいつが影太くえいた>の彼女か〜」

「彼女・・・！？そんなはずない・・・！誰がこんな不良女に・・・！」

「今、不良女とか言ったかてめえ・・・？」

「桧人<かいと>・・・荒神さんだよ・・・？」

「どつした鑄鶴くいづるくビビッたか？」

2年生の頃の赤神くあかがみく君と鑄鶴君が顔を出しました。

「俺は2 - 4の赤神松人こいつは俺のクラスメイト兼クソ野郎の望月鑄鶴だ」

「クソ!?今クソって言った!?僕が何したっていうのさ!」

「じゃあお前が赤神で?お前がクソか」

「違う!望月!望月でいいから!」

「まあいい俺達二人は一応お前とも同じクラスだ。よろしくな、荒神」

「おう!よろしく!」

その二人の出会いから二週間が経ち・・・

昼食も四人一緒に食べる程仲良くなり友達同然のような会話もするようになりました。

その帰り・・・荒神さんはいつものように1人で帰っていく所でした・・・雨が降っていたのにも関わらず傘が無くビショビショになっている荒神さん、いつもの帰り道を普通にあるいていました。

「よぉく荒神ちゃんよ・・・俺の部下をやってくれたらしいじゃん?」

明らかに柄の悪そうな人達が4、5人が荒神さんを囲いました。し

かし荒神さんは立ち向かいます。

「かかってこいよ・・・どうせこの前の奴等の仲間だろ!? てめえらみてえなバカでクズな奴はぶっ飛ばしてやる・・・!」

「ッ!!--!!このアマアアアアアア!」

50分後

その場にはもう・・・柄の悪い人達ではなく・・・その人達にボコボコにされた荒神さんが居ました・・・

「けっカスが行くぞてめえら!なんだこの無駄に可愛いストラップはあ?それにかわいい系の服の雑誌いゝ?お前みてえなクソ女にやにあわねえよ!ボケ!」

さらに柄の悪い人たちは荒神さんの鞆の中の物のほとんどをぐちゃぐちゃに壊してしまいました・・・

ボロボロにされた制服・・・体の多量の傷・・・グチャグチャに踏みにじられた母との思い出のストラップ

彼女は心の中で感じた・・・

「俺は・・・人を殴ることしかできないんだ・・・」

「俺は・・・弱いんだ・・・」

「俺は・・・可愛い服着たり可愛いものを好きになっちゃいけないんだ・・・」

「俺は・・・荒神麗花じゃないといけないんだ・・・」

「俺は・・・」

次の日、荒神さんは陽明学園にこなかった・・・なぜかは知らない、誰も・・・そして荒神さん無しで今日も学校が始まる。

「荒神さんは怪我で入院だそうです。後土村君は家庭の用事で休むと連絡がきました」

先生の心無い言葉・・・誰も荒神さんがいない事を気にしませんし、かし二人は違った・・・

「桧人・・・おかしい・・・二人とも居ない・・・怪しいよ!」

「気のせいだろ・・・?ん?影太からメールが着た」

生徒手帳にメールが来たことを確認し生徒手帳を開く桧人君、

FROM 土村影太

今日急用が出来てしまった・・・

ゴミ処理の手伝い・・・

先生には休むと伝えておいた・・・

くれぐれも来るなよ・・・?



危険なゴミ処理だ俺の家は貧乏・・・  
ただの荒稼ぎ・・・

「行くか・・・ゴミ処理場・・・鑄鶴、もちろん行くよな？」

「行くに決まってるよ・・・こういう時の影太は1人でやろうとするからね！」

すると2人は立ち上がり。

「先生ー！鑄鶴がデート行きたいから早退するそうですー！ちなみに俺は具合が内蔵から胃液出るくらいやばいんで早退しますー！」

「デート！？意味分かんないし！歩！？どうして怒るの！？あれは絵人の嘘だから！信じちゃ駄目だから！僕は不順異性交遊してないつてー！」

「ちよっ！君達！待ちなさい！」

「誰が待つかハゲ！つて鑄鶴が言っていましたー！」

「僕何も言ってますからね！？信じてください先生い！」

その頃学校での出来事を知らない土村君は病院に居ました・・・

「・・・昨日は一緒に帰れば良かった・・・俺はバカだ・・・」

「バカじゃねえよ・・・悪い・・・見舞いなんかきてくれてよ・・・」

いつもの轟々しい荒神さんの姿はそこには無く・・・弱々しくなっていました。

「俺がバカだったんだよ・・・ごめんな・・・くだらん心配かけて・・・ほんつと・・・俺ってつくづくバカだよな・・・」

何も返せなくなる土村君、その時、ふとゴミ箱に視線がいきました。

ポロポロの普通の女の子が見るようなファッション雑誌、ポロポロにされた子犬と子猫のキーホルダー泥水に浸った鞆や、いつもはみない髪留め・・・

そして・・・いつもは見せない彼女の目から滴り出る涙・・・

「荒神・・・少し急用が出来た・・・すまないな・・・また後でくる・・・」

「おう・・・いつてこい・・・」

走る土村君、その身体の中にある怒りの感情を抑えながら・・・あの柄の悪い人達の居場所は知っている・・・だから走る・・・彼女のある顔は見たくないから・・・

「はあはあ・・・！中央病院！やっと・・・やっとついた！」

やっとついた二人そして走って院内に入り荒神さんの病室の場所を聞きそこえ向かいました

「おい！荒神！土村は！？」

「あいつなら・・・用事があるとか言っただどこかに行ったよ・・・」

「場所は・・・わからねえか・・・仕方ねえ・・・鑄鶴！俺はとにかく検討のある場所に行く！荒神の事は頼んだ！」

「あつ・・・うん・・・」

急いで病院から出て行く赤神君、荒神さんの病室の中には鑄鶴君と荒神さんしか居なくなっていました。

すると鑄鶴君はゴミ箱の中身に気がつきました。

「影太の事は荒神さんはどう思ってるの・・・？」

「普通・・・」

いきなり言葉に詰まる鑄鶴君、貴方主人公でしょ！？しっかりとしてください！

「荒神さんはオシャレとかしないの・・・？」

「しねえよ・・・そんな女々しい事するわけねえだろ・・・」

「しろうよ！きっと荒神さん可愛いと思うよ！顔も整ってるし髪も長いし！」

「お前さ・・・俺が何されたかしてんのか・・・？何もしらねえなら声かけるのやめてくんねえかな・・・正直言って・・・うぜえ・・・」

友達是要らない・・・居たら私は荒神麗花で居られなくなってしま  
う。

友達なんて要らない・・・

オシャレなんてめんどくさいだけだ・・・

俺はこのままでいい・・・

強い俺が俺は好きなんだ・・・

「そんな事言うなよ・・・だったら聞き返す・・・」

鑄鶴君は真剣な眼差しで荒神さんを見て答える

「お前は何で影太が今日学校あるのにここに来たか分かってるのか  
？」

そうあいつはここに来た。しかしあいつは急用で学校を休んだと聞  
いた。しかしこいつらは何でこんなに真剣なんだ・・・？土村が居  
ないだけだろ・・・？それだけでなぜ・・・？

「しらねえよ・・・俺の見舞いにも来たんじゃないやねえの・・・暇だ  
つたんだろ・・・？」

まるで何もしらないように軽く返す。その返しに鑄鶴君は激昂する。  
・  
・

「お前な・・・影太の何もしらねえな！お前の為に学校休んでまで  
お前の為に何かしようとしてんだよ！あいつはいつつもごまかす！

危険な事になればなるほどだ！急用！？嘘にきまつてんだろ！？暇だったから・・・？ふざけんな・・・お前にとって影太はその程度か！友達じゃねえのか！」

「うつせえよボケえ！病院では静かにしやがれえ！！！！」

激昂した鑄鶴君を横から顔にドロップキックがめり込みました。

「鑄鶴・・・病院で喚くな・・・うるさい・・・ええくと・・・荒神さん、貴方は医療費を支払わないといけないんだが・・・あんたの親と連絡がとれない上に貴方は保健証をもっていない・・・あなたが払うか貴方に怪我させた奴が払うか・・・どうする・・・？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「母さん、僕が払うよ！いくら！？」

蹴られた頬をさすりながら鑄鶴君は言う、

「19万ぐらいだな・・・」

中学生では払えない金額です。これを払えと言っている鑄鶴君のお母さんの雅さんは慈悲がないのでしょうかと私も思います。

「だったら・・・その怪我させた人に払わせようよ・・・」

「それが荒神に恐怖心が宿ってしまったて・・・答えないんだ・・・来た時には階段から転げ落ちたとかいうけど・・・荒神には殴られたあとや打撲の痕が大量にある・・・しかもこんな強さで殴れるのは男だな・・・私は例外だが・・・しかし・・・こういう患者は希

に見るカス野郎にやられた感じだな・・・珍しく腹が立った・・・」

「僕も相手が男だったら許せないよ・・・女の人でも許さないけど・・・電話だ・・・」

二人で話していると鑄鶴君の生徒手帳が鳴り出しました

「鑄鶴！俺だ・・・見つけた・・・三丁目の港町付近で影太を見た・・・早く来い影太に何か会ってからじゃ遅い、じゃあ早く来いよ！あいつは・・・荒神の為に喧嘩をするかもしれん・・・」

「だってさ・・・荒神さん恵まれてるじゃん、初めての友達が影太で一応僕の手帳渡しておくね影太にもしもの事があった時に役にたつと思うから！あと松人の電話と繋げっぱなしにしておいてね！じゃ！行ってくる！」

「影太・・・俺は・・・」

誰かに救ってほしかった・・・

頼るものがあると私は弱くなってしまふ・・・

だから私は今まで強くあろうとした・・・

でもそれが間違っていたとするのなら・・・

友達が欲しい・・・影太・・・

その感情に割り込むように雅さんが話だす

「友達って奴はいいよな・・・あたしにも腐れ縁の友達って奴が居るけど・・・いざという時助けてくれる・・・そういう奴に会えなかった今までのお前私は不幸とは思わないが・・・お前にとって土村とかいうガキが初めての友達とするのならば・・・そいつを大事にしろ・・・さて・・・私は色々やることあるからまた後で・・・」

「――三丁目港町郊外――」

「昨日の女！ボスあいつおもしろかったですよ〜今は病院だそうですぜ？さすがボスだ」

柄の悪い男達の中の1人が中央に居るボスに話す

「ああいう奴はしばいておかねえとな〜後で厄介だぜ〜？しつかし・・・傑作だったな〜おもしろすぎてよ〜！」

ボスらしき人が大声で高笑いする周りの柄の悪い人たちも一緒になつて高笑いをする

そこに・・・一つの影・・・

それに気づいたボスらしき人が気づく

「おい・・・お前うちの人間じゃねえよな〜・・・誰だ・・・？まさか昨日の女のダチとかいうんじゃないかねえんだろうな〜！」

「ボスそれはありませんよあのクソアマにダチが居るわけないつすから！あんな寂しがりやお嬢ちゃんがさ！」

高笑い・・・心の無い言葉・・・黒ずくめの影が言う・・・

「・・・お前等は救いようのないクズだな・・・反吐がでる・・・息すらするな・・・このゴミ虫」

「ああ・・・？誰に朽ちきいてんだ？てめえらお客様を存分におもてなししてやれ！死ぬほどな！」

柄の悪い人達が黒ずくめの影に襲いかかる・・・すると・・・

上から黒く約5Mとあるうかという鉄筋が何本も落ちた・・・そしてその鉄骨は柄の悪い人達に降り注ぐ

「・・・貴様等・・・覚悟が出来ていないのなら・・・俺に近づくなよ・・・？死ぬかもしれないトラップを多数はっておいたからな・・・」

怒り・・・友を傷つけられての怒り・・・

静かに燃える怒りの炎、彼の目はそれ相応の目付きをしていた。

「てめえ！警察呼ぶぞこらあ！」

「・・・それはこつちの台詞だ・・・少女への暴行、名誉棄損それに加えて暴力、恐喝、銃刀法違反・・・貴様の様なクズが生きてて誰得だ・・・？誰得もくそもないだろう・・・俺は本気だ・・・」



「言わせておけば調子にのりやがってええええ！ぶつ殺す！てめえだけはぶつ殺してやるよ畜生！」

手元にあつた刀を鞘から抜き構えるボス、それを冷たく見る土村君、すると・・・

土村君の顔に鉄筋が直撃しました

「ボス〜？俺の相手はこいつかい〜？」

「おお！きたか！行け丸藤！」

「いえっさ〜」

大男が現れて土村君と相まみえますしかし・・・今の土村君は頭がぼうつとして頭から血が出でいますそこに大男の右ブロー、左ブロー  
ー右アッパー

もう蜂の巣にされています・・・見ていられる状況ではありません・・・

「ボス〜？こいつ動かないぞ〜？もう死んだんじゃないか〜？いらね〜や・・・」

「さてまだ痛めつけたんねえな・・・斬るか・・・」

朦朧とする意識の中、土村影太は走馬燈を見た・・・

「影太・・・強い男にならなくてもいいが・・・人一人ぐらいは守

れる男になれ・・・お前はそういう男になればいい・・・誰か1人でもいい・・・大切な人を守り庇える位の男になれ・・・」

俺は・・・影だ・・・光じゃない・・・なにが急用だ・・・自分が情けない・・・この程度で・・・影は負けん・・・エロブリテツシユと呼ばれる紳士たる俺が・・・女を守れずにどうする！

俺は影！光になれなくても構わない・・・光の補助をするのが影！親父の走馬燈を見るとな・・・

「ん？起きたか？もういつぺん寝てる？」

大男の拳が影に落ちる・・・

しかし

そこに影は無く・・・男の拳はコンクリートの床の上に落ちた

「・・・俺は影・・・光が無くならない限り生き続ける・・・！俺は荒神麗花の影とならん・・・！大男相手などに・・・！負ける事はない・・・！」

「鑄鶴・・・敵の援軍を叩くぞ？」

「分かってるよ・・・手帳は倉庫内に置いてきた？」

「もち！」

「おいおいおい！二人だけかよ！？しかも中学生って！なめんお

もたいがいにしるやああああああ！」

叫び声を上げる柄の悪い男、それを見る二人は相手を見ながら言った……

「おいおい、お兄さん達？ たった100人程度でいけるとおもってるのか？ 俺もなめられたもんだなあ……行くぞ鑄鶴！」

「思いつきり暴れさせてもらおうとするよ！」

倉庫内では影対大男がまだ闘いを繰り広げていた……

「なんであたらねえんだ！ おいらは最強のはずだ！」

焦る大男無理もない……あいては遙か格下しかも中学生なのに彼は防戦一方を強いられているなざなら彼は今、影になっているからだ

「……お前に負ける訳にはいかない……それに俺はお前より強い奴を二人も知っている」

彼が頭にうかべた二人は、赤髪の長身男の大親友と優しすぎる魔王と呼ばれていたまでは家に6人の姉と2人の妹を抱える優男

「……それに……今の俺には守るべきものがある……か弱くて……泣き虫で……弱虫で……傲慢な……奴が……そのいつの為だけにでも……強くなれる……だから……守るために俺は貴様等を……彼女の影として……処分する……！」

「黙れ！ 黙れ！ つぶれるー！」



はここまでのしといてやる！憶えてやがれ！」

裏から逃げるボスらしき人凄いだっさいです・・・まさに雑魚悪役  
って感じです。

しかしその扉の向こうには・・・

「お客さん々？医療費払えやこらああああああ！」

こうして悪い人はとっちめられ、警察に送り届けられたそうです

「あゝ土村一応いっとくけど俺と鑄鶴は喧嘩しに来ただけだから  
な？」

「久しぶりの喧嘩は身体に忍えるよ・・・じゃあ僕は松人と帰る  
ねゝまた明日学校で」

「・・・コクリ・・・」

影は思った・・・俺にはこんなに良い友達がいたのだと・・・普段  
は言えないが今なら言える・・・

「・・・ありがとう・・・」

それから一ヶ月後、荒神さんの怪我は完治し学校にもまあまあ来る

ようにはなりました。

「おっす！土村！治ったぜ！望月も赤神もありがとな・・・」

「・・・うるさいのが増えた・・・」

「礼なんていらねえよ・・・それより・・・俺は喧嘩して小遣い引かれた！今月俺死ぬだろ・・・」

「僕も母さんに怒られたよ・・・殺されかけたよ・・・」

愚痴をいう3人・・・幸せそうな一人・・・

これが嘘つきスケバン狼少女とエロブリテッシュが友達になった記念日になるのです・・・

-----  
-----

そして今・・・

こうして二人で帰宅道も一緒に帰っている・・・

俺は幸せ者だ・・・今の俺はこいつのおかげでここまでなれた・・・

そして嘘つき狼少女は伝える・・・一つの言葉を・・・初めて言う  
その言葉を・・・

「土村・・・」

「・・・？」

「ありがとう・・・」

「・・・？」

「なんでもねえよ！ほら！次は抹茶アイスだ！」

これは二人のお話・・・

嘘つきスケバン狼少女とエロブリティッシュのお話

**番外編：嘘つきスケバン狼少女とエロプリティッシュ（後書き）**

nです！悩んだ末番外編にしました！かなりの長文になってしまいましたが最後まで読んでいただけたら嬉しいです！次回は二十話かな・・・？



## 第21話：魔王と鬼（前書き）

二年前の事を口走ってしまった我等が主人公望月鑄鶴君、それにぶち切れてしまった普通科最強の不良・城屋誠さん、彼の拳に一撃で地面に倒れ込む鑄鶴君、この普通科歴史史上最悪の喧嘩が幕をあげました。

## 第21話：魔王と鬼

「鑄鶴、てめえはよ人の人生に口出しすぎだぜ？人よりまずお前は自分からだろ？自分の人生もまだなんともなつちやいない奴に俺は指図されて素直にそうしろと？それは都合が良すぎじゃねえか？」

疑問符を付けて語りだす城屋さん、それを聞くことさえ出来ない鑄鶴君。

それを見て鬼は言う

「もうくたばつちまつたのか？俺に喧嘩売るのはお前じゃ無謀なんだよ・・・とにかく人の子と何も知らないお前がその人の人生に感情移入したし干渉すんじゃないよ・・・まあ・・・お前だからここまでにしてやってるが・・・普通の奴やお前のダチなら・・・即病院送りにしてるぜ？まあ、聞いてないつつつか・・・聞けねえか・・・」

鬼は笑いながら言う。

自分の人生の黒には鬼でも触れてほしくはない。

一撃で決まる様な右ストレートだったらしく鬼は自分の手を見つめている。

立ち去ろうとする鬼の後ろで元魔王は立ってみせた。

「はあ・・・はあ・・・もう勝ったつもりか・・・？君のパンチはその程度か！」

「……立ち上がった……？俺のしかも鳩尾に確実に入れ込んだ拳を……？手応えはあった筈だ。」

あれは完璧だった！鬼の力も使った！常人では骨が粉碎される程の拳をさらに鳩尾、下手すりゃ死んでる！それなのに何であいつは立ってんだ！？……」

城屋誠の心の中は錯乱していた

今までにないほどの絶好の隙の間に入れ込んだ自分の拳が相手にはまったく聞いていない。

相手は中学生なうえ自分は右手を鬼化させてまで殴った全力の拳を自分の喧嘩相手はその拳が入ったにも関わらず立っている。

「僕も……往生際が悪くてね……死んだかと思ったよ……でも君が殴ったのはコンクリートの板だよ……でも……分厚い板があっても……鳩尾に入るなんて……ゴホッ！！！」

铸鶴君の服の中から粉碎されたコンクリートの分厚い板が出てきました

「初めて……絶好のチャンスでトドメさせなかった奴は初めてだぜ？しかもコンクリートの板があったとしても肋が折れるほどのピンポイントで殴ったんだがな……お前が初めてだよ。光栄に思えよ？」

「思えないな……君が大会にでてくれるまで……僕はノーベル賞取ったって喜ばないと自分でも思うよ？」

「大層な事言いやがる・・・俺は出ねえぜ？じゃあ俺は体育大会出てグラミー賞貰えると思っててもでねえよ？じゃ条件を付けて良いか？お前が全力の俺に勝て！以上！」

「じゃあ・・・！勝つよ！」

勝つ見込みは無い、しかし一矢報いる事は出来る。

それは普通科生徒でも出来ること。

鑄鶴君はそこでふと思いつきました・・・相手は鬼とはいえ一応は人間それならにんげんには身体的ダメージを与えられるもの銃は効かない・・・ならそうだ！

この前理科で習った爆弾を作ろうと鑄鶴君は考えた

幸いこの陽明学園の理科室は各科にあるのだが基本的に物質が完備されておりもちろん色々な実験をしたりするのでその薬品の量や種類なども豊富です。

でもまあ・・・普通科には普通の薬品しかありませんけどね・・・

「爆弾でも作るか・・・グリセリン 農硫酸 農硝酸はあるだろうし・・・理科室までダッシュ！」

「鑄鶴！逃げるきか・・・？歩いてついて行くか・・・どうせ魔王でもねえあいつに俺が負ける訳ねえしな・・・」

「歩いてる・・・？でもやっぱり城やんは油断してる・・・今しかないな・・・早く作らないと・・・」

そんな急いでる鑄鶴君の事はさぞ知らず城屋さんはベンチで寝そべ

つて空を見上げてます」

「二年前か・・・ずいぶんと懐かしいなおい・・・あん時はまだ鑄鶴も俺も魔法科の時だったか・・・姉ちゃんにも足があったしな・・・」

「――二年前――」

「はあく・・・火気魔法操作とか・・・やってらねえよ・・・んどうした？姉ちゃんもサボリか？」

魔法科校舎の屋上で魔法授業をサボる城屋さん、いつも通りにサボっているとは反対側の魔法科の校舎から1人の生徒が浮遊術で城屋さんの隣に来ました

そんな城屋さんの隣には黒く艶やかな髪を頭の後ろで結ったとても城屋さんに近づく女性とは思えないほど綺麗な女性が座っていました。

「誠？少しは授業うけなさいよ！お姉ちゃんが怒られるんだから！」

その綺麗な女性は城屋さんを誠と呼ぶ。

周りから一連の会話を聞いただけで姉弟なのである。

しかしあまりに似ていない

黒く艶やかな髪清楚な姿、彫刻と見間違えるほど完璧な身体に周りを和ませる雰囲気放っている。

確実に10人いや、100人は彼女の事を美少女と発言するであろう

しかし

弟はというとりるからに魔法科でいう不良、劣等生の顔立ち服装、頭髪をしている

190cmはありそうな身長に切れ長の目、金髪で整っていない髪に乱れに乱れた着こなしの魔法科の制服、彼は姉とは正反対の性格に容姿。

おそらく確実に10人、100人、もしくは1000人以上の人間が見ても不良にと言うのであろうほどの容姿をしている。

「あのね誠！お姉ちゃんはね？誠の事心配してここに来たのよ？また喧嘩したって先生方から聞いたし・・・どうしてすぐに喧嘩しちやうの？いとこの瀬尾君や剛君は見た目は悪い男の子だけどあまり喧嘩したって聞かないし・・・」

「俺をあいつ等みたいな馬鹿と一緒にすんな！しかもここは愛知！あいつらは東京と大阪だぞ！？喧嘩しないとか言っても普通の人間が行くような高校入ってあの二人が喧嘩すると思うか！？」

猛反論する劣等生弟しかしお姉さんにはいつもの事です。

「誠？普通科を馬鹿にしちゃ駄目、普通科にも凄い人はいっぱい居るし二人は陽明じゃなくてあえて普通の学校を選んで二人とも大学生になってるじゃない？誠は普通科じゃ駄目な方なんだから・・・お姉ちゃんが先生達に頼んで魔法科に編入したのに・・・」

「俺がいつ頼んだ！そういうのをなあ！そういう所がうつとうしいんだって！お節介とかいう言葉とかしらねえのか！？姉ちゃんは折れと違って優等だし！ひとに優しくできるし！あんたのそういう所

「が嫌いだよ俺は！お人好し！」

「ほめて貶して・・・いつからそんな子になっちゃったのかな・・・お姉ちゃんかなしい・・・」

泣き始める城屋さんのお姉さんこれではもう完全に城屋さんが悪者になってしまえますかね・・・まあ見た目も言動もすっかり悪者ですが・・・

「でもね？お姉ちゃんは知ってるよ？誠は良い子だよ！お姉ちゃんが保証します！うん！」

右手を掲げ城屋さんの事を褒めるお姉さんそれを隣で見ている城屋さんは恥ずかしそうです。

「やっぱ姉ちゃんにはかなわねえわ・・・色んな意味で・・・」

こうしてその二ヶ月後お姉さんは足を失う事となる・・・

「あの日から・・・俺は何も変わっちゃいねえ・・・自分勝手に・・・わがままで・・・何か変わってえよ・・・」

するとベンチで寝転がっていた城屋さんの前に先ほど逃げたはずの  
鑄鶴君がきました

「城やん！決着をつけよう！君に勝てばいいんだよね！約束は守つてね！」

「もちろんだ！俺は嘘をつかねえ・・・嘘なんかついたら自分で自

分の腹を斬る！

城屋さんの顔には怒りはもうなかった・・・

「――こいつと喧嘩すると・・・自然とわらっちまう・・・なんでだ・・・姉ちゃんの時と一緒にだ・・・こいつには殴りたくなんかねえし・・・泣き顔とかもにあわねえか・・・っても・・・勝負は勝負！自分にはけじめつけえと！――」

「僕は君に特攻をしかける！」

すると鑄鶴君は制服を脱ぎ出しましたそこには・・・魔法科にしかない対魔法装甲を全身につけ全身にダイナマイトが付属されていました

「おまつ！馬鹿か！そんなもんで俺に特攻しかけたらこころ周辺が消し飛ばぞ！？」

「構わない！普通科が勝つためだ！後悔はしない！嫌なら負けを認めろ！そうしないと普通科もろとも吹き飛ばすぞ！」

これが手段を選ばないという事でしょうか・・・もう今の鑄鶴君は主人公ではありません、どっからどうみてもただのテロリストですしかし・・・

その覚悟を見て城屋さんは決めました

「分かった・・・もういい・・・出るから！体育大会でりゃいいんだろ！？出てやるよ！でもよ！どうなってもしらねえからな！？」



「城やん・・・ありがとう・・・」

城屋さんのその言葉に涙が出そうになる鑄鶴君、その時でした。彼のポケットにしまっていた一つのボタンがポチッという不気味な音をたてました

「城やん・・・どうしよう・・・ぼっ・・・ボタン押しちゃった・・・」

「はぁ！？何してんだ！校舎が吹っ飛ぶ！つか俺も吹っ飛ぶ！」

慌てる二人、どうやら喧嘩は終わったようですだれも居ない運動場で二人で馬鹿騒ぎしています。

城屋さんはダイナマイトが爆発しそうなのにたいへん楽しそうです

そして最後には城屋さんが鑄鶴君の全身についていたダイナマイトの導火線を全部きってあげたそうです

## 第21話：魔王と鬼（後書き）

第21話！更新がだいぶ遅くなってしまいました・・・  
まだまだ次回は考え中です・・・  
感想など貰えたらうれしいです！  
でわ〜

## 第22話：魔王と鬼との喧嘩後（前書き）

鳩尾のダメージのせいか立つことがやつとの事の鑄鶴君、保健室に運ばれるそうです。そこでも傷を癒せないと知り・・・  
陽明学園の中央保健室に行くことになりました



嫌がる鑄鶴君、少しは男を見せてくださいよ・・・

もぬけの空となった普通科校舎から5km先、そこには大きな赤字のついた病院らしき施設がありました。

#### 陽明学園中央保健室病院

陽明学園各科には各科何処にも保健室、医務室がある。

しかしこの中央保健室病院ではそこでは治療しきれていない程の重症を負った生徒や教員が通う場所なのである。

先生は女の人しか基本居ませんしかしたまに男の先生の時もありますまあ・・・この学校の保健室はわざと怪我してでも来たい生徒が居るらしいですしねえ・・・

ちなみに主治医は望月穂詰くもちづきほつみくである。

この病院は屋上からも入ることができ、普通科生徒や銃器科生徒は保健室の前のゲートを通ってきますちなみに魔王科の人は魔王科にも保健室病院があり普通科ならばゲートから入るのですが城屋さんは二年前まで魔法科でしたので屋上から浮遊魔法で病院に入りました

そして二人は医者先生の部屋で立ち止まり診察を受ける順番になりました・・・

はたして！そこにはどんなナースが！

「あら？城谷君？どうしたの？鑄鶴まで居るじゃん」

そこには酔っぱらった女医が居ました

「穂詰さん……院内で酒はやめましょうよ……つか……服ちやんと着ろよ！」

「そんな事いつていいの？君が半殺しとか殺しかけた人の治療をしたのは誰だったか？忘れたとは言わせないわよ？」

そうですこの酔いどれ医者には城屋さんが今まで良い意味で制裁……悪い意味で暴力を振るって傷つけてしまった人を治してきた人です。

しかし服は着崩さないでほしいものです……思春期の男の子は色々大変なものですから……

それに女の子もぶら下がるふたつのメロンにすら……と伸びている毛穴をも感じさせない足……

そんな目の前のわがままボディを不覚にも視界に入ってしまったら確実に自分のと比べて自分に失望する事でしょう……

でもまあ……これでも医療は完璧な人です武道も嗜んでいるので肉つきが良いのでしょうか……

「はいはい……鑄鶴！？ほら！出てこい！」

「体が痛くて歩けませ〜ん……」

またわがままを言う鑄鶴君、ほんっと情けないですよね……  
こんなのが主人公ですいませんホント……

「鑄鶴？高橋ちゃんに診て貰うから私忙しいしい〜 はい  
次の人〜」

「ええ！？高橋さんはちょ……ちよつと……」

冷や汗をかきながらほんの10秒、医務室の扉から白衣を着た人が入ってきました

「私に何か不満があるみたいねえ……失礼しちゃう！」

そこにはツインテールのみるからに中学生ぐらいの女の子が居ました……

しかしもの凄い気迫です……

「いや！？無い！無いから！うん無い！無いつたらあああああ……」

奥から出てきた女の子は高橋凜さん、この陽明学園が誇る世界最年少のお医者さんです。

「喧嘩？ふざけてんじゃないわよ！何であんたの傷を私が治すの！？歩とラブラブしてチュッチュツしてやっつとと治せば……！？ホント馬つっつ鹿みたい！馬鹿！」

もの凄い罵倒です……。しかも背はあまり高くない高橋さん、危ないおじさんに好かれそうな性格してますねえ……。……  
というか……。発言内容が危ないのですが……

「あつ……。うんごめん……。君の手を煩わせるつもりは無かったんだ……」

冷静に対処する鑄鶴君、そんな冷静かつ弱気な見て少し顔を赤らめる高橋さん

「ホント馬鹿！あんたみたいな馬鹿嫌いよ……もう……」

「でも歩の名前出すのやめてくれない！？もう……怒られそう……」

そういうことが禁句とは知らない鑄鶴君そこは普通劣いの言葉ですよ……

ありがとうございます……

「鑄鶴……去勢してあげようか……？今ならタダで女の子のなれるわよ……？」

「やめて！？高橋さん！？やめて！？僕が女の子になって誰得！？僕損でしょ！？」

「あんたが苦しめばいいのよ……！あんたが苦しめばねえ！？」

般若のような形相で鑄鶴君に巨大な鋏を突き付けます

鑄鶴君はパニックしかけていますが……

あえて冷静にかつ弱々しく高橋さんの目を見ながら言葉を返します

「凜……頼むよ……君が頼りなんだ……治して……くれな  
いかな……」

甘い言葉というか弱々しい声をかける鑄鶴君、完璧にナンパ感丸出しです……

というか……わざとらしい演技です。

治療とか嫌だこうだとか言った人がこんな事言うと思います？



「・・・仕方ないわねえ・・・治してあげるわよ！治してあげればいいんでしょ！？あゝ！もう！うっとうしい！」

ぶつぶつ言いながら鑄鶴君を診察していく高橋さん

ツンデレは素晴らしいですよ！立て！国民よ！ですよ！

それにしても鑄鶴君と高橋さん、二人の関係は？ということ・・・

高橋さんはこの小説の某ヒロインの三河さんのお友達でその三河さんとは昔っからのお友達頼るか頼られているかということ・・・五分五分らしいです

三河さんとは剣道の試合の時などで怪我をしたら治して貰ったりしているそうです

昔は鑄鶴君の彼女だったという噂も・・・

「鑄鶴くあんた変わったたよね・・・昔はさ・・・赤髪でさ？私は今でも金髪だけだよ・・・あんどきからえらい変わったたよね・・・」

昔の事を思い出しながら語り出す高橋さん、

「あゝ・・・あの時？凜も素直だったよね・・・僕の彼女だったんだっけ？」

とんでも発言が出ちゃいました

「んなあつ！あん時は私は馬鹿だったの！それに・・・不良好きだったし・・・つか鑄鶴！あんたは彼女作りすぎなのよ！どんだけいたっけ！？あんたが魔王の時よ！」

今の普通科の委員長全員手玉にとってくれたわよね！  
歩も手玉にとつて！弄んで！やってたでしょ・・・？」

「凜とは・・・あつたかな・・・？歩とはないよ！？絶対にそれだけはない！断言できるよ！？僕はまだ魔王とか言われてたしね・・・」

「そんなに殺されたい・・・？」

冷たく殺気に満ちた声色が診察室に響き渡ります

「でもさ・・・今じゃああの頃と違って少しは変わったと思ってるよ？」

赤髪だったし・・・それなりに喧嘩もしてたしね・・・彼女は・・・  
「言わないでおこう・・・なんか殺されそうな気がする・・・」  
「そうね・・・あやうく私も鉈だす所よ・・・？それにしてもまあ・・・  
草食になったものね・・・肉食が草食になる事なんてあるのかしら・・・」

「僕？僕はお肉好きだよ？」

「そういうことじゃないっ！」

肉食系がなんで草食系になるかきいてんのよ！」

「なんでかな・・・自分もかなり変わったと思わないんだけどね・・・」

「まあ・・・そんな事はどうでもいいわ・・・  
妹の・・・ゆりちゃんと神奈ちゃんに感謝してる？」

それと！勿論私含む委員長やあんたの家の人に歩や赤神達あと今日はここに連れてきてくれた城屋さんにもね！あんたはみんなに迷惑かけてきたんだからね！？」

厳しくも優しい言葉をかけてくれる高橋さん。

鑄鶴君は色々迷惑かけましたからね～・・・  
校舎の一部丸々掻き消したり・・・  
まあ色々してたんですねえ～・・・

「みんなには感謝してる・・・  
だからまあ・・・家では恩返ししてるつもりはないけど家事や洗濯  
家計管理もちゃんとしてるしね！  
褒められた事ないけど・・・」

「ちゃんとあの子のお墓のも行ってる・・・？  
こんな事聞くのは野暮だと思っけどね・・・それがあんたが魔王に  
なってしまった事に変わりはないんだから・・・あんたの・・・」

「それ以上はシ～くだよ・・・？  
口で口を塞いじゃうよ・・・？」

高橋さんの耳元でヒソヒソと言う鑄鶴君、それにビクツと反応し顔を急激に赤らめる高橋さん、  
魔王はまだ健在のようです。

「お前！歩というものがあいなから私に手出すなんて最低！！！！  
！死ねっ！死んじゃえ！」

「いっ・・・医者言うことじゃない・・・」

「もう治ったでしょ！帰りなさいよ！」

真つ赤なお顔の高橋さん、しかし鑄鶴君の傷はいつのまにかきちんと癒えていました。

さすが

陽明学園が誇る世界最年少のお医者さんです

あつ最年少は余計でしたね

「凜、ありがと！助かったよ！また怪我したらお願いね〜！」

「逃げながら言うことかー！今度きたら絶対治療なんてしてあげないんだからね！？」

馬鹿鑄鶴ー！！！！！！」

「んで？なんとか治療は終わったのか？

まあ・・・なんだ・・・俺もやりすぎた・・・まあ・・・明日からは会議にも参加してやるよ・・・大会にもでるしな・・・」

城屋さんに担がれての帰り鑄鶴君はやつと動けるようになりました

「でもさ・・・久し振りに喧嘩して疲れたな〜・・・体がなまってるね」

「俺もだな〜・・・今日は姉ちゃんと飯食いに行くからこの辺でな〜」

「ええ！？まあいいや城やんありがとう〜」

城屋さんも羨ましいですね〜・・・可愛いお姉さんと食事ですか・  
羨ましいですね〜・・・

しかし普通科の校門近くで降ろされてしまった鑄鶴君、もう日が沈みかけています

「今日も終わりか〜・・・早かったな〜・・・体育大会まであと二週間か・・・長いような・・・短いような・・・」

そんな事を考えていると胸ポケットに入っていた生徒手帳がなりはじめました

妹さんからの電話でした

「神奈から・・・？なんだろ・・・もしもし？」

「お兄ちゃん今どこ！？ご飯が出来てないよお〜・・・  
恐子姉がお腹ペコペコで死んじゃうよ！早く来てー！」

なんと長女恐子さんがお腹を空かせてまっているではありませんか！  
しかし慌てる妹に対して鑄鶴君は

「じゃあ〜・・・恐子姉にはれないように屋上に行ってそこに倉庫があるからそこからカップ麺とお菓子あるからそれを食べさせてあげて、分かった？」

「うん！任せて！私がんばる！」

生徒手帳の通話を切りゆつくりと家に帰るつとする鑄鶴君、

「……い……づる……」

「……!?!……」

背筋が凍る……

その声は昔彼を魔王と名乗るまでに貶めた原因いや……

彼が失った大切な人の声が聞こえた

しかしその声には生気がない

彼女はしんだ……生きている筈がない……確認のため自分の背後を瞬時にみる

そこには何もなかった……

だがその大切だった人の声は確かに自分の声と呼んでいるかのように聞こえた

「沙綾……」

大切だった人の名を呼んでみる……

返事はない……

ただ風が吹いていただけ……何もなし……

「そんな訳……ないか……」

胸ポケットに入れていたペンダントを開きもう一度大切な人の死を確認して望月鑄鶴は再び歩き出した

————陽明学園魔法科某所————

魔法科某所

その黒く明かりは蝋燭の炎しかなくなんとも妖しい雰囲気の会長室  
虹野瀬さんと寿さんがあやしいお話をしていました

「有町沙綾？なんですよその女は？」

「魔王君の昔の女よほら居たでしょ？二年前この学校で目立ってた  
女の子よ」

「天才少女とか言われていた子でしょう？確か死んでいましたわね  
？」

「そうよ？不慮の事故で・・・死んだらしいわね・・・」

「それが彼の一時期だけ、魔王になっていましたわね」

「でも・・・すぐ冷めてしまったわ・・・彼は現実に戻ったのよ・・・  
」

「魔王かしたら戻れない筈では・・・彼に何かありましたの？」

「さあ・・・？私にも分からないわ・・・でも彼はその内また魔王  
になるわ・・・私が彼を魔王にするもの・・・フフフフ・・・」

「魔王は私の駒ですよ！？勝手に自分のモノ発言はやめてもらえ

るかしら!？」

「そうね・・・でも争奪戦なんて馬鹿な真似はしないわ・・・  
それに今日は眠いし・・・私は寝させて貰うわ・・・おやすみなさ  
い・・・」

「綾佳!？まだ話は終わっていませんわ・・・私も寝ましょう・・・

」

蠟燭が消え部屋は真っ暗になり

陰謀渦巻く中・・・

望月鑄鶴は何も知らず・・・家への帰路を辿るのでした・・・



## 第22話：魔王と鬼との喧嘩後（後書き）

第22話！如何だったでしょうか！しかし・・・今回は長めで一週間も開いてしまいました・・・まあ忙しいですがまだまだかいていきます！感想等々もおねがいます！

### 第23話：魔王とはらべこ長女（前書き）

家に帰る途中でかかってきた電話なんと望月家長女の恐子さんがお腹が空いて死にかけているという情報が！  
鑄鶴は内心呆れながら家に向かいます

## 第23話：魔王とはらべー長女

「しっ……死ぬ……」

只今望月家では長女の恐子さんが栄養不足というか……  
お腹が減りすぎて死にかけています  
今は悶え苦しんでいる所です

「神奈ー！カップ麺まだー！？恐子が栄養失調で死ぬぞー！？」

恐子さんの様子を覗いながら内心心配そうにしているのは次女の安奈さん、

一応恐子姉だとか……姉さんとかつけましようよ……

「ちょっとまつてー！あつ！お姉ちゃん駄目だよ！それは恐子お姉ちゃんのなんだから！

「え……私もお腹空いたもん……恐子姉ちゃんだけずるい……！  
神奈も私も食べたいよう……」

今必死にカップラーメンを山ほど作ってるのは八女の神奈さんです  
一番望月家ではまともだと断言できますね

そのラーメンを作ってる隣で自分のラーメンを確保しようとしてい  
るには七女のゆりさん

望月家では一番おてんば……とても言うておきましようか……  
彼女は長女である恐子さんがひいきされていると思っ  
ようかなり必死です

「……お姉ちゃん……可愛い……！ラーメンそんなにほしいん

だね!?

でも許して・・・お兄ちゃんに頼まれたの・・・ごめんね・・・  
――

「駄目だよお姉ちゃん？」

「恐子お姉ちゃん死んじゃうかもしれないんだよ？  
だから我慢しようね？ね？」

「仕方ないなあ～・・・神奈が言うなら我慢するよ～・・・」

どっちが姉だかわかりませんね～・・・  
呆れたものです・・・

先ほどの一番まともは無かった事にしてください・・・  
神奈さんは超がつくほどのシスコンでブラコンでした・・・

「恐子お姉ちゃん～？出来たよ？  
早！もう5つなくなっちゃった！」

「もっと・・・もっと・・・飯を・・・！  
私に・・・！飯を～・・・」

顔が青ざめ呻き声をあげる恐子さん、もう死にそうです

「冴子姉は今日は帰ってこないって・・・  
お兄ちゃんはまだなのー!？」

神奈さんはもう限界って感じですよ  
その限界が爆発しかけた時玄関が開きました

「ただいま～・・・」

今からご飯作るからあと5分まってね〜今日は朝つくつといたから〜」

「お腹空いたよ〜・・・ギターを弾く元気もないよ〜・・・」

「鑄鶴っ！」

怪我は大丈夫なのか!?

私は弁護士なんだ!最低限の弁護はしてやる!」

「飯・・・・・・・・・・」

「お兄ちゃん・・・・・・・・」

「神奈・・・・・・・・よく頑張ったな、兄ちゃんは助かったぞ?

みんなもありがと恐子姉今作るからね!」

「お・・・・・・・・おう・・・・・・・・」

労いの言葉に対して返事すら返すことすら難しくなっている恐子さんゆりさんと神奈さんの頭をなでなでしてあげています

それを見て黙々と料理を作り出す鑄鶴君、お母さんってあんな感じですよ〜

今日のご飯はイタリア料理だそうです。

鑄鶴君は家庭科と体育が5段階評価のうち5なので運動神経は抜群ですし家庭的能力も子持ちのお母さん以上の腕前です。

ちなみに知識も豊富で人の体の仕組みや病気や健康の事などもお母さんが世界的なお医者さんなのでそういう事は言えにある本で憶えています。

家庭科の知識はいつも家事をしているのでまあまあ万全です

なんやかんやしているうちに

5分が経ちました

「今日はイタリア料理で……もう食べてるし！  
恐子姉はこっちのやつね？みんなのは食べちゃ駄目だよ？」

「わかつ……ている……！」

「お兄ちゃんおいしい〜」

「いつものおいしい味だね」

「苦勞をかけるな……まあ……母さんが帰ってこないのも悪いが……」

あの人に料理させるよりはましだしな……」

望月母はどんな料理をするのでしょうか……  
それにしても恐子さんはもの凄い食べっぷりです……  
何？食べるんでしょうか……  
妹二人と珍しく褒めてくれた安奈さん鑄鶴君にも笑みが溢れます  
するとまた玄関の扉が開きました

「ただいまあ〜！穂詰ちゃんが帰って来たぞー！」

飲んだくれがやっと帰ってきました

「うわっ！酒臭っ！早くお風呂！早く！」

「仕事多くてさ〜 高橋ちゃんに押しつけちゃった〜」

てへっ という感じを彷彿とさせるポーズをとる穂詰さん、  
正直これを高橋さんが見たらブチキレそうです……



お父さんは生きていますよ〜  
ええ〜と、とにかく近いうちには帰れそうだから〜雅にもよろしく  
言っておいて〜」

ニユース番組でカメラマンのカメラを奪い望月家の馬鹿親父は家族  
に自分の生存を報告していました  
ちなみに・・・望月家の大黒柱は公務員です・・・  
日本滅亡まじかです。

「おつ・・・親父・・・」

「頭痛くなってきた・・・私は寝る・・・」

「お父さん・・・何してるの!？」

「そんな事どうでもいいじゃん!神奈〜お風呂はいろ〜」

皿洗いをしながら親父さんが映っているテレビをみつめる鑄鶴君  
恐子さんがやっつとご飯を食べ終わりました

「恐子姉に食べて貰うとさ作りがいがあるね」

「私は・・・食い物は何でもくうしな・・・  
それにお前の作る飯は正直言っただけ・・・悔しいがな・・・  
後は長男なんだからな・・・一応・・・  
それにそのうち真宵と冴子も帰ってくるだおう・・・まあ・・・  
嫌でもあの馬鹿のニユースは見ただろうしな・・・」

「神奈が一番苦労してるよね・・・末っ子だし・・・なにより神  
奈が一番家族を好きだしね・・・」



「そうだな・・・  
私達は基本忙しい・・・家には鑄鶴と神奈とゆりと私しか居ないこ  
ととかもあるしな・・・  
安奈は弁護士、穂詰は陽明の代表校医、梓は留学中、真宵は軍に入  
っっていて・・・  
冴子は魔王科大将・・・  
馬鹿は特殊公務員だし母さんは世界の医者だしな・・・帰ってこれ  
ないのは当たり前か・・・」

「僕がみんなを繋ぐよ・・・家族をね！」

偉いことを言う鑄鶴君、

頭の上に恐子さんの優しいチョップが落とされました

「じゃあ・・・頑張れ・・・」

明日は白米倍増な・・・？」

「倍増！？お米なくなっちゃうよ！？」

「長男なんだ・・・それぐらいしてみせろ・・・」

恐子さんがいつもは

死んでいるような目が垂れ下がりそこには笑顔がうまれていました

「恐子姉が笑った・・・！？」

まあ・・・一応頑張ってみるよ・・・」

今日もなにやら騒がしい望月家でした



第23話：魔王とはらべこ長女（後書き）

第23話！いかがだったでしょうか・・・！  
感想等頂けたらうれしいです！

## 第24話：魔王と普通科V S 機械科作戦会議（前書き）

今日は学校は無いはずなのに学校に呼び出されてしまった鑄鶴君、  
昨日は夜遅くまで食器洗いをしていて少し寝不足の模様  
それでも体育大会の会議の為に眠くても休日だとしても学校に向か  
います

## 第24話：魔王と普通科VS機械科作戦会議

「ふあゝ・・・眠い・・・」

なんで日曜日に学校なんか行かなきゃいけないんだろう・・・」

目を擦りあからさまに眠そうな鑄鶴君、

そりゃそうそうでしょう・・・

昨日は恐子さんが15？もご飯を食べましたしね・・・

それゆえ15？のご飯の食器を洗い

それプラス他の姉妹達の食器を片付けましたさすが15歳の母です・

・

「気の抜けた態度では体育大会には優勝できんぞ！？  
しゃきつとしろ！鑄鶴！」

鑄鶴君の隣で喝をいれているこちらの女の子は歩さんポニーテール  
が似合う鑄鶴君の幼なじみです

「だつてさゝ・・・たくさん家事してさゝ・・・」

明日は休もうかなゝって思ったのに朝6時30分にたたき起こされ  
てそのうえ学校だなんて・・・

あの会長はどうにかしてるよ・・・」

「会長はどうにかしてるが

というか・・・私なんか5時30分に起きたんだぞ!？」

髪を結っている歩さん朝は忙しくて結えなかったのでしょう・・・

しかし髪の毛には乱れがなくサラサラです

髪を結う時間が無いほど急いでたんですね？

鑄鶴君を起こすためですよね？  
分かりますよ？

「歩は偉いね僕を起こしに来てくれたし、5時30分なんか起き  
てさ〜・・・」

わざわざごめんね？」

「別に構わんつ！私は朝素振りをしたくて早朝に起きたのだ！  
それに・・・」

「それに？」

「なっ！何でもない！聞き返すな！」

ポニーテールを揺らし鑄鶴君を真つ赤な顔で怒る歩さん  
実に可愛らしいです

鑄鶴君そこは聞きいちゃ駄目でしょうよ・・・

歩さんは昨日の事を尋ねました

「昨日・・・喧嘩に勝ったとは聞いたが・・・

怪我とか傷は大丈夫なのか・・・？」

「うん！大丈夫だよ！

凜・・・じゃなかった！高橋さんにしっかり治してもらったよ」

「鑄鶴・・・凜と何があった・・・？」

「何もないよ！？早く学校に行こう！走ろう！走ろう！」

「誤魔化せるとでも思っているのかああああああっ！」

怒る歩さん、当然でしょう。鑄鶴君が女の子を下の名前で呼ぶなんて普通ありえませんか  
歩さんなりの嫉妬なのでしょう・・・  
それにしても木刀は危ないでしょうよ！

・・・普通科生徒会室・・・

「しかし会長、なぜいきなり学校に招集したのですか？  
それになぜ平日ではなく日曜日に？」

今日も朝からビシッ！っときまりまくりなこの眼鏡っ娘は雛罌粟涼子さん、  
規則正しい生活を送っているので体調もバツチリですし日曜日だからといって寝坊したりなんかしません、それに毎朝6時30分起きなのです！

さすが普通科の秘書！完璧です

「それはね？平日だと普通の生徒に聞かれてしまふ事も万が一ありえるかもしれないし、  
なにより相手に作戦を聞かれないようにするためでもあるよね？  
それにほら・・・」

そして完璧眼鏡ガールの雛罌粟さんの質問を軽くとてもやる気のないさそうに返しているのは、

我等が駄眼鏡・・・ではなく！普通科会長の風間一平さん

こいつなんかにさん付けする必要はあるのでしょうか・・・  
ありませんよねえ・・・？  
すると

隣に置いてあつた袋をガサゴソと漁る我等が駄眼鏡会長風間さん、  
なんとそこには盗聴器らしき物体が！

「盗聴器がしかけてあつたんだよね？」

普通科も人気になったもんだね？僕の気付かぬうちに」

「ただの偵察とでも言いたい所ですが・・・」

現時点で普通科には城屋誠とあなたが居ますからね・・・」

「城やんは目立つからね？」

僕は普通を押し通しているだけなんだけどなあ・・・」

「それに望月鑄鶴もです。」

貴方はこの世を救つた14勇士の親を持つのですよ？

遺伝など・・・身体能力を受け継ぐ事もあるのですから・・・

徹底マークは当たり前でしょう・・・普通科は表は普通ですが・・・

普通ではない輩も多いんですから・・・その代表が貴方方三人なの

ですよ・・・

圧倒的普通者・・・羅刹の鬼・・・魔王・・・

それらの事を調べる以外に何がありますか？

それを除けば他に盗聴する必要性は無いと思われませんが・・・」

「僕等は普通さ？それになんの変わりもないよ？僕が普通って言う  
んだから・・・

普通でしょ？」



能力使って普通という風間さん、  
能力使っちゃ駄目でしょう・・・  
その能力で雛罌粟さんは丸められてしまいました

「それじゃあ！みんなも来る頃だし！準備しようか！」

「そうですね・・・能力を使われては普通とみなざるをえないでし  
ようし・・・  
準備をしましょうか・・・」

――機械科某所――

「なんと！盗聴器全てが壊されたでありますか！？  
さすがは・・・風間一平・・・我が輩の作戦をも読むとは・・・  
さすが・・・天晴れとでも言うのでありますか・・・」

口り眼鏡の機械科会長の金城沙耶さん  
打倒普通科の為に

「しかし・・・金城会長・・・私たちにはまだ策は数え切れない程  
あります！

対人兵器や機械兵器なども着々と準備が出来ております！」

「確か・・・兵器も1人とカウントされたでありますね・・・  
魔法科の召喚獣も1人カウントでありますねえ・・・  
では・・・一機の中に数機をしこむであります・・・」

ルールに分解兵器はナッシングとは書いてないであります！  
さあ・・・開発を続けていくでありますよ〜！」

――普通科生徒会室――

「さあ〜て・・・みんな揃ったね？会議を始めようか！」

「では作戦をまとめ出したプリントを皆さんに配ります。  
回していつってください」

集まった騒々しい9人プリントをみんなに回していきます

「全員にまわりましたね？ではしばらくこのプリントを見ていてく  
ださい

私は資料室にものを取りに行つてきますので」

――体育大会作戦会議の手順――

- 1・作戦内容を一応決めておいたので会長に聞いてください
- 2・意見がある人は手を挙げ淡々と自分の意見を述べてください
- 3・会長から機械科の作戦を聞かれると思うのでできるだけ脳内に  
記憶してください
- 4・そこの駄眼鏡がなんかしでかした言つてください

5. 私が帰ってくるまでにもし会議が終わった場合雑談でもして  
て下さい

「うん．．．まず．．．作戦とかない？」

一応雛罌粟に破壊工作は任せておいてるけどさ．．．  
何かない？」

自信なさげにみんなに質問風間さんそりゃあねえ．．．  
全部雛罌粟さんが建てた作戦ですもんねえ．．．

「．．．破壊工作．．．やらせてほしい．．．」

ひょこつと手を挙げたのは土村君通称エロフェッショナルです

「機械科は．．．基本的に女性しかでないよ．．．？」

土村君．．．大丈夫かな．．．？君は女の子に触れるとね．．．  
．

まあ．．．向こうは5人だしね．．．」

「お前女苦手だったよな．．．」

俺でも駄目だったろ？触れられると血でるんだっけ？」

淡々と語る荒神さんやっぱり仲よしですよ．．．

「．．．多少は平気な時ある．．．5秒以上は無理だ．．．  
出血はするだろう．．．」

真面目に言ってる場合じゃありませんよ！

土村君はホントに女性が苦手というか．．．

彼のエロブリティッシュブレインでは何かされてしまうという妄想が働いてしまい、

鼻血が出てしまうのです……

まあ……駄目人間というか……ただの思春期というか……

「んまあ……他のみんなは作戦は無いみたいだし？

適当に決めておくね？」

彼は適当なんです……

許してあげて下さい……

「よし！5秒で決めたよ！見てみて！いいと思わない！？」

自信ありげにプリントの裏に汚い字で書き記した風間さん

そこにはみんなの部隊配置が書かれていました

強襲：城屋誠・望月鑄鶴・三河歩

近衛：荒神麗花・赤神桜人・鈴村詠歌

破壊工作：土村影太・雛罌粟涼子

大将：風間一平

「どう！？いいでしょ！？完璧だと思わない！？？」

「風間会長どうして俺は近衛なんだ？

なんか納得いかないんだが……」

近衛に納得のいかない赤神君、

鈴村さんと一緒ですもんねえ・・・  
風間さんは赤神君の耳元に口を寄せました

「あのね・・・？鈴村君は君が居ないと駄目なの！彼女に頼まれた  
というか・・・脅されたというか・・・だからね・・・？お願いだ  
よ！僕の命を救ってよ！」

「仕方ない・・・近衛でいいつすわ・・・」

「まあ・・・他は文句ないよね？」

それぞれの得意な所アピールするだけだから！うん！簡単でしょ？  
まあ・・・ただ・・・相手が女の子だとねえ・・・紳士な城やんと  
铸鶴君じゃあ・・・駄目かなあ・・・」

「相手は機械科だ・・・アーマーとかつけてんだろ？  
体育大会とかいいながら・・・戦争だしな・・・まあ・・・顔以外  
にしとく・・・」

「まあ・・・男の人が参加してくれるのを願います・・・は・・・」

「铸鶴君・・・闘う前から相手が女の人ばかりだったらどうしようオ  
ーラが出ています・・・」

そんな中扉が開き雛罌粟さんが帰ってきました

「まあ話の途中だったかもしれませんがこれを見ましよう」

「去年の体育大会？」

そこには一枚のハードディスクとDVDレコーダが  
DVDレコーダをテレビに繋ぎ鑑賞会が始まりました

画面の中には普通科の生徒と機械科の生徒が体育大会をしているの  
が明確に映っていました

圧倒的です・・・普通科は開始2分で全滅だったそうです・・・

「さあ！今年こそはこうならないように頑張ろう！

体育大会一回戦まであと一週間！悔いのないようにやろうね！」

「じゃあみんなで目標建てようよ！そうすれば気合い入るじゃん！」

鈴村さんが意見を出しその意見にみんながうんうんと頷きました

「じゃあ俺は・・・近衛として二人を引っ張っていくわ・・・」

「・・・普通科の邪魔になる兵器は・・・排除・・・」

「この闘いではしなねえけど・・・死ぬきで俺は大将を守る！近衛  
だしな！本陣は任せな！俺が居りゃあ百人力だ！」

「私も近衛だしね！でも本陣近くでもみんなに声が届くぐらいおっ  
きい声をだすよ！桧人や荒神さんには負けられないもんね！」

「私は・・・強襲だったな・・・ほどよく頑張るとする・・・みん  
なの気持ちに私も答えたいしな」

「私は皆さんのサポートプラス破壊工作です。

確実性がなければ意味はないので確実にやりたいと思います」

「僕は大将だからね、やられないように頑張るよ？」

「まあ・・・撃破数・・・目標は4だな！」

それと俺は打倒魔法科だしな・・・！しゃあ！気合い入ってきたぜ  
「コラア！」

「ええつと・・・僕は魔王じゃないって証明するチャンスですし！  
精一杯がんばります！」

最後には円陣を作りえいえいおーっといった感じでみんなで気合い  
をいれました

一週間後には体育大会です！

**第24話：魔王と普通科VS機械科作戦会議（後書き）**

まあ・・・24話・・・後六話で30か・・・受験の為更新はまた  
来週になるかもしれません・・・

申し訳ありません・・・



## 第25話：魔王と体育大会（前書き）

### 体育大会

それは青春の汗がながれ・・・  
生徒達がしのぎを削り仲間達との友情を深めていく学校の行事・・・  
でも・・・陽明学園の今年の体育大会はというと・・・

戦争なのです

## 第25話：魔王と体育大会

先週の会議が終わり始業式から約1ヶ月半・・・各科対抗の陽明学園最大級のイベント体育大会の日がやってまいりました！

「やっと体育大会の日が来た・・・」

「長かったな・・・」

でもやつぱめんどくせえわ・・・姉貴来てるし・・・」

何かと挙動不審な城屋さん、その視線の先には車椅子に乗ったとても綺麗なお姉さんが手を振りながら普通科チームに笑顔をふりまいてます

「誠〜！ガンバってね〜！普通科ファイト〜！」

ニコツとした笑顔をふりまく城屋さんのお姉さんの瑞希さんメチャクチャべっぴんさんです・・・

普通科の男子勢は城屋さん以外が瑞希さんをみちゃっています

「あの馬鹿・・・トラウマとか気にしねえのかつ・・・たくよ・・・」

「

「城ちゃんのお姉さん素敵だよ〜・・・」

僕が貰ってもいいかな！？いいよね！？いいよね！？

城屋さんはお姉さんの心配をしていますしかしその横から馬鹿が口を出します

各科の生徒の入場が終わり体育大会の選手宣誓、校長先生のお話・・・

・今日は学園長先生の挨拶もあるそうです

「次は学園長先生のお話です」

放送のアナウンスが入り場が静かになります

親御さん達や出場生徒の関係者も静まりかえります。

校舎の奥の祭壇から銀色の服をふわりと揺らしながら学園長は現れました

「あんな若い方が学園長!？」

「あれが!？嘘だろ!？少女じゃないか!」

みなさんが驚くのも無理はありませんなにせ祭壇の には背の低い少女が立って今話をしようとしているのですから

「皆さんご機嫌よう」

本日はお忙しい中よくご持参いただきました

今年の体育大会は各科で行われる戦争です見苦しい所や残酷な所もあるやもしれません・・・

しかし本校には望月名医と高橋名医も居られますので・・・ご安心してご見物下さい

私からの話は以上です」

挨拶が終わり観衆に背を向ける学園長後ろ姿は神々しいですしかし・・・

「アンリエッタ？雅の息子は居たのでしょうか・・・？」

「居ました・・・しかとこの目で・・・」

彼女の隣に居る美少女にも見えかねない美少年執事が視認結果を言う

「魔王紋かなにかはついていましたか？」

「それらしきものは・・・」

しかし・・・学生服などで調べられない事もありますので・・・」

ため息を吐く学園長

「そう・・・見れなかったのね・・・服を脱がすか何かしないと・・・」

それが彼に自分は魔王だと言わせる手もありますもの・・・

彼が覚醒してさえくれれば・・・分かりますもの・・・」

冷徹に冷たくなっていく声そして彼女は口を開き執事を驚かせた・・・

「彼が覚醒すれば・・・世界の敵となる前に抹殺できますもの・・・」

「……………普通科本陣……………」

「さあて！めんどくせえ話は終わったあ！

後は・・・勝つだけか？」

拳を振り上げやる気満々の城屋さんその自信ありげの答えに風間さ

んが頷く

「でもねえ？勝つことが難しいかもしれないよ？」

相手は機械科だし・・・こっちは普通科だからね・・・まあ・・・戦争といつても死ぬことは無いし血とかは多分でないかな・・・それなりには出るかもしれないけどね？

まあこの9人で勝つていこう！

目標は一回戦突破で良いかな？」

そんな緩くはきはきとした会長の声を聞き安心した様子の8人

たまにはこの人も働くんですなぁ・・・

会長の問いに対し円陣が組まれ

普通科9人の叫び声があがりました

————機械科本陣————

「さあて！こちらは女子4人と機械一機でありますよお！

相手は優しい男の子が多いとかという噂があります！でも油断してはいけませんよお！」

やったるぞー！

的な雰囲気バリバリの機械科会長の金城さん、

「頑張り・・・ます・・・」

不安げに話す背の高い紙の長い女性

「あたしに任せなさい！お姉ちゃんも江も！私が守ってあげるから

さ！」

自信満々に拳を振り上げる機械科中等部の服を着たグローブ少女

「私だつて・・・守られてばかりじゃないんだから！茶々お姉ちゃんや初姉にいつまでも甘えて居てられないもん！」

二人の姉を尊敬しながらその背を負うドリル髪を結った少女

「さて！行くでありますか！金城沙耶！」

「芳賀三姉妹いきます！」

こうして体育大会の幕が切つて落とされたのであった・・・

## 第25話：魔王と体育大会（後書き）

すいません！かなり更新が遅くなってしまい申し訳ありません・・・  
しかあし！受験生なのでそこはどうか・・・  
感想等お待ちしております・・・

## 第26話：魔王と一回戦（前書き）

ついに始まった陽明学園各科対抗体育大会初戦！

それなりにいいスタートを切った両陣営しかし・・・

普通科は普通の生徒達の集まり

機械人形などを使う金城沙耶率いる機械科に我等が主人公望月鑄鶴  
含む普通科生徒達は強敵を打ち破ることはできるのか！

3巻も終盤26話です



## 第26話：魔王と一回戦

「みなさん？配置につきましたかあ？それでは！各科対抗戦争  
第一回戦はじめえー！」

アナウンスは学園で一番知名度のある白鳥先生になりました  
そんな白鳥先生の声で一斉に体育大会一回戦がスタートしました

「僕は本当にここで良いのかな．．．」

鏗鶴君は開始と同時に迷っていました  
まあ．．．配置があれですもんねえ．．．

土村&雛罌粟――――

鈴村

風間赤神――――望月

荒神

三河――――城屋

といったわかりにくいプリントで書かれた配置場所最前線は城屋

さんですが二番目に最前線なのは鑄鶴君です。

正直の所、鑄鶴君はこのメンバーの中で一番、雑・・・ではなく一番ひ弱なのです

まあ・・・何かあれば別ですが

—————スタジアム南廊下側—————

南側には暇そうにあくびしながら敵を待っている城屋さんが居ました今朝のお姉さんの態度を少し気にしている様です

やはりなんだかんだ言っても城屋さんはお姉さんが大好きなんですねえ・・・

「目標ヲ視認・・・排除行動ニ移リマス・・・」

すると遠くからボシユボシユ！とミサイルでも撃ち出された様な音がしました

城屋さんはそれを視認すると

飛んできたミサイルを蹴り飛ばしスタジアムの外壁に直撃させましたガラガラと音をたてて崩れる外壁・・・

予算とか修理費がお高くつきそうです・・・

「さてと・・・俺の相手がもう来てくれたようだなあ・・・

ただの機械だった事を後悔するかしないか・・・

まあ！どの道スクラップになるんだよ！だったらここで破壊してやろうじゃねえか！

俺の敵は魔法科の馬鹿共だが・・・まあ・・・機械人形でも練習相手には丁度いいぜえオラア！」

「目標ヲ殲滅シマス・・・」

「じゃあこいやあ!!!!!!」

「————スタジアム北廊下側————」

「土村君、分かっていますか？先日説明した通り私たちは職員です。」

敵の所持物や敵自体に爆撃を加え殲滅していきましょう。」

体育大会でもシャツとキリツ！つとしている雛罌粟さん

本当に崩れません、秘書ですし彼女が居なければ作戦や今の普通科布陣も全て彼女が考えました

彼女は普通科には欠かせない存在になっています。

「……了解……しかし体には触れないで欲しい……血が出てしまう……」

「それについては……耐えて貰うしかないでしょう……血が一定量以上出たと感知されたら強制退場となります。」

それにあなたにとっては……保健室をも地獄では……？」

冷静に対処する雛罌粟さんに対して落ち着きの無い土村君、まあ……

・雛罌粟さんも女性ですしねえ……

「……確かにそうかもしれない……しかし……！あそこは俺にとつて……天国でも地獄でもある……！あそこには俺の……！俺の……！男達の……！天使達が……！？」

いきなり雛罌粟さんに口を手で塞がれる土村君、すでに限界がきて

います

「しっ……！静かに……狙撃手が居るようです……」

雛罌粟さんの手が土村君の口から離れやっと思を吸うことが出来るようになった土村君、

やっぱりもう限界がかなりきています

「……狙撃手……？相手は機械科……」

少し血相が戻り雛罌粟さんに狙撃手について話し出す土村君、それに対し声を最大限に殺し近付かず聞こえる程度のひそひそ声で雛罌粟さんは土村君に事情を説明します

「確かに相手は機械科です……しかし……銃器科ほどの銃やミサイルは作れずとも銃も一応は精密機械です……機械科の中では銃もおそらく製造しているかと……ライフルなども銃の部類ですから……作らないことはないでしょう……」

それだけではありません、機械科にはやはりオートマトンや機械人形などの製造も行われています

普通科の倍……いや……それ以上の戦力があるでしょう……」

心配な雰囲気を取りを包みます……

そりゃそうです……雛罌粟さんも女の子なのですから……しかし彼女は弱さを見せません常に完璧秘書なのですから……

「さあ……！まずは狙撃手を捜しましょう！そこからです……」

無理にでも頑張る雛罌粟さん、それを我等がエロブリテッシュは見

逃しません。

「……了解……！任せてくれ……」

「私は爆発物を仕掛けたエリアの確認をします……！」

「……スタジアム中央廊下……」

「来てほしくないなあ……  
守れる気しないし……相手は女の子だ……どうか……来ませ  
んように……！」

神様に祈りを捧げる鑄鶴君、貴方魔王でしょうよ……  
そんな願いも虚しく……

鑄鶴君の所にも人が来てしまいました

「あつ！普通科の誰だっけ……まあいいや！倒せば良いんです  
よね！」

鑄鶴君の前には若干幼い女の子が自分の身の丈の3倍はあるハンマ  
ーを担いで現れました尾は尖っており営利な刃物の様になんでも切  
れそうです。

「えっ……？何それ……？反則じゃない……！？」

震えが止まらない鑄鶴君、その問いに女の子は……

「反則？そんなのありませんよ？これは武器ですし、私は一番突破

しにくい所を任せられたんですが……いがいな大穴でしたか……？」

はい、大穴ですそれはもうとてつもなく大きく深い穴です。鑄鶴君は頑張って自分を強く見せようと腰を反らせて胸を突き出しています。

「僕は望月鑄鶴なんだ！一応ね！」

意味不明です……意味不明ですよ鑄鶴君！

「あの……だからどうしたんですか……？」

首を傾げる事も忘れながら呆れる女の子……  
すみません……この子馬鹿なんです……

「きつ！君は！？名前はなんていうの！？」

慌てて我に返りようやくちゃんとした事……？

を聞き返す鑄鶴君、そんな問いに対しきちんと挨拶をしてくれる女の子

スカートをふわりと翻しきちんと相手の目を見て話します

「私は、機械科中等部三年、芳賀江くはがごうくともうします！」

自信満々に自分の名前を紹介した江さん、しかし彼女の頭の上には疑問符が浮かび上がりました

「望月……？どこかで聞いた事がある様な……無い様な……  
あっ！もしかして……」

ゆりと神奈のお兄さん・・・?」

きよとんとした顔で真面目に質問してくる江さん、

「そうだけど・・・?知り合いなの・・・?」

「友達ですよ?」

「そうなの!?そつかあゝ・・・友達かあゝ・・・二人はどう?」

「二人とも優しいです。それに頭も良くて優秀な生徒ですよ。」

その事を聞いて安心する鑄鶴君、しかしその安心もつかの間、  
彼が喜んでるあいだに彼女のハンマーの尾が彼の脇腹に刺さっていた

「これは戦争なんです・・・」

「すいません、友達のお兄さんといっても手加減はするつもりはない  
ので」

————観覧席————

「お姉ちゃん!お兄ちゃんが江ちゃんに刺されちゃったよ!?!」

驚く神奈さん

無理ありません、自分の兄がスタジアム上空に浮かぶキューブ型  
の放映機の中で自分の友達に脇腹を貫かれていますから  
心配する神奈さんと違いゆりさんかというと・・・

「お兄ちゃん刺されちゃったねゝ大丈夫だよゝ・・・お兄ちゃんだ

もん〜・・・」

まったく動揺の一つすらありません、むしろ安心しています。

「鑄鶴なら大丈夫だろう・・・あいつはあの程度で倒れる男とはおもんしな・・・」

母さんと喧嘩した事があるんだぞ？

それで生きて帰ってきたんだあの程度じゃあいつは倒れないさ」

ゆりさんの隣でこれまた弟が刺されたのにに平然な態度をとっているのは安奈さん、さすがに安心しすぎですよ！長女の恐子さんも来ているのですが安奈さんの隣席で定員さんがビックリしてしまうほど買い食いしています。

「そうだよね・・・！お兄ちゃんは大丈夫だよね！負けるはずがないよね！」

元気が出てきた神奈さん、再び応援を始めました

————普通科本陣前————

「暇だな〜・・・近衛って暇なもんなんだな・・・」

暇そうに座って足をバタバタさせる荒神さん、実際にはしたないです。

「俺も暇だ・・・敵って案外来ないもんだな・・・」

こちらもひまそうな赤神君、敵を今か今かと待ちかまえるのに飽きた所です



「私も暇だな〜・・・会長さん守るの飽きてきちゃった・・・」

やっぱり暇そうだった鈴村さん、赤神君にベツタリとくつついています。

しかしその暇そうな雰囲気は一瞬で消えました。

「二人とも！構えろ！敵さんだ！」

「どこに居るんだよ！どこにもいねえだろ！ホラふいてんじゃ・・・！」

ドサツと音をたてて倒れる荒神さん、それを見て鈴村さんはパニックに陥ってしまいました

「え・・・？嘘・・・？絵人・・・」

荒神さんが倒されて時間が経ったかと錯覚してしまうくらい早く的確に鈴村さんも倒れてしまいました。

その一時の間に二人を失ってしまった赤神君、動揺が隠せずにいます。

「嘘・・・！だろ！？

見え・・・ねえ・・・！」

赤神君は鈍器か何かで後頭部を強撃されてしまい戦争続行不可能と見なされ3人は強制退場となっていました。

もぬけの空となってしまうた本陣そこに一つの視認できないものが・

「私の作った光学迷彩は匂いでさえ消す・・・  
三人は片付けた・・・機械科の勝利は貰ったあつ！」

「三人共！？光学迷彩か！くそっ！まずい！」

光学迷彩で見えないまま防御に徹する風間さんそんな防御も虚しく  
鈍器らしき物も振り下ろす見えないモノ

「大将の首もくらい・・・！」

普通科本陣で鈍く重い音が響いた

第26話：魔王と一回戦（後書き）

久しぶりに二日開け更新！

受験・・・？なにそれくえんの？って感じですよ！  
これからもいっぱい小説を書いていきますよ！  
感想等などいただけると嬉しいです！

## 第27話：魔王と5人の闘い（前書き）

いきなり近衛の三人が陥落し、本陣の会長が窮地に・・・！

そんな時に我等が主人公は脇腹を刺され・・・

普通科がいきなりの絶対絶命のピンチ

機械科芳賀三姉妹、初さんがふるったハンマー

本陣に舞う砂埃・・・

そこには・・・

## 第27話：魔王と5人の闘い

「あゝ．．．みんな？聞こえてる？僕は一応大丈夫だから持ち場に  
戻ってくれて良いよ？」

それにこの子の相手は僕がするよ？じゃ本陣は安心して守らなくて  
いいから」

いつもの軽快な馬鹿．．．いえ．．．

駄眼鏡のアホつたらしい声に普通科5人の顔に安堵が表れた

それに反してハンマーを振り下ろした少女は呆気にとられている

「嘘でしょ．．．？後頭部に当てた．．．！私後頭部に当てた！な  
のになんで倒れて退場も無い上に出血すら．．．！傷すらも無いの  
！？どういう事よ！」

驚く見えない少女、無理もありません．．．

身の丈の3倍もあるハンマーを後頭部に振り下ろし頭にジャストミ  
ートさせた。

それなのに何の平然も無くこの男はにこやかな顔をしながら立っ  
ている

「甘いよ？実に甘い！世界でもっとも甘いと言われるラグドウネー  
ムよりも甘いよ？」

それに迷彩を着用しているのもバレバレだしね？特殊眼力とかサ  
ーモグラフィックでもばれちゃうよ？

ちなみにラグドウネームは砂糖の22万倍、30万倍は甘いけどそ  
れより甘いからね？」

淡々とうんちくを語りだす風間くん、まるで女の子を弄んでいます

「うるさいっ！一辺くたばれえー！」

そして・・・また後頭部にハンマーが打ち付けられました  
しかしまたそのハンマーは殴打した感触を残したまま地面に打ち付けられ再び砂埃が舞った

「だからね？甘いよ？そんなんじゃさ子供騙しだと思っただよね？  
多分会長クラス以下には通用すると思うけれどさ？僕には残念ながら通用しないからね？」

相手にまるで上から見下ろすように相手の攻撃の仕方に注意する風間くん、

その態度に対し女の子は身を震わせ背中に背負っていたカタパルトが機械音を鳴らして開きだしそこには大量のミサイル兵器が入っていました

「そいえば！名前はなんて言うの？僕の名前は敵大将だから知ってると思っけど？お名前は？」

その発言にすら怒りを覚える少女

「私！？芳賀初くはがはつよ！何か文句ある！？無いわよね！と  
りあえず・・・ぶっ飛べー！！！」

カタパルトから無数に放たれるミサイルの雨、風間くんは余裕がある顔をしながら・・・

「僕に誘導ミサイルは当たらないよね？それが普通だよ」

と口から発した

初さんの背中に背負っていたカタパルトから放出されたミサイルは目標に的確に向かうように作られた誘導ロケットしかしその誘導ロケットは風間くんに当たたらぬまま風間君の後ろの壁にまるで吸い込まれるかのように誘導され壁にぶつかり爆散していくその様子を見る観客席の目は普通科対機械科の戦争に釘付けになっていた  
普通科の生徒であるはずの生徒が異能かと思われる技を使っている様に見えるからである

「おい！どういう事だ！？ミサイルが当たってねえぞ！？あれって誘導ミサイルなんだろ！？」

「手品でもつかってんじゃねえか！？」

そんな観客達の声が観覧席を覆う、その言葉はスタジアムに居る少女でさえも風間一平に向かって問いかけた

「どついう事よ！何で誘導ミサイルが当たらないの！？何を使ってるのよ！何で！？」

動揺する見えない初さん、風間くんはその問いにいつも日常会話で使われる事の無い話し方で質問に対し返答をした

「圧倒的普通者・・・」

その言葉に観覧席の全客もモニターを見ている学園内の生徒達も話す事と動くことを止めた

勿論、戦争はこの時も続いている

見えない初さんも何を言ってるのかは分かっていない

「まあ？言葉の力でも言っておこうかな？  
色々出来るんだよ？まあ発言の内容にもよるけど？  
うーん・・・じゃあ例えば、」

考え込む風間君、観覧席も学園内も初さんも彼の言動に注目しています

「君のカタパルトは壊れてるのが普通だよな？」

そう言い放った瞬間、初さんが背負っていたカタパルトは放出部分が折れ、とてもミサイルを撃てるような代物では無くなっていった。

「嘘・・・？何が起こったの・・・!？」

「これが僕的能力だよ？」

もう降参したら？僕のお嫁さんにもなってくれるんだったら話は別だけど？」

完璧になめてかかっている風間くん、そんな風間くんに初さんはイライラする間もなく・・・

「私をこけにしてくれて・・・！風穴あけてDAISSINの羽無し扇風機みたいにしてやる！」

第二次砲撃をしようとしています。耐えられないですよね・・・あんな事言われちゃあ・・・

「芳賀さん、戦争中は闘うから君の服はビリビリになるのは当然だよね？」



もの凄いガスです・・・

この上なくガスです自分の異能をここまで悪用する人普通居ます？  
風間くんがそう言い放つと初さんの服はビリビリに破れあられもない姿になってしまいました。

「・・・!？」

顔を赤くしながら急いで座り込み色んな所を隠す初さん、顔が真っ赤です。

これはお嫁に行けなくなるパターンのやつですね・・・  
そんな初さんを見た風間くんは・・・？

「降参する？それともまだ闘う？」

僕は別に構わないよ？小学生から三十路まではいけるから？どつする？」

完璧に言っではいけない事を言ってしまう風間くん、やっぱりこいつは駄眼鏡でした。

「降参・・・します・・・」

降伏する芳賀初さん、ちょっと泣きそうです。

「そう？まあいいや　いいものも見れたし？僕も本陣でゆっくりするよ？」

もの凄いブーイングです

学園内も観覧席も女性陣からは風間くんブーイングやらなんかお箸やら弁当やらがキューブに向かって大量に投げつけられていますしかし、勝利にはわかりありません大将が本陣で1人護衛無しに戦

ったのですからそこは褒めたくなくても褒めましょう。

「これで戦況が変わってくればいいんだけどね？」

—————スタジアム北廊下側—————

「やはり・・・光学迷彩を付けています。

サーモグラフィか特殊眼力でないと見えませんね・・・

こちらには・・・おおよそ敵は気づいているでしょう・・・

土村君、貴方にはやってもらいたい事があります。」

土村くんは流血を我慢しながら必死に雛罌粟さんの口元に耳を寄せます

ひそひそと土村君の耳元で話し出す雛罌粟さんその話を聴いてやってもらいたい事が分かった様です

「・・・了解・・・約束は守ってほしい・・・」

「私は嘘をつきません、それに貴方には都合の良い代物でしょう？  
ただし報酬は貴方の作戦成功との取引です

それにこの作戦を失敗したとすると・・・私たち二人は全滅ですね  
それを承知した上でこの作戦を実行します

無謀と言うかもしれませんが光学迷彩＋狙撃手が相手、破壊工作要  
員の私と土村君では到底敵わない事は分かっています。でもこの作

戦しか無いので、ご了承下さい。  
作戦を開始します！」

「的が・・・現れた・・・？  
でも人影が有るけど人自体が居ない・・・」

スコープを覗いて居た大柄の女性はいきなりスコープの中に入って  
きた人影が気になっていているしかし・・・  
そこに人は無し・・・

ただ刹那その場に影の正体らしきものが見えた

「そこか・・・！  
良い度胸・・・私の射撃範囲内にはいつてこようなんて・・・！」

スコープを覗き銃弾をその人影の近く現れた所めがけて打ち放つ、  
造作も無い事だ彼女は狙撃手なのだから外すことは無い、外すこと  
など自分のプライドが許さないその場を撃った後そこを見ると人影  
は消えていた彼女にとっては任務完了に思えた・・・  
しかし・・・

「・・・エロは・・・男を・・・強くする・・・！」

狙撃手の後ろに・・・影は居た・・・

「・・・！？  
外した・・・！？私が・・・！？」

驚く大柄な女性しかしそれはしかたない、彼女は撃つたは影、影を  
撃つてもそこには影しかない影を撃とうと無に同じ当たる筈がない  
のだから・・・

彼女は気づく外したのではない外される環境を作らせそのスコープに夢中になつて居るその隙に影は雛罌粟秘書の敵が居ると予測した場所に向かい彼女が銃を放ち終えた後に場に着くそれが二人の作戦であつた

「・・・お前の負けだ・・・狙撃銃を捨てろ・・・」

「分かつた・・・私の負けだ・・・しかし・・・！ただでは負けない！」

彼女は光に包まれ影の前から消え、秘書の前に現れた

「お命・・・頂戴・・・！」

大柄な女性は懐からナイフを取り出し秘書の胸に刺した。瞬間移動か否か・・・その是が非を問おうとする前に秘書の胸には鋭利なナイフが刺された

「くっ・・・すみません・・・土村君・・・後は・・・」

胸から血を滲ませ倒れる雛罌粟さん、しかしその直後、土村君は大柄な女性にとどめををさした・・・ドスツ！という鈍い音が響きまた彼女の胸に何か仕返したのでは・・・と会場や審査員、学園内の生徒までもがそう思ったしかし・・・

「・・・俺は・・・女は斬らんし・・・撃たん・・・殴らないし・・・蹴りもしない・・・それが紳士たるものにするべき事・・・俺の前で女に暴をふるうこと・・・許さん・・・！？」

ドサツと音をたて口と鼻から血を流しながら倒れる土村君、どうやら相手が女性ということは気づいていたんですが、ついつい体に触れてしまい土村君の胸に倒れ込んでしまいました。  
すると恐ろしい位脳みそが回転し土村ブレインは大変な事になってしまいました

そんな紳士エロプリテッシュの勇姿見て会場や審査員、学園内の生徒達は拍手で彼の拳闘を讃えました

—————スタジアム南廊下側—————

「だあ〜！畜生・・・やつと壊れやがったか・・・  
機械科の野郎共・・・こんなもん作りやがって・・・  
事故死裕福機能に自己再生機能が俺が相手じゃなかったから普通科本陣まで切り込まれていたかもしんねえな・・・  
しっかし・・・俺も手傷を負わせられたのには機械人形とはいえ素晴らしい出来だぜ・・・  
なあ？金城？」

少しだけ苦情の笑みをうかべる城屋さんその前にはいつからかは分かりはしないがそこには機械科の総大将が居た・・・

「さすが城屋殿であります・・・  
わが輩達の最高傑作をこうにまでするとは、普通科に城屋殿が居なければ・・・

我が輩達は完勝でありましたのに・・・

詳しく言うと今の機械科で作れる最高で最強の傑作を基盤直前まで痛めつけたとでも言っておくでありますよ……でも機械科の最高傑作はまだ残っているでありますよ……城屋殿……」

不適な笑みをその童顔に浮かべる最高傑作……

機械科は今年まできて……

30年……魔王があらわれてから間もなく作られた陽明の中では普通科、魔法科に次いで古い、機械科は陽明の各科の設備や校舎の修理もする時がある。

30年もある陽明学園では世界で活躍するエリートや将軍が生まれている。

勿論魔女がいれば博士も居て、学者や医者も居る

28年間、近年まで体育大会最強と言われたのは魔法科であった……

どの科も2年前までは魔法科に遠く及びもしなかったしかし今は創立2年ばかりの魔王かが頂点に君臨している。

普通科はここ30年間で体育大会優勝は皆無である

魔法科の優勝は30年中22回、銃器科は3回魔王科が2回機械科が3回、魔法科以外の科が優勝するのは何らかの原因やそれ相応に値する戦力が居た

銃器科の3回の優勝理由は、今なお世界で活躍している世界の鉄砲技師、雑賀新昌くさいかあまさゝの存在があったからであるこれは彼が陽明学園に居た三年間のみの銃器科の優勝記録しかし今は雑賀新昌はこの陽明学園には居ない

彼は今世界の戦線で活躍している高校卒業とともに世界に旅に出たらしい……

しかも普通科以外には英雄が存在する。

機械科は過去に三年連続体育大会を優勝した黄金期がある

それは

16英雄の1人が居たからである・・・

金城沙耶の母・・・

金城九重<かねしろ>このえ>現在44歳望月雅と同じ16英雄の1人、彼女が陽明学園にいた3年間機械科は負け知らず。最強軍団とも言われ技術力ともに世界最強とうたわれた・・・

しかし彼女が陽明を去ってからは機械科も衰え現在に至る・・・  
現在は普通科とほぼ同じ毎年の受験心願人数・・・世界ではほぼ底辺の技術力、ただでさえ乏しい、

しかし、三年前機械科に希望が現れた。

16英雄、金城九重の娘金城沙耶が入学したからである・・・しかし・・・彼女が居る機械科は彼女が来てからは体育大会への取り組みが良かった。

しかし泣かず飛ばずの2年連続3位それに魔法科よりも上の実力を誇る魔王科まで新設された・・・  
だから・・・機械は今年にかけている・・・

彼女が会長になり陽明学園高等部最後の在学年になる今年に全てをかけた。

そして彼女は最高傑作を作り上げた・・・

我が母、金城九重をも超えるものを・・・

「今年こそは機械科の優勝はいただくでありますよ・・・  
そして教えてあげるであります・・・  
機械科の最高傑作を・・・」

機械人形が機動し始める・・・

城屋誠が手傷を負ってまで壊した機械人形が驚く程早く修復される  
機械科対普通科を見ている観客達は他の戦争には見向きもしくな

っていた

そして観客が満員になり始めた頃・・・

機械科最高傑作が完成した

そこには、先ほど破壊されてしまった機械人形が金城沙耶の体を覆いそこには最高傑作を成した・・・

金城沙耶が現れた・・・

「これが機械科最高傑作・・・

フルアーマー金城沙耶・・・私の母ですら為し得なかった人体に兵器を取り付け・・・

自らの意志で機械人形になり操作する！

これが機械科最高傑作でありますよ！」

その姿を最高傑作を見視し敵を確認する城屋さん、深くため息のないきを吐くといつも通りの表情が現れた・・・

「やってやろうじゃねえか・・・

俺は鬼だぜ？てめえみたいな機械に負ける訳にはいかんだろうが！俺が居なくちゃ普通科は負けると言ったな・・・」

「言ったでありますね・・・

でも事実でありますよ？城屋殿が居ない普通科など剣の無い武士、拳銃のないガンマンに同じであります。つまり・・・城屋殿が居なければ残りは雑魚という事でありますよ・・・」

それは確かにと首を縦にふる城屋さん、しかし彼は分かっている・・・

普通科は強い・・・



「んじゃ見てみるよ・・・  
機械科の戦力を・・・普通科の戦力と比べてみやがれ！」

キューブに放映されるメンバー表を見て金城さんはハツとする・・・  
自分と残っている芳賀江意外の面子の名前の上には×印が付いてい  
たのだ・・・

これに一番驚いたのは何を隠そう金城沙耶であった・・・

「残すは我が輩と江ちゃんになってになってしまったでありますか・

・

しかし・・・我が輩は諦めない・・・

貴方を倒し・・・前に前進するだけであります・・・！」

「そうか・・・んじゃ俺もその敬意とやらを受け取れるように・  
・お前を心おきなくぶつ倒す！」

—————スタジアム中央廊下—————

「さてと・・・本陣までは此処を通るだけですね・・・  
後は誰が残っているのでしょうか・・・」

上空にあるキューブを見上げる芳賀三姉妹三女の江さん、そのキュ  
ーブを見つめもう機械科には自分と総大将の金城会長しか居ない事・  
・

「お姉ちゃん達・・・  
普通科の人達・・・許すまじです・・・」

そして普通科陣の残存している敵を確認する江さん、それを見ながら辿っていく・・・

しかし彼女は残存敵を四人目の所で手を止めた・・・  
それが自分の目の前で倒れている敵だからだ・・・  
致命傷になる脇を刺した・・・それに変わりはない  
けれど戦闘不能掲示があがっていない、もう一度刺すか・・・？  
と頭を過ぎるしかし男は立ち上がらない・・・トドメの一撃をさそうと一歩、二歩、三歩、敵に近づき手に持ったハンマーを頭上に掲げ男の頭に振り下ろす  
その振り下ろす途中で・・・男はハンマーの持つ金属棒の部分を手で握りハンマーが落ちるのを止めた。

「痛い・・・  
でも僕は頑丈がうりなんでね！  
いっつも姉達の技の練習台にされているからね！こんな傷くらい・・・  
・どつって事ないくらい・・・  
痛い！痛い！ごめんなさい！嘘です！嘘です！」

男の言動にため息を出す江さん、しかしハンマーの金属棒を男は離しません。

「女の子には手を挙げない・・・何があっても・・・  
よっぽどの事が無い限り怒る  
事もないしやっぱり男として女の子に手をあげるのはちょっとね・・・  
・でもそれでもこの戦争には勝たなきゃいけない・・・だから・・・  
許してね・・・」

鑄鶴君は少し悲しみの表情を浮かべ少女の耳元に口を寄せ・・・

「フィニス・アンデルヘイト・・・」

そう呪文みたいなものをボソツと口にすると江さんは気絶しそこに倒れ込んでしまいました。

こうして鑄鶴君の長い戦いは終わりました・・・

「後1人だ！でも大将だからな・・・気をひきしめない！」

————スタジアム南廊下側————

「俺がな・・・畜生・・・」

全身に傷を負い倒れる城屋さん、しかしそこに居るフルアーマー会長も同様・・・

全身のアーマーに傷を負っていました・・・

「さすが城屋殿でありますな・・・

我が輩にこの完全に勝てる状況で・・・全弾使い切らせるとは・・・すまぬであります・・・

刃愛くかるあ>・・・愛くあい>・・・後は・・・任せるであります・・・」

そう言って力尽きると、金城さんが光に包まれ出し、金城さんの容姿が高身長になっていく・・・

「遂に・・・私の出番が来たか・・・本体である私が初めから出る

べきだったか・・・

誠・・・すまんな・・・後で謝るよ・・・めんどくさいけど・・・」

そういつて苅愛と呼ばれる大柄な女性は三河さんの所へフルアーマーの背面部と腿裏部のバーニア全開で向かった・・・

第27話：魔王と5人の闘い（後書き）

第27話！最高に長く書いたかもしれません・・・っしかあし！も  
っと長く面白いモノを書きたいですいえ！書きたいであります！  
感想等もお待ちしているであります！

番外編：侍三河少女（前書き）

またまた出ました番外編！

今回は、三河さんです！ちなみに体育大会の戦争前の彼女の決意や  
思いも綴っています。

彼女の鑄鶴君に対する思いとか・・・

恋愛感情とか・・・

周りの人たちとか・・・三河家の事とか・・・

彼女も色々大変なのですよ・・・

一応主要ヒロインなんで・・・

今回はポニーテールにした理由なども・・・

## 番外編：侍三河少女

「はぁ……」

年越し前の十五夜のお月様がキレイに出ていた夜  
自宅で1人寂しげに息を吐く、風に髪を靡かせその黒く艶やかな髪  
は月の光に照らされて髪的光沢をうむ……

私の家は広い、

隣の家の人の家も広いが私の家は隣の家の人の家と同じ大きさなの  
か、まだ一度も顔を合わせていないな……

しかしこの町に来て1週間というもの……私はこの家から出てい  
ない。

それもそうだろう……

私は今では「国宝」の妹なのだから……

物思いに耽る中学1年生の三河さん、今の三河さんはこの時からそ  
う変わっていません。

しかし……またこの町に帰ってきたのは嬉しい、それに隣の家は  
私の初めての幼なじみと言える者が居るのだから。

鏡を見つめながら髪をとかしている三河さん、

すると家の玄関の方からインターホンの音が家中に響いた

内玄関を開け外玄関に早足で出て行く三河さん、玄関のインターホ  
ンを押したのは

「歩ー！久し振り、元気だった？」

鑄鶴君でしたこの時、鑄鶴君も1年生事件の後でもうお友達は沢山居る頃ですちなみに元気でヘタレになり始めた頃の鑄鶴君です。

「私は元気だった。鑄鶴はどうだ？」

少し寒いのか防寒着を着てこなかった三河さん、そりゃ寒いでしょうよ！浴衣一枚で出てきたんですから、鑄鶴君はそんな事をついしらず

「元気だよ？」

まあ・・・色々あったけど元気にやってるよ。歩は元気？」

揚々と三河さんの質問に答えて聞き返してきました。

鑄鶴に会えて嬉しい・・・

出来ればここにはずっと居たかった。私の居場所はこの町だ・・・それを壊したのは・・・

下を向き俯く三河さん、考え込み少し無口になっています。

久し振りに会った幼なじみにさえ言えないことがあるのでしょうか・・・

2秒ぐらい周囲が硬直につつまれた後鑄鶴くんが騒ぎ出しました

「歩！手！手、大丈夫なの！？ボロボロじゃないか！今すぐ応急箱持ってくるね！」

そうだ・・・私は手を怪我していたんだ・・・気づかなかった・・・もう身も心もボロボロなのか・・・私は・・・こいつの事を・・・もう・・・



そんな今ではかげがえのない幼なじみと会ったのは小学生中学年の頃だった……

――三河家地下道場――

そこには母が居た。

そして私はいつも母の言うこと通りに稽古をしていた……  
武術だの稽古だの……母は五月蠅かった。

しかし幼い頃の私は反抗期というものを知らずただただ親に従い剣道をするしかなかった……私にはその才能を磨くしかないのだから……

「なぜできないんですか!？」

そんな事では三河家の恥になる!なぜ貴方の姉の進むすみへは出来たというのに貴方は出来ないのですか!?  
それでも三河家の人間ですか!」

「なんで……なんでお姉ちゃんは出来るのに……私は出来ないの……?  
お母さん……」

弱音を吐いたり文句を地下道場で言うと母は道場の戸を閉め私を暗

い空間で1人ぼつちにし上の階で私と違い優秀な姉を甘やかしながら2人で暖かいご飯を食べていた。

当然戸を開け外に出る頃にはご飯も冷たくなっていた。

私は何度も自殺しようとした・・・

今では考えられない、しかし小学3年生だった頃の私には耐え難い稽古だった・・・

母は私を嫌っているのかもしれない私は母を殺してしまおうとも思った。

そんな時にあいつは現れた。

それは小学4年生の頃、家に私以外居ない冬の氷点下0 以下のとてつもなく寒い日だった。

家のインターホンが鳴り私はいつも通り玄関に出て人を確認した。

しかし今日は母には宅配物は無いと言われた上に友達の居なかった私に会いに来る友達というものも居なかった。

玄関に居たのは私と同じ年ぐらいの少年が居た。

初見では私より身長が高く何かどこからともなくこの少年は敵では無いと思えた。

「えつくと・・・三河さんですよね・・・？」

隣の望月と言います！よろしくお願いします！」

なんだこの少年は・・・男に見えない・・・これが男なのか・・・？  
私はそう心で思いながら彼に質問した。

「何しに来たんだ・・・？生憎母も姉も外出中でな・・・すまない

な・・・」

「違うよ？三河さんに用があつてきたんだ」

「私に？何だ？」

そう答えると望月が口を紡ぎしばらく黙り込んだまま生きを吸い込み彼は私にこう言った。

「三河さん！学校にこないんですか！？」

私は本当の事を言えなかつた。

学校に行けないと言えなぜ？と聞かれるだろうし・・・逆に稽古で行けないといえばどんな稽古してるの？とか聞かれそうだしな・・・

どうするのよ！私！ライフロード続きはWEBで！といたい所だが・・・近所さんだしいつかは何かのよしみで家に招くことがあるやもしれないな・・・

「まあなんだ・・・此处では寒いだろう入れ。」

私は望月を家に入れ茶の間へ招いた

茶の間にはコタツとテレビとダンスほどしかなかった。

茶の間にはいつもは雑誌が置いてあつたのだが今はない、多分母が私が稽古を雑誌に夢中になりサボるとでも思っていたのだろう・・・

「三河さんの家って広いよね・・・」

何か日本庭園みたいだったよ！」

それはそうだ・・・  
母の趣味と亡き父の形見としてこの家を残したのだから・・・  
しかし私は庭で遊んだ記憶があまり無い、いつも地下道場で剣技や受け身の稽古をしていたのだから庭で遊んだことなどなかなか無かった。

「三河さんは僕と同じ年なんですよ？すっごく大人っぽいよね！」  
それはそうだ・・・毎日修行や稽古をしていたら子供らしくも無くなってしまいうし体も自然と成長してしまうものだ。

「でも・・・いっぱい怪我してるよね・・・  
僕が治してあげるよ！少し痛いかもしれないけど母さんと詰姉に褒められたんだ。」

「嬉しい」という言葉よりも先に私は動揺してしまった。  
体の傷は服で隠されていて見えない手も豆が沢山潰れた手の平ではなく甲を望月に向けていたしかし傷を見破るなんて・・・こいつは何者なんだ・・・？

「大丈夫だ。  
剣道をしているのだから傷が多いのは普通だしまだ知り合ったばかりの君に治して貰う権限なども私は持ち合わせていない、だから治療とかは遠慮願いたい・・・」

丁重に断った筈だが・・・  
望月は私に顔を近づけてきた。

「だったら・・・うん・・・友達になろう！」

三河さん僕なんか言ったら失礼かもしれないけど・・・大人っぽいし、無理していそうだから・・・近所つきあいもあるしね？」

友達・・・そういえば、誰も居なかったなこの男なら・・・初めての友達でも構わないかもな・・・

「そうだな・・・友達なら許そう・・・」

これが私と望月鑄鶴との初めての出会い・・・  
こうして私たちは友になった。

そして中学1年の始業式前で引越す事が決まる。

でも私はこの8ヶ月後に帰ってくる事は知らずにこの時を迎えていた  
私が小学生を卒業した今では母はもう師範のような存在では無く・・・  
・普通の主婦になっている・・・

今では安心して居るがこの時は絶望した・・・  
でもあいつは笑顔のまま居てくれた・・・私は少しふてくされて  
しまった。

私が引越す事に躊躇いが無く、別れを告げに来た様な態度をとっていたからだ。

しかしそれは私の勘違いだったことに気づいた。

「三河さん・・・いや！歩！今日でお別れじゃないから！また帰ってきてね！」

だからさ？ね？これを持って行ってほしいんだ・・・」

望月から手渡されたのは髪をまとめるリボンと木刀だった。

私は不覚にも泣きそうになってしまった。

望月は私に気をつかってくれていたんだ・・・

普段髪を縛らないからかとても長く美しいリボンとどんな物でも砕けそうな木刀……

「ありがとう……」

「歩はポニーテールにしよう！元気ある子に見えそうだしね！その方がお友達も増える！保障するよ！僕がね」

嬉しくてたまらなかった。

そして私はある結論にたどり着いてしまった。

――私はこの望月の事を愛してしまっている――

そう思った時点で私は決めた

「ああ……絶対に帰ってくる！それまで……首を洗って待つてるんだな！」

私はこの様な事しか言えないこれが精一杯の別れの言葉、

絶対にここには帰ってくるこの事実だけはねじ曲げたくない今までものを言えなかった自分の初めての決意……とでも言うっておこうか……

そして私は待たせていた車に乗る。

絶対にここに帰ってくるという決意を自分の心の中でまた繰り返し言い聞かせて

車は出発し、どんどん望月が離れていく  
私はふと叫んでしまった。

「絶対に！絶対に帰ってくるからな！鑄鶴！」

それから8ヶ月後に戻ってきて1年が経った・・・

私にもようやく友達が増えた

100人・・・程では無いが確かに居る。

転校の間の8ヶ月と帰ってきた1年修行の成果とでも言おうものを見せる時が来た

中学3年生初めての体育大会出場、勿論今は私は1人ではない

頼りになる友達と・・・好きな男が私の隣に居てくれている

守られる自分を卒業する為に私は出る・・・後願い事を叶えて貰う！

「さて・・・鑄鶴！会長！みんな！私に続け！」

私は誰よりも早くスタジアムに向かった。

番外編：侍三河少女（後書き）

三河さんの話！結構頑張って作ってみました・・・

ポニテの理由はね〜

多分これは3・5巻かな・・・？



番外編：魔王の母（前書き）

いつだっただろうか・・・

「この子を生かすためには人の血は駄目なんです！ここに私が極秘に採取した魔王の血があります！この薬と適合さえすれば雅先生の息子さんは必ず！いいえ！絶対に治るはずですよ！」

私が息子を魔王にしたんだっけか？

覚えてねえや・・・

番外編：魔王の母

――望月雅――

いつだったか・・・覚えてねえや・・・

私は息子を魔王に仕立て上げたというより魔王にした。

初めて出来た息子だった今はそうは思う事も無くなったかもしれないが、私は昔・・・と言っても10年前ぐらいまでは息子を溺愛していたような気がする。

――10年前――

「今日も残業だ。

お前等がキビキビ働いてくれれば仕事も早く終わるし私は家に帰らんがお前等は久し振りに家に帰れるかもしれないぞ？私の病院に入った以上私が頂点ではないがここは世界から患者がくる。寝る間も無い程忙しい日もあ

るうえにつまらん仕事だ。人を救いたいが為に此処に入ったのなら私の手となり足となれ！」

久々に言ったな、三日ぶりか？

まあ・・・実際此処は忙しい世界から患者という患者が送られてくる。沢山の人間が今まで辞めていったが今私の助手というか、僕的なやつは3人程居る。

特に反抗期てきなのは一番奥の机に座ってるあの馬鹿だな

「院長！なんと言いやあわかんだよコラア！」

仕事多すぎんだよ馬鹿じゃねえの！？仕事おしつけんな！たまには働け！」

こいつはええつくと・・・

あつそうだ佐藤とか言ったか？

2人名前を覚える暇もないな、一人は私が名付けたから分かるが・

すぐ忘れてしまうもうすぐ辞めそうな奴とかの名前なんて記憶する価値にすら値しないと私の脳が記憶する事を拒否する。

雅さんそれじゃ駄目でしょうよ！

皆さんおはこんばんちは！空の声です。

雅さん自分の部下の名前くらい覚えましょうよ・・・

それにしても流石雅さんです。10年前から目付き悪いし目の隈ありまくりです。

そしてそんな雅さんにキレているこちらの方は犬塚亮くいぬづかりよう>さん、名前の通り犬歯が鋭いですし髪の毛ボサボサです。それに鼻ピアスも付けています・・・この人が医者なんですか！？まあ・・・いいでしょう・・・それにしても雅さんに喧嘩を売るとは・・・なんとという犬でしょうか・・・

「院長！いつ離婚するんですかあ？私待ちきれませんよお！早く離婚してください！そうすれば私の事を娶って貰えますもん！最高ですよ！尊敬していた雅さんと結婚したいしたいですよお〜！」

とてつもなくアニメ声の五月蠅い声が院内に響き渡りました。

彼女の名前は里中嗣くさとなかみつぐさん、雅さんに憧れ医者になつたお馬鹿さんです。

でもホントは凄い人なんですよ！？犬塚さんもですが雅さんが入っている病院には超エリート並に頭のいい人しか入れないのでそれプラス忍耐能力ですよ・・・下等戦士にはなれないんだよお！つて感じです。それにしても雅撤と結婚するのは無理でしょう・・・夫が自分同様16英雄の生き残りの1人なのですから。

「先生・・・出来た・・・次欲しい・・・私・・・仕事・・・好き・・・院長も・・・犬と嗣も好き・・・だから仕事頂戴・・・いっぱい働くから・・・」

そして最後の1人、幸が薄そうで髪で顔が隠れてしまう程髪が長い女性は、蓮くれんくさんです。雅さんが昔拾った人なので名字も無い、名前も無く雅さんが蓮と名付けたそうです。

それにしても顔を見せませんねえ・・・この中には絶対美人が！居るような気がするだけです・・・すいません・・・

「蓮、お前はもういいぞ？」

お前がなんだかんだ言っただけ働いているしなお前はもう着替えてきていいぞ？

犬塚も里中ももうすぐ終わるだろう？後は二人に任せて風呂でも入ってこい。」

「はあ！？なんで蓮だけ風呂はいれんだよ！俺も帰りた〜い！早く風

呂入って犬とじゃれあいたいぜ畜生！」

「院長！今日も帰りませんよ！私は院長の側にずっといますよ！？寝るときもトイレの時もお着替えの時も夫婦の営みの時も！私は院長と一緒にいます一緒に一生います！それでもって院長を旦那さんから寝取って私がお父さんになります！」

こいつらはいつとも五月蠅い・・・まあその方が活気があっていいんだがクソ五月蠅い・・・  
いつものやるか・・・

深いため息をつく雅さん、何か起こりそうな予感です

「じゃあ後十分でこの仕事できなかつたら、  
犬塚は1週間私のパシリ、里中は総院長の所につれてってあのクソじじいにマツサージだのなんだのしてもらおうか？ええ？それも出来ないというんだったら仕事辞めちまうか、さっさと仕事終わらせろ、早い話そうなたが？」

二人の手の動きが変わりました受験生の猛勉強って感じです。詳しく言おうものなら受験3日くらい前の状態です。そりゃそうでしょう・・・二人とも自分的にもっとも嫌な罰ゲームのようなものなのですから。

「院長・・・私も手伝う・・・」

ボソツと二人を気遣い手伝いの許可を雅さんから貰おうとする蓮さんしかし雅さんは首を横に振りました。

「駄目だ。これは馬鹿二人にやらせる。

その方が私もサボれるし二人の能力も上がると思う、それに蓮は住

み込みだし良く仕事するしでも暗いな501号室の佐藤さんから暗すぎるって苦情がきたぞ？もつと明るくできるといいんだがなあ・・・  
とにかく私と風呂入りたいなら正直に言えよ？後10分はここに居るからな。」

ポツ！つとまるで爆発でもしたかの様に顔を真っ赤にする蓮さん、もしやあなとも・・・ゆ・・・ゲフンゲフン！でも彼女は雅さんを母の様に思っています。それ以上に神の様な存在でもあるのです。

「入りたい・・・洗いつこしたい・・・久々に・・・」

蓮さんのその発言に叫びを上げる者が一人・・・

「ずるいですよお！院長！どういう事ですかあ！？私も院長とお風呂入りたいですよお！蓮羨ましい！羨ましすぎる！この泥棒猫お・・・」

イライラしながら仕事を進める二人、蓮さんは着替えを取りに行きました。

そして十分後・・・

「終わったあゝ！やっと帰れるぜMY HOMEに！院長の仕事終わった後の家は最高だぜえ・・・  
もう俺は帰りますんで！んじゃ！」

ウツヒョー　つと声を出しながら家に帰る犬塚さん、よほど嬉しいんでしょうスキップしながら帰っていきます。しかし・・・仕事を終わって嬉しい犬塚さんに対してふてくされている里中さん、ただ雅さんが大好きなんですか！



に会いたいでしょねえ……

「院長……寂しそう……でも嬉しそうな顔をしてる……」

「そうか……？まあ……息子も1人だけ居るしな……あいつ等は元気にやっているかな」とな

長女が働いてくれているしな……」

やっぱり寂しそうな雅さん、やっぱり忙しくても家族に会いたいでしょか

「院長……休んでいいよ……？」

ここは私と……犬と……嗣で頑張るから……ね……？休んできて……？」

雅さんの表情と心理を読み取る蓮さん、顔が見えているので蓮さんの心理が分かる雅さん、

ふっ……私なんかを心配してくれているのか……こんな気持ちはいつぶりだろうか……懐かしいな……こんな優しい気持ちになれるのは……

「ありがとな……じゃあ今度休みもらうな、

だが私が居なくて大丈夫か？総院長は厳しいぞ？お前は可愛いかな……手も出されるかもしれんぞ？私はけつ触られた時思いつきり顔面に蹴りあびせてやったがな。」

「院長……今度じゃ駄目……明日から行って……三人で頑張るから……お願い……私たちに任せて……院長が大好きだから……院長は私を拾ってくれた……だから……私が今度は院



長に恩返しする・・・私ももう16歳・・・！」

ふっ・・・っと雅さんは笑うと・・・

「そうだな・・・ありがとな蓮・・・」

ギュツと蓮さんを抱きしめました。

蓮さん！？目がうつろいですよ！？大丈夫ですか！？

「――院長・・・！暖かい・・・！あつ・・・でも・・・ちゃん  
と休んでって・・・言わなきゃ・・・！院長お肌スベスベ・・・院  
長の胸大きい・・・院長・・・大好き・・・！――」

「む？寝てしまったか・・・風呂に入れた後ベットにでも運んでや  
るか・・・」

ほんの少しだけ笑みを浮かべながら雅さんは蓮さんの体を丁寧に洗  
い、湯船に入れてあげました

ちなみに此処は病院から少し外れにあります。雅さんが悩める看護  
婦や自分の部下達の為に山を砕いて水脈を発見し、それがたまたま  
温泉だった為そこに温泉施設を作り女医や看護婦のみが入れる温泉  
にしたそうです。

「まあ・・・明日は久し振りに会いにでも行ってやるか・・・久し  
振りに家族に会えるか・・・」

お風呂で雅さんはボソツと呟きました

――朝――

「んじゃ私は1日だけ旅行に行ってくるんで後よろしく」

「ああ！？ふつざけんな！何で俺たちがしご……！」

雅さんに何か言おうとした犬塚さん、里中さんに口を塞がれ伝えたいことを伝えられません

「行つてらしてくださいねえ 院長とは会えないの寂しいんですけどぉ……子供達の顔を見てきてくださいねえ……」

「院長……行つてらっしゃい……」

「おっ、行つてくる」

ありがとうな……お前等……行つてくる……

自分用のへりを飛ばし、望月家に向かう雅さんなのでした。

**番外編：魔王の母（後書き）**

少し長くなりすぎたので続きは魔王の母2にて！

次回はシヨタ鑄鶴も出るかも！？

感想などもおまちしております！

番外編：魔王の母2（前書き）

いつだっただろうか・・・

「この子を生かすためには人の血は駄目なんです！ここに私が極秘に採取した魔王の血があります！この薬と適合さえすれば雅先生の息子さんは必ず！いいえ！絶対に治るはずです！」

私が息子を魔王にしたんだっけか？

覚えてねえや・・・

## 番外編：魔王の母2

「ただいま」・・・」

へりを飛ばし雅さん的には自分で行った方が早かったかな？といった感じで望月家に到着しました。

「おう、おかえり。」

迎えに出てきたのは長女の恐子さん、この時16歳、愛知の不良全員しめ不良のレジエントとして降臨しつつある恐子さんです。

しかし・・・この時も現在と変わらず目付き最悪ですね・・・どうやって高校の面接を受かったんでしようか・・・

雅さんは長女の出迎えに嬉しさを感じつつ顔色一つ変えない雅さん、いつもにまして無表情です。

雅さんは無表情のままリビングに向かいました。  
するとそこには・・・

「お母さん、誕生日3年分プラス院長決定おめでとー！」

雅さんが部屋に入ったとたんパンパン！とクラッカーの鳴る音が響きそこには他の姉妹プラス1人息子が居ました。

「おかえり。」

母さんが居ない間私にご飯を作っていたんだぞ？

铸鶴があれ食べたくないこれ食べたくないなどうるさいつえに・・・私の妹達が手伝ってくれるのはありがたいのだが・・・」

帰ってきたばかりで何が起こっているか分からない雅さんに話しか

けているのは次女の杏奈さん、やっぱり10年前も眼鏡ですね・・・  
・現在中学2年生です。

10年前からキビキビした人で現在成績はずつくと・・・45だそうです。

一番の働き手です。

この時の望月家は彼女が居なければ崩壊していたと言っても過言ではありません

「おか〜さん〜！おっひさ〜

元氣してた〜？」

このいかにもギャルっぽさうなのは3女の穂詰さん、今と変わっているところは・・・お酒を飲んでない所ぐらいですかね？そうか！安奈さんの悩みの種は穂詰さんですね！？10年前からもうすでに心配されているとは・・・これが10年経てば保健医ですよ！？ナイスバディですよ！？世の中どんな仕組みで出来てるんだか・・・

「ちえいあー！」

奥にある第二リビングで喧嘩が始まっていました、そこには10年前のまだ顔も心も幼い二人が居ました。

「お母さん！私の将来の夢が決まったよ！」

目を輝かせながら雅さんを見つめるこの小さな子は望月家4女の真宵さん、今は家に限りなく居ないのですがこの時、12歳小学6年生です。

「ん？何だ？言ってみろ」

「私ね！将軍になるんだ！悪人をいっぱい倒して私が家とか世界を守るの！大好きないーくんもね！そしてお母さんやお姉ちゃん達よりも強くなるの！」

するとその意見に反論する少女が1人、

それにしても広大な夢ですね〜・・・勿論将軍の方ではありませんよ？

「違う！鑄鶴を守るのは私だ！真宵姉にはやらん！どうしても欲しいと言っのなら私から奪ってみる！お〜・・・鑄鶴可愛い〜・・・もう大好き・・・お姉ちゃんが守ってあげるからね〜・・・よしよし〜・・・」

鑄鶴君を抱きしめながら10年前の望月家6女の結さん、相変わらぬのブラコンっぷりです。10年前の8歳からブラコンってどういうことですかっ！説明してくださいよ！

そして冴子さんに抱きしめられ若干息がしづらくて顔色の悪い少年は鑄鶴君、この時6歳ですよ！？皆さん！カメラを用意してください！？特に頭に腐ってという字が入っている人とか！コンプレックスな人とかそんな人にお勧めですよ！？

すいません・・・あまりの可愛さに取り乱してしまいました。

しっかしこの時の鑄鶴君はまるでというよりも女の子です。男の子とは思いたくなくなるぐらいかわゆすです！これはもしや・・・男の・・・ゲフンゲフン！

「ん？そういえば梓とゆりと神奈は？」

「三人とも寝ちゃったよ？梓は多分一緒に寝ちゃったんだろうね、」

そう聞かされると二階の寝室に向かう雅さん、そこには天使が3人

も居ました。

「三人ともよく寝てるな・・・  
いつも帰ってこれなくてすまないな・・・」

天使達3人に少しだけ微笑みながら頭を撫で撫でする雅さん、やっぱり雅さんも立派なお母さんです。

三人は川の字で寝ていて左から、ゆりさん、梓さん、神奈さんの順番で寝ています。

天使が3人揃って寝ています。実に微笑ましい光景ですね・・・雅さんが少しだけでも微笑むわけです

ちなみにゆりさんと神奈さんは二人とも4歳まだひらがなが書けるようになっただくらいです。

梓さんは10歳小学4年生、彼女の部屋は小学校で貰った賞状がたくさん立て掛けてあります。

そろばんだの・・・漢字検定1級だの・・・英語検定1級だの・・・

「さてと・・・何かするか？」

今日と明日の朝までは暇だしな・・・今日くらいはいっぱい遊んでやる。」

何で上から目線なんですか雅さん!?

子供に上から目線ですか!？貴方が一番子供ですよ！精神年齢てきに！

「ん・・・私はじゃあ・・・デスマッチか不良狩り？」

いきなりとてつもなく不気味で全国の不良少年少女の悪寒が止まらなくなるような発言したのは恐子さん、なんていう遊びですかそれ

・  
・



「私は……勉強で……！」

勿論却下、できましたね

そりゃそうですよ遊ぶって言ってるもに勉強！？ある意味安奈さんは天然眼鏡さんです

「キャバクラごっこ的なわ！？私がキャバ嬢役するから！」

さく馬鹿3女はほつといて次行きましょう

「いーくんにいやら……」

駄目ですよ！？

駄目です！すいませんね……さすがにまずいのでカットです。  
真宵さん、あなたただんだけ弟LOVEなんですか！私もそういう姉が欲しかったですよ！というか優しいお姉ちゃん募集なうですよ！

「鑄鶴を開……」

あの……この家には馬鹿ばかりか？と首を傾げる雅さん、勿論鑄鶴君を開発するなんてもっての他です。

というかその二人は弟になんて感情もってんだ羨ましいぜこのやゲフンゲフン

今日は咳が沢山出るんですよホント申し訳ないです

そんな首を傾げた母と姉達を見て考え込む鑄鶴君、可愛らしく悩んでいます。

すると何かひらめいたのか口を開き皆さんに聞こえる様に話し始めました。

「僕はみなでご飯が食べたいな！」

お父さんは居ないけどこんなに家族が揃ったのって久し振りでしょ？だからみなでご飯でも食べたいな〜って・・・

だってお母さん忙しいしさ・・・お父さんも呼んでみたけど来てく  
れるかな〜・・・

今、ブラジルなんだって・・・帰ってこれるかな〜・・・」

その鑄鶴君の家族との数少ない時間を大事にしたい気持ちにに約2  
名以外はじ〜んときています。

じ〜んときてない二人？

恐子さんと雅さんに決まっていますよ！

「そうだな！みなで飯か・・・いいな！うん！私は賛成！大賛成  
だ！」

安奈さんのその言葉にみんながうんうんと頷きます。

「此処が・・・望月雅の・・・ほお〜・・・随分とまあ・・・」

黒衣の男が望月家上空で呟く、そんな

ゾワッ！と雅さんの背筋に悪寒が過ぎる。

――何かいるな・・・こんな時に・・・良い迷惑だ・・・――  
――

「少し外に行って風に当たってくるわ・・・」

お前等はここにいろよ……  
恐子……私に万が一何かあったら何も考えずみんなを連れて走れ  
……  
そこからはお前に任せる」

いつにもなく真面目な雅さん、その態度と表情から何がおこっているのか少しだけ恐子さんは理解しコクツと頷きました。  
玄関を開け雅さんは何か呪文の様なものを呟き望月家の周りに魔法陣の様な英語で書かれた六芒星が現れました。

「何の様だ……？」  
相変わらず気配も消さずに人の家の敷居跨いできやがって……10年ぐらいか……？」

その言葉を聞くと黒衣の男はクスクスと笑いながら雅さんに告げる  
「いえいえ……20年ぶりに御座いますよ……あの頃から20年……あなた様が14歳で全てを失い、全ての魔界軍を黙らせ、カオス様やサタン様とあなた様が拳と拳をぶつけ人間界？を守る為に戦ったあの日から20年ですよ……非常に長い月日が経ちました。」

カオス様も懐かしく思っついていらつしやるに違いありません。「  
「いやあ……懐かしい懐かしい、あの時は私も14歳若くてピチピチで天真爛漫のみやちゃんって呼ばれてたかなあ……」

嘘はやめましょう！  
でも雅さんの子供の頃は目付き以外は完璧……？でした……？  
目付きが悪くても雅さんは結婚しましたしねえ……  
それに人は見た目によらないって言いますから！

「そんな記録はどこにもありませんよ？」

日本書にも日本軍記にも貴方の学校の書類にも世界史にも魔道史の  
もまったく皆無なのですが？そもそも嘘をつくのはねえ・・・？」

ヒツヒツヒツとツボにでもはまったのか声を大きくあげながら笑う  
黒衣の男、

何か・・・何処からともない苛立ちが・・・

「んで？何の用だ？」

魔界の魔王さん直属の最高悪魔さんよ・・・」

「用？貴方の息子を受け取りに駆けさんじました」

「いやあゝ・・・無理だな、

あいつには何の才能もない・・・基礎能力も凡人以下だ・・・魔界  
に連れていっても意味はないと思うぞ？何の才能も無い奴を欲しが  
るのか？」

「いえ？彼はとてつもないものをお持ちでありますよ？」

あなた達夫婦も黙認していたでしょう？自分の唯一の息子がとんで  
もない存在にでもなるかもしれないということを・・・

彼が成長すれば今はまだ小さい力であろうと必ずや膨大なる力にな  
る。

それに彼は何にでもなれます。

戦争があれば戦争の英雄、世界の大魔道や破壊神なんにでもなれる  
のですよ・・・膨大過ぎる力は素晴らしいモノを秘めていますか  
しかあしつ！膨大な力は希望を生む反面絶望を生むその様な膨大な  
力が人間の皆さんの近くにあつたら大変ではありませんか？

それに世界を広い視野で見えてはいかがでしょうか？

この世には塵クズや世界に要らないモノで溢れきっていますよ・・・

それを消すために彼の力が必要なのですよ・・・  
人間で人間を殺せば古来の戦争になるでしょう」

悲痛な声をあげる悪魔はなにやら正しいことを言っているのだろうか・・・

私には分からんな・・・

「私はそうは思わん・・・？」

そんな事考えてみたら途方もない理論や計算がうまれてしまう。

それにそう言つと世界の70億がクズ野郎やゴミ野郎になる。でも私は信じている世界には確かにクズやゴミばかりじゃねえよ・・・  
私は人の力を信じる。

20年前の私が信じてきてきたものを・・・私は信じる・・・」

元16英雄の1人がさういうと黒衣の男は呆れた様な態度を取り黒衣の中から黒く禍々しい剣を取り出し指の変わりの様な指し方で望月雅に向けた

「死すべき者を殺さずして・・・どうする・・・？」

死を恐れず楽々、平和に生きている者どもを殺したくはならないのか・・・？

私ならとうに殺していますねえ！

もう・・・交渉などはどうでもいい・・・貴方を殺して手に入れま  
すよ！

さあ・・・望月家にでも突撃しなさい！」

何処に隠れていたのか沢山の黒衣の男が現れ、望月家への強制突撃を試みる。

しかし・・・その1000〜2000人程の魔族の者の突撃はたった一つの拳で吹き飛ばされる。

「鬼拳骨・・・」

またこいつを出すことになるうとは・・・  
久しく出していなかったからな・・・さて・・・どいつから顔や身体に打撲や瘤を作りてえ奴は・・・」

あまりの敵の強大さと強さに身震いを覚える黒衣の事子の部下達、

「貴様等あ！カオス様に殺されたいか・・・？  
それとも此処で死ぬか？死にたいか！？」

そう黒衣の男が言うと黒衣の兵士達は気を取り戻し1人1人、目の前の強大な敵に突撃する

しかし強大な敵はそれをもろともせずただただ1人1人殴り蹴り踏んでいく

敵わぬ策、無謀な策何かある・・・と強大な母はふと考えた

「――馬鹿だ・・・我が策には真の目的がある！」

我が目的は望月鑄鶴のみだ・・・ということを・・・愚か・・・実に愚か・・・雑兵などカオス様がいくらでも下さる――

その時望月家の裏から激しい爆発音が鳴った・・・

「・・・！？

家がっ！ちっ・・・それが目的か・・・！」

「ああ！そうさ！まんまと掛かってくれたなあ！」

「母さん・・・うっっ・・・」

「ちっ！ 鑄鶴っ！

恐子！くそっ……睡眠薬かつ……！」

拳を構え鑄鶴君の所へ向かおうとする雅さん、その構えを敵が見過ごすはずもありません……

「おおっつと……それ以上動いては自分の息子の血がより流れることとなりますよ？」

額から血を流し、苦悶の表情を浮かべながら必死に悼みと戦っている鑄鶴君、そんな鑄鶴君を見て雅さんは気が気じゃありません、

「離しやがれ……私の息子を……」

もうブチ切れ寸前の雅さん、般若の様な顔立ちになっており怒りの様子は周りからでも分かる程に怒りを迸らせていた。

「では……我々の攻撃をその全身で受けて貰おう……それで解決だ。それを受けぬとなれば……貴様の息子を殺す！」

「分かった……打て……」

戦意を喪失し下を向く雅さん、黒衣の男は笑いながら魔法の様な言葉を呟いていく、少しずつ雅さんの真下の地面に文字が浮かび、雅さん足元を字が包囲していく呪文が唱え終わったのか男は微笑を顔に浮かべると手を掲げた。

「さあ……消えよ……古の遺産！ 万物よ！」

そして見るがいい！ 16英雄の残りの4人の内また1人死ぬ所を！  
では……消えよ……」

男は言いたいことを言ったしかし・・・  
その時・・・空を一つの迅速な影が黒衣の男に抱き抱えられた少年  
を男の脇からさらって行った

「やつと来たか・・・ドアホ・・・」

そついうと影の様な黒に包まれた男が返事をする

「ドアホ！？ドアホって酷くない！？せめてさ！もつとね？ね？励  
ましてくれて良いと思うよ！？」

折角コミケとかゲーセンの予定キャンセルしたのにさ！それに秋葉  
原から飛んできたんだよ！？」

大変だから来たつていうのにさ！何なの！？ホームパーティーですか  
！？ホームパーティーですかこのやろうつ！折角ただの人間には興味  
ありませんつて所見てたのにさ！それにギャルゲーもまだ発売から  
半日でクリアしてないんでよ！？ギャンダムなんて折角1284連  
勝ってきた所なのにつ！」

うわぁ・・・すつごい人出てきた・・・  
とお思いの皆さん・・・許してあげてください・・・あれが望月家  
の大黒柱です。

眼鏡で髪の毛を後ろで束ねています。

まさに・・・ヲタクという生き物です・・・

「ん・・・？誰だ貴様は・・・まあいい・・・対象は取り返させて  
もらおう・・・  
死ぬがいい・・・」

魔法陣は瞬時に眼鏡男の地表に移動しそこで大きな黒煙を上げ瞬時



にして激しく燃えた

「いやあ〜！危ない危ない！

魔法使えるのか〜！流石だね〜！魔法は三次元の異物だからね〜・

・

でもさ？思うんだよね？君なんかが使うよりさ〜！

可愛い美少女が使うべきだと僕はおもうよ！うん！」

「きつ！貴様あ！何者だ・・・

なぜだ！？私の魔法陣は魔界でもトップレベルの威力と命中精度だぞ！？」

驚く黒衣の男、眼鏡の男は眼鏡を拭き拭きしながらクドクドと言いつつ出す・・・

「いやあ〜ww

一応僕も16英雄の1人でさ〜ww

ほ〜んとさ〜ww

世の中おつかしいよね〜ww

20年前まではさ〜ww

一応僕も普通の人間だったんだよww？

今ではさ〜wwヲタクだよ〜ww？

コミケには毎年2回行くしメイド喫茶には毎日行くよ〜ww

いっつも気楽で楽しいよ〜ww？

怖い妻から離れて秋葉で公務してさ〜ww

も〜最高〜ww

けれど・・・苦しみは消えないんだよね〜・・・

君ら魔族も・・・カオスも・・・嫌いかなあ〜・・・

死すべきゴミは君達じゃないかな〜？

だから・・・早く去りなよ・・・鑄鶴の治療したいしさ〜？

それに藤谷霧矢くふじたにきりやゝつてしらない？  
このままだとさ？

ここら一带僕の魔法でぶっ壊すよ？

魔法少女みたいにさwwww

気楽です・・・ものっ・・・凄く気楽です

しかしその裏ではきちんと激昂しているのです  
家を損壊させられ、

汚い自分の敵に娘たちを睡眠薬で眠らされて、

自分の1人だけの息子を傷つけられて・・・

眼鏡の奥から雰囲気とは違う冷淡な目がのぞきます。

「ふん！だまつ・・・」

黒衣の男が伝える言葉を半分伝えたとき黒衣の男の後ろの山脈が消えた

一つの光によつて・・・

眼鏡の男によつて・・・

16英雄の1人によつて・・・

「ちっ！撤退！撤退だ！しかし・・・その者はもう息を吹きかえさ  
ん・・・特殊な毒をと入れておいた

普人では治らぬ死の薬を・・・ではな・・・」

「ふいゝ後は治療ゝww?  
痛いっww!  
痛いよww!」

戦いが終わりギリギリギリと霧谷さんの胸ぐらを掴み歯ぎしりをする雅さん、

そりゃそうですね．．．まあ．．．この馬鹿は妻と離れて居た方がいいと抜かしたのですから．．．

「んで．．．？仕事は．．．？」

胸ぐらを掴みながら視線を上に向け霧谷さんに向かって話す雅さん、夫婦の久し振りの最下位がこれですか！？

まるでからむヤンキーとからまれてるいじめられっ子ですよ！

「仕事ゝww?

サボっちったww

てへっww」

アホを抜かす霧谷さん、テヘペロの悪用ですね．．．日笠陽子さんい謝ってくださいね!?

そして雅さん、殺っちゃって下さい！そのクズ野郎なら一撃でいけますよ！

「．．．．．たく．．．明日から仕事か．．．？」

イライラしつつもそのイライラを抑えながら霧谷さんと話を淡々と始める雅さん、そんな事を気にせず話し出す霧谷さん、なんとマイペース．．．

「明日〜 W W ?  
あるよ〜 W W ?  
今日サボったからさ〜 W W  
社長におつこられル〜 W W」

「お前まじぶつ殺すぞ！  
まあいい・・・私は鑄鶴を病院に連れてく・・・お前は娘達の面倒  
を見ていてくれ・・・  
んじゃ・・・！」

「は〜い W W  
わかりましたー W W！」

「――望月家――」

騒がしい？一日が終わり望月家に平和なお母さんがいませんがお父  
さんが居る日が来ました  
壁はきちんと直したみたいですね

「さあ〜 W W  
娘達〜 W W  
パパが帰ってきましたよ〜 W W  
今日はママはいます〜ん W W  
パパと遊ぼうねえ〜 W W」

「……死ねっ！土に帰れっ！前世の前世からやりなおせっ！  
そしてまた死ねっ！男しか居ない世界に行ってしまえっ！」「」「」

酷い言われようです……

長女から6女まで……もの凄く叫んでいます……恐子さんです  
ら吠えましたよ！？

汚れた大人には触れたくないんでしょうね……

「パパ？」

おかえい

お姉ちゃん達どうかしたの？」

「お姉ちゃん？」

パパはお仕事してて帰って……？

パパだあ」

目を擦りながら6女のゆりさんと7女の神奈さんがお父さんに寝起  
きで近づこうとしましたすると姉達が総動員で二人を止めました

「汚れるぞ！

止めておけっ！

駄目だあいつに近付いては駄目だっ！菌がっ！菌がうつるっ！」

「ひっ……酷いなあ……」

――病院――

「くっ・・・手は・・・尽くした・・・もう・・・鑄鶴は・・・」

涙を流す雅さん・・・鑄鶴君は心肺停止状態で目を開けてくれません・・・

部下の里中さんも犬塚さんも黙り込んでしまっています・・・  
だまりこまず口を開ける人がそこには1人だけ居ました・・・

「院長！諦めないでくださいっ！

ずっと前に院長は言ってた！その子は大切な子っ！院長の大事な人っ！」

そう言うと蓮さんの神がブワツと上に跳ね上がり顔があらわになったのです

「この子を生かすためには人の血は駄目なんです！ここに私が極秘に採取した魔王の血があります！この薬と適合さえすれば雅先生の息子さんは必ず！いいえ！絶対に治るはずです！」

叫ぶ蓮さん、これを使えば鑄鶴を助けられる・・・

でも・・・これを使ったら・・・どうなるか分からない・・・怖い・・・

「院長！女性にもてる院長がどうかしたんですかっ！

早くしてくださいっ！私との結婚も早くしてほしいけどこの子の・・・

自分の息子を救うことはそれより早くしてくださいっ！」

「早くしやがれっ！いつもの面構えはどうしたあっ！

あなたは俺たちの上司で院長なんだから自信持って治しやがれっ！」

「そうだな・・・じゃあ！やるぞっ！」

蓮・・・鑄鶴・・・頼むっ・・・治ってくれっ・・・！

————病院————

「そんな事もあつたな・・・」

コーヒーをすすり飲みながらデスクで資料の管理などを珍しくしている雅さん、今では世界のドクター雅になりました

「ありましたね〜懐かしいですっ！」

「あぁ〜・・・俺が少し荒れてた頃かぁ〜・・・」

「あの時の院長は・・・悲しんでた・・・」

雅さんの前にある3つのデスクには10年前から成長した3人が座っていました

10年経つても・・・こいつ等は  
変わらん・・・家の馬鹿共と同じか・・・

――望月家――

「鑄鶴……食べ物……」

「鑄鶴ー！眼鏡しらないかー!?」

「鑄鶴」

「おっ酒プリーズ」

「お兄ちゃん！ギターどこー!?」

今日も騒がしい望月家、やっぱり鑄鶴君は毎日大変です

「お兄ちゃん！私が料理しておくから！早くみんなのお世話お願い  
っ！」

「ありがとね神奈！」

恐子姉!? ご飯までまってえほしいけど……食べ物……  
はいつポテチでも食べてー!

杏姉！眼鏡は頭の上だよ！

柚希姉！お酒飲み過ぎに注意ね!? 死んじゃうからね!?

ええ〜とゆり！ギターは戸棚の上!

ふう……疲れる……」

鑄鶴君！毎日ご苦労様です!



————魔王科某所————

「結様……？何を見られているのですか……？」

「これか？家族写真……とでもいっておこうか……  
まあ……そんな事は置いておいて……  
さあ……始めようか……」

「はっ……うっ……んっ……！」

————將軍邸————

「ふっ……家族か……」

「將軍？どうかなされたのですか？」

「いや？世界一大好きな者達の事を考えていな……」

————秋葉原————

「うんww！」

それでこそ我が息子あ〜んど娘達だよ〜ww  
今度はいつ帰れるかなあ〜っw

あつ  
w  
w

萌え萌えパフェーっでお願いしまっす〜  
w  
w  
「

番外編：魔王の母2（後書き）

最長記録更新いたしました！  
遅くなつてすいません・・・  
これは3・5巻になります！  
感想等お願いしまっす〜w w

第28話：魔王と機械科会長、三河歩の秘技発動！？（前書き）

ついに敵大将以外を蹴散らしようやく機械科会長を討って終わりか  
と思ったその矢先・・・

機械科会長と交戦中だった普通科最強の男、城屋誠さんが出血多量  
で強制退場に今の普通科に残っているのは駄眼鏡とポニール侍と  
ヘタレ魔王のみ・・・

そして機械科会長は本陣近くのポニール侍の居る所へバーニア  
全開で向かっている。

走る居鶴君！

三河さんを守るのか！

## 第28話：魔王と機械科会長、三河歩の秘技発動！？

「少し遠いな・・・」

やはり誠との戦いに弾薬も装甲耐久力もほぼ底を尽きそうな勢いな・・・

しかし・・・後敵は三人、誠は倒した。

今の普通科では私は倒せまい」

ブツブツと呟きながらバーニアを走らせ本陣近くまで跳ばす苅愛と呼ばれる巨漢の女性はちきれんばかりのバストがこれでもか！と言わんばかりにスーツの胸元をピチピチにしています。

「きついな

やはりこの身体ではいつ破れるか分からんな。

沙耶では小さいな・・・もう少し大きくしろとでも頼むか・・・

さてそんな事を呟いていたらついてしまった。」

普通科本陣に最も近い広場に着いた苅愛さん、

しかし一番本陣に近いはずの広場には人影一つ無くただただ静けさのみが現存していました。

バーニアを解除し周りを見渡しながら敵の存在が無いか確かめる苅愛さん、

やはり人影も気配も無く人1人として見あたりません

でも自分の持っている生徒手帳の地図を独自改造した索敵マップにはちゃんと反応があります。

壊れているのか？と疑いますが残りの敵の数はきちんと表示されています。

でも敵は視認出来ないと見てその場を立ち去ろうとします

「誰も居ないのか？」

「それでは素通りさせてもらおう」

「機械科会長！」

「その首貫ったあつ！」

苺愛さんが立ち去ろうとしたその時、

天井辺りから三河さんが雄叫びを上げながら急降下してきました。

それに対し苺愛さんはその声を瞬時に聴き取り気づかないふりをしました。

「……貰った……！私たちの勝利だ！……」

と瞬時に思った三河さん、しかし……

「攻撃方法と急降下の速さ、奇襲にかける生き様、そして奇襲時間の短さ、

それらは褒めるに値しよう……

しかしな？

奇襲の際には大声を出すことはやめておいた方がいいぞ？

敵に気づかれるうえに隙も多くなる。

これからは気をつけるべきだろう！」

アーマーの手の部分を動かしてその先端についているクローで三河さんをひつかこうとする苺愛さん、

その動きに対し三河さんはクローが当たる寸前で身を翻し見事にクローを回避してみせました。

「私をなめるなっ！」

身を翻しながら苅愛さんの足を木刀で叩こうとしようとする歩さん、苅愛さんはその木刀での打撃攻撃をジャンプしてかわします

「初めての体育大会でこれほどの動きが出来るとは・・・  
普通科にもまだこの様な実力者が居たとはな・・・  
だが・・・褒めてる場合ではないっ！」

そういつて苅愛さんはバーニアを瞬時に稼働させ跳躍し自らの身体を回転させながら三河さんに背中にあるバレットのミサイルを三河さんに撃ち込む

「さて・・・そろそろ行くか」

ミサイルが放たれた後に砂埃が舞い三河さんを確認出来ない状態にしかし、もう改造手帳の地図の中に三河さんの反応はありません

「まだ・・・！終わってはいないっ！」

立ち去ろうとする苅愛さん

しかしいきなり向けられる殺気に気づくそこにはミサイルの弾幕をすべてなぎ払い空中で猛突進してくる三河さんの姿が！

三河さんは持つていた剣で苅愛さんに斬りかかる。  
すると先ほど三河さんがクローを避けた時と同じ避け方を苅愛さんはしてみせた

完璧に避ける苅愛さん、しかし背中バーニアの調子がおかしい事に気づく苅愛さん、

そこには三河さんが先ほど持っていた物と違う剣がバーニアの奥深くにまで刺さっていました

「どこから出したっ!？」  
くそっ!」

慌てて背中中のバーニアを取り外す苺愛さん、その間にも三河さんの攻撃は続く

「これだけは・・・この場では見せたくなかった・・・  
これが私のこれまでの修行の成果!今此処で使う時!」

そういうと宙に舞う三河さんの背後に7本も剣が現れました禍々しい剣、綺麗な剣そして

書物や伝記にのっついていそうな剣までもがあります。

その切っ先は全て苺愛さんに向けられています

「7本剣<セブンスソード>・・・  
これが私の力だっ!」

「7本剣か・・・  
面白いじゃないか・・・

私のバーニアを壊す程の威力があるとは・・・

普通科・・・面白いぞ!

私をもっと楽しませろっ!

全力でいかせてもらおう!」

この陽明学園の体育大会のあまりの楽しさに少し発狂する苺愛さん、胸がブルンブルン揺れています・・・  
色んな意味で会場とかは画面に釘付けです。

「私は負ける訳にはいかないんだ!



ここで貴方を倒し普通科の勝利を貰う！  
その為に私はここで貴方が来るのを待っていた！  
私とこの7本剣で・・・貴方を斬る！」

そう言うと三河さんは苅愛さんに向けて7本剣の内6本を飛ばしその後を自分がついて行く様に突撃を試みるそれに対し苅愛さんはまだ残っている重火器やバズーカを取り付け残弾を気にせず撃ち込んでいくそれを手に持った剣で切り落とし残り6本の剣を操り弾を弾き落とす三河さんもうカメラでは何が起こっているか分からないぐらい二人の戦いの場は砂埃しか舞っていません

「全弾発射させるとは・・・  
普通科の剣士・・・見事だ」

フツとした笑みを浮かべながら自分のアーマーについている重火器ミサイルの弾を撃ち尽くした苅愛さん、砂埃はまだやみません三河さんは無事なのでしょうか・・・

ーーーースタジアム南西廊下側近くーーーー

「はっ・・・はっ・・・  
間に合え・・・運動不足はきついつ！家事をしすぎた！  
家事ばっかしてたから身体がなまったあっ！」

未だ三河さんの場所まで着かない鑄鶴君、  
走りすぎではあはあしています。

順調に走る鑄鶴君、

三河さんの居る方向からとてつもない爆発音が！  
その音にメチャクチャビビる鑄鶴君、しかしその爆発音を聞くと眼の色が変わりました

「歩……！」

メチャクチャカッコイイ目付きになっています。  
これが鑄鶴君ですか……？

—————スタジアム南西中央広場—————

「さてもう終わりか……？」

剣士よ……

死ぬことは無いが……痛みはある、楽にしてやる……

さあ……強制退場だ。」

クローを気絶した三河さんの首に押しつけ戦場ならば確実に一番楽  
などどめの刺し方、

しかし本当に苺愛さんはやってしまうのでしょうかお客さんの中  
には子連れの方や中学生にはまだ早いトドメの刺し方……

苺愛さんはそんな事そっちのけで三河さんの首を刈ろうとする……

会場全員が眼と閉じ耳を塞ぎその時が過ぎるのを待っています

会場は物音一つせず学園内もまるで人っ子1人居ない様な静けさを  
醸し出しています。

風間会長も倒れた普通科の人たちも1人の男が来てくれる事を信じ  
ている

刈愛さんは静けさを堪能しつつにクローをふり上げ三河さんの首も  
とにクローを振り下ろします

その時……

「俺の……幼なじみに手を出してんじゃねえよおっ！」

広場の廊下から人間の速度ではない光よりも速いなにかが刈愛さんの振り下ろすクローが三河さんの首に当たる前に1人の男が刈愛さんのクローをへし折り右手に持っています

そのへし折られクローはその男の憤怒を醸し出すように城屋さんの拳でも三河さんの剣でも切れなかったそのクローがまるで鉄くずの様にへし折られ、たたまれていました。

へし折った男の目はまるで紅葉の様に真っ赤に赤く染まり髪の毛は激しく憤怒を現すように真っ赤に染まっています

「怒らせるな……！」

歩に手を出すな……

俺の大好きな人に手をだすなああああああつっ！」

叫ぶ鑄鶴君やつと来たかと安堵の表情と笑うのを隠せない普通科の皆さん、

憤怒した彼を普通科のみんなは知っています

それは憤怒した理由を知っているから……

鑄鶴君が怒る時、それは自分の大好きな人が傷つけられたとき……それがみんなが知ってる鑄鶴君のいつも側に居る三河さんなら尚更、怒る理由も分かります

鑄鶴君の家族もそれは重々承知の上もちろん中継を観てる雅さんもそうなるわな……って感じて見えています

「お姉ちゃん！お兄ちゃんが！」

動揺する神奈さん、自分の兄が変貌したんです動揺しない方がおか

しいのですが・・・  
お姉さん達は動揺してません

「いや・・・あれがああ馬鹿だろ・・・？」

「まあああなる事は予想していたしな  
まあ母さんと父さんの血をひいているしな・・・」

恐子さんと安奈さんはあれがあいつだからといった感じでコメント  
しています

ゆりさんは絶賛爆睡中です

「これが・・・」

普通科の魔王だともいうのか・・・！？

「今だけはな・・・！」

安心しろ一撃だっ！

一撃でお前に触れず倒してやる・・・」

そう言うと鑄鶴君は手を上に振り上げました  
すると刈愛さんのフルアーマー全てを剥ぎ取り上空で爆撒させまし  
た。

「私のフルアーマーが！？」

「こつもあつさり・・・」

「形勢逆転だな・・・」

さあ終わらせよう降参しろ・・・」

「なぜ・・・トドメをささない・・・？」

「貴方が女性だからだ・・・」

その・・・女性に手をあげるのは嫌だ。

それに貴方の武器は全て壊した・・・

とにかく！女性を殴ったり蹴ったりするのは男としてどうかと思っ  
し・・・

歩は軽傷つばいし・・・

一応許してあげます。

歩を凄いけど金城さんも凄く強い方なのは僕でも分かりますから！」

そう鑄鶴君が言うと、

刈愛さんは諦めたのかまたフツと笑い降参しようと思いました。

しかし・・・降参しようとする刈愛さんが鑄鶴君の目の前から消え  
ていました。

「あれ!？」

刈愛さんっ!？」

正面に刈愛さんは見あたらない

勿論自分の周りを見渡し天井も見渡してみる。

しかし何処にも刈る愛さんは見あたらない

鑄鶴君はまさか・・・と思い自分の視線を下に下げると・・・

「まあくだ!

機械科は負けてないもんっ!」

そこには刈愛さんを小さくし余分では無い脂肪を取り除いた小  
さな小さな刈愛さんらしき人が居ました。

「あっあのね?」

もう終わったんだよ・・・？  
機械科は君1人だからね？  
降参してほしいなあ・・・」

「愛は！愛は降参しないお！  
まだ切り札があるんだお！

それを使えば普通科のお馬鹿さん達なんてイチコロだお！」

呆然とする観客＋鏝鶴君、

幼女です・・・語尾におがつく幼女ですよ・・・？

しかし幼女の愛さんは降参する気配は無く何か暗号の様な言葉をボソボソと呟き始めました

「普通科なんて消えてしまえばいいお！

どうせ負けるんなら道連れだお！」

正直に言おう・・・

彼女はただの幼女ではなあい！

一応会長も出来るハイパー幼女とでも言っておきましょうか・・・  
機械科の皆さんがなにやら慌ただしく騒いでいます

「出るお！

超弩級帆船！アーケルハイン！」

何かこの幼女とんでもない事をしてくれました・・・

なんと・・・機械科の最強兵器とも言われよう超弩級帆船出したで  
はありませんか！

機械科の皆さんが騒いでいたのは超弩級帆船が無いからですね・・・  
！？

超弩級帆船はスタジアムの上に現れ愛さんが合図を始めました

「アーケルハイン！  
目標普通科対機械科のスタジアム！  
みんなまとめて消えるがいいお！  
いけー！アーケルハインー！」

「このままじゃ・・・  
スタジアムどころか学校までも・・・！  
止めてやるっ！  
さあこい！僕が止める！」

「無理だお！  
きみ1人でとめられる訳がないお！  
機械科の逆転勝利だお！」

ルールそっちのけで勝ちを確信する愛さん、  
鏗鶴君は諦めません学校を守る為、会場の人達を守る為、  
自分の後ろに倒れている三河さんを守る為、  
自分の右手に自分の魔王の力的なものや持っている魔力をすべてつ  
ぎ込み

集中します・・・  
自分の右手が熱くなりますそして青白く発光しまぶしすぎる光が右  
腕から何かが放たれる  
その発光の光は超弩級帆船アーケルハインを爆ぜさせ何ものこらぬ  
無の物にした

「はぁ・・・はぁ・・・消えた・・・？」

「そんな・・・  
アーケルハインが・・・」

消された……？  
爆ぜた……？」

絶望にかられる愛さん、最強の超弩級戦艦が破壊されたのですから  
しかしそんな愛さんを見て鑄鶴君は手をさしのべました

「良い勝負だった！」

ありがとう！今度する時も負けないからね？  
今度は何でもありの戦いがいいな！」

とんでもないことを言い出す鑄鶴君、

愛さんはその手を握り少し泣きそうになりながら握手を交わしました

「今度は負けないお……！」

刈愛と沙耶にも言つてく！？」

光が愛さんを包み今度は刈愛さんが出てきました。

「私たちの負けだ

次は多分魔法科戦だろう……

私たちに勝つたんだ絶対に勝利しろよ！

吉報を……？」

望月！？望月！？」

あまりに力を使い力尽きてしまった鑄鶴君、  
いい顔していますが……

刈愛さんの豊満なバストの中に埋もれながら気絶している鑄鶴君、  
普通科の皆さんに殺されますよ……？」

三河さんをラグビーボールの様に抱え鑄鶴君を抱いたまま刈愛さん  
はスタジアムを後にしました。



そこに置いて行かれた男が1人

「ちよ！会長の僕を置いていかないでよ〜！」

体育大会1回戦

普通科対機械科

勝利：普通科

敗戦：機械科

となりました

目を覚ました鑄鶴君はクラスの人にしばかれたとかしばかれてないとか・・・

第28話：魔王と機械科会長、三河歩の秘技発動！？（後書き）

第28話

番外編を書きながら進めていたのですが1週間も更新がおくれてし

まいました・・・

感想等おまちしております！

いつも読んでくれる方々ありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1527x/>

---

優しい魔王の疲れる日々

2011年12月29日16時50分発行